線形代数学 I

近藤弘一

最終更新：平成 20 年 2 月 2 日

目 次

0 まえおき **1**

1 ベクトルと図形 **2**

1.1 ベクトル 2
1.2 位置ベクトル 3
1.3 ベクトルの演算 4
1.4 線形結合 6
1.5 ベクトルの座標 7
1.6 内分点 8
1.7 直線の方程式 10
1.8 $\mathbb{R}^2$ における直線の方程式 10
1.9 $\mathbb{R}^3$ における直線の方程式 14
1.10 演習問題 ~ 直線 16
1.11 内積 18
1.12 ノルム 20
1.13 ベクトルの成す角 22
1.14 ベクトルの直交 23
1.15 内積の幾何学的イメージ 23
1.16 平行四辺形の面積 24
1.17 外積 25
1.18 外積の性質 25
1.19 外積を成分で計算 27
1.20 外積をベクトルで計算 28
1.21 スカラー三重積と平行六面体の体積 29
1.22 演習問題 ~ 内積，ノルム，外積 31
1.23 単位ベクトル 34

1.24 点の直線への正射影 . . . 35
1.25 点と直線との距離 . . . 37
1.26 $\mathbb{R}^3$ における点と直線との距離 . . . 40
1.27 $\mathbb{R}^2$ における点と直線との距離 . . . 42
1.28 演習問題 ~ 単位ベクトル，正射影，点と直線の距離 . . . 43
1.29 平面の方程式 . . . 44
1.30 平面の方程式と法線ベクトル . . . 45
1.31 外積を用いて平面の法線ベクトルを導出 . . . 46
1.32 連立方程式を解いて平面の方程式を導出 . . . 48
1.33 平面と直線の交点 . . . 49
1.34 点の平面への正射影 . . . 50
1.35 点と平面との距離 . . . 51
1.36 $\mathbb{R}^3$ における点と平面との距離 . . . 52
1.37 平面と平面の交線 . . . 53
1.38 ちょっとまとめ . . . 55
1.39 演習問題 ~ 平面 . . . 56

2 行列とベクトル **58**
2.1 行列 . . . 58
2.2 行ベクトル，列ベクトル . . . 59
2.3 行列のいろいろ ~ 零行列，正方行列，対角行列，単位行列 . . . 61
2.4 行列のいろいろ ~ スカラー行列，上三角行列，下三角行列 . . . 62
2.5 転置行列 . . . 62
2.6 行列のいろいろ ~ 対称行列，交代行列 . . . 63
2.7 共役転置行列 . . . 64
2.8 行列のいろいろ ~ エルミート行列，歪エルミート行列 . . . 65
2.9 行列のいろいろ ~ 直交行列，ユニタリー行列，逆行列 . . . 65
2.10 クロネッカーのデルタ . . . 66
2.11 行列の和と差 . . . 67
2.12 行列のスカラー倍 . . . 68
2.13 行列の積 . . . 69
2.14 行列の演算に関する緒性質 . . . 71
2.15 行列の演算に関する注意 . . . 73
2.16 行列の分割 . . . 75
2.17 分割された行列の積 . . . 76
2.18 行列のベクトルへの分割 . . . 79
2.19 演習問題 ~ 行列の演算 . . . 82

3 連立 1 次方程式 **85**
3.1 連立 1 次方程式の行列表現 . . . 85
3.2 ベクトルの 1 次結合と連立 1 次方程式 . . . 87
3.3 連立 1 次方程式の基本変形 . . . 88

3.4 演習問題 ~ 連立 1 次方程式，掃き出し法 93
3.5 連立方程式の解の集合 94
3.6 行列の簡約化 96
3.7 行列の階数 98
3.8 任意定数を含む解をもつ連立 1 次方程式 99
3.9 解が存在しない連立 1 次方程式 100
3.10 解をもつための連立 1 次方程式の条件 101
3.11 同次形の解 103
3.12 ちょっとまとめ 105
3.13 演習問題 ~ 行列の簡約化，階数 109
3.14 基本変形の行列表現 112
3.15 演習問題 ~ 基本変形の行列表現 118
3.16 逆行列 119
3.17 演習問題 ~ 逆行列，行列の正則性 125

4 行列式 **127**
4.1 行列式の導出 127
4.2 置換 129
4.3 多項式の文字の置換 136
4.4 行列式の定義 139
4.5 行列式の行に関する性質 141
4.6 行列式の列に関する性質 143
4.7 行列式の計算 145
4.8 行列式の性質 148
4.9 行列の正則性と行列式 149
4.10 ちょっとまとめ 150
4.11 余因子 151
4.12 余因子展開 152
4.13 演習問題 ~ 行列式，行列式の性質 156
4.14 余因子行列 158
4.15 余因子行列と逆行列 159
4.16 クラメールの公式 162
4.17 行列の簡約化と行列式 164
4.18 ちょっとまとめ 165
4.19 行列式と面積 166
4.20 いろいろな行列式 167
4.21 演習問題 ~ 余因子行列，クラメルの公式 173

0 まえおき

- ベクトルとは向きと大きさをもつ量である．ベクトルは和とスカラー倍の演算が定義されている．ベクトルの性質のみを抽象化すると，いろいろな量がベクトルとみなせる．例えば，列ベクトル $\mathbb{R}^n$，多項式 $\mathbb{R}[x]_n$，連続関数 $C(a,b)$ などがベクトルとみなされる．
- 行列は，ベクトルからベクトルへとの変換 $\boldsymbol{x} \mapsto \boldsymbol{y} = A\boldsymbol{x}$ する操作 (作用，演算，operator) を表す量である．
- 連立 1 次方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ の解法．

1 ベクトルと図形

§ 1.1 ベクトル

ベクトルの定義は主に三つある．

定義 1.1 （ベクトルその 1） 位置の違いを無視して，向きと大きさをもつ量（矢印，有向線分（**oriented segment**））をベクトル（**vector**）という．これに対して方向をもたない普通の量をスカラー（**scalar**）という． □

注意 1.2 （ベクトルの平行移動は同じもの） 始点（**initial point**）A から終点（**terminal point**）B への有向線分を表すベクトルを $\overrightarrow{AB}$ と表記する．ベクトル $\overrightarrow{AB}$ とベクトル $\overrightarrow{PQ}$ とを原点に平行移動したときこれらのベクトルが等しければ，$\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{PQ}$ である．すなわち，ベクトルは平行移動しても同じ量であるとみなす．たくさんある同じベクトルのうち代表して始点が原点にあるものを選ぶ． □

定義 1.3 （ベクトルその 2） 列ベクトル（**column vector**）

$$\begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{bmatrix} \tag{1}$$

と行ベクトル（**row vector**）

$$\begin{bmatrix} a_1 & a_2 & \cdots & a_n \end{bmatrix} \tag{2}$$

を総称してベクトル（**vector**）という．括弧の中の値 $a_1, \cdots, a_n$ をベクトルの成分（**component**）または要素（**element**）という．n 次の列ベクトル全体の集合を $\mathbb{R}^n$ で表す．n 次の行ベクトル全体の集合を $\mathbb{R}_n$ で表す．$\mathbb{R}^n$, $\mathbb{R}_n$ を n 次元実ベクトル空間（n-**dimensional real vector space**）という．また，要素が複素数の場合は $\mathbb{C}^n$, $\mathbb{C}_n$ と表し，n 次元複素ベクトル空間（n-**dimensional complex vector space**）という． □

注意 1.4 （括弧） 行ベクトル，列ベクトルの括弧は，丸い括弧でも角張った括弧でもどちらを使ってもかまわない：

$$\begin{bmatrix} * \\ * \\ \vdots \\ * \end{bmatrix}, \quad \begin{pmatrix} * \\ * \\ \vdots \\ * \end{pmatrix}, \quad \begin{bmatrix} * & * & \cdots & * \end{bmatrix}, \quad \begin{pmatrix} * & * & \cdots & * \end{pmatrix}. \tag{3}$$

□

注意 1.5 （列ベクトル，行ベクトル） n 次の列ベクトルは $n \times 1$ 行列である．n 次の行ベクトルは $1 \times n$ 行列である． □

注意 1.6 （列ベクトル，行ベクトル） 列ベクトル，行ベクトルともに，以下の議論全てに渡って同じ性質をもつ．そのため，基本的にはどちらで議論してもかまわない．しかし，本講義ではベクトルは全て列ベクトルとして取り扱う．なぜなら，線形変換においてベクトルは列ベクトルとして取り扱う方が議論がしやすいためである．さらにいうと，線形変換における性質で，列ベクトルと行ベクトルを使い分けるときもある．位置ベクトル，方向ベクトルは列ベクトルとして取扱い，反変ベクトル（**contravariant vector**）という．法線ベクトルは行ベクトルとして取り扱い，共変ベクトル（**covariant vector**）という． □

定義 1.7 （ベクトルその **3**） ベクトル空間（**vector space**）V の元 $\boldsymbol{v}$ をベトクル（**vector**）という． □

§ 1.2 位置ベクトル

定義 1.8 （位置ベクトル） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 $P(x_1, x_2, \cdots, x_n)$ と原点 $O(0, 0, \cdots, 0)$ より得られるベクトル

$$\boldsymbol{p} = \overrightarrow{OP} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix} \tag{4}$$

を点 P の位置ベクトル（**position vector**）という．点 P とベトクル $\boldsymbol{p}$ を同一視する． □

注意 1.9 （位置ベクトル） 点 P の座標が $(x_1, x_2, \cdots, x_n)$ のときは，$P(x_1, x_2, \cdots, x_n)$ と表記する．点 P の位置ベクトルが $\boldsymbol{p}$ のときは，$P(\boldsymbol{p})$ と表記することにする． □

例 1.10 （位置ベクトルの具体例） 点 $A(1) \in \mathbb{R}^1$ の位置ベクトルは

$$\boldsymbol{a} = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 1 \end{bmatrix} \tag{5}$$

である． □

例 1.11 （位置ベクトルの具体例） 点 $A(1, 1), B(2, -1) \in \mathbb{R}^2$ の位置ベクトルはそれぞれ

$$\boldsymbol{a} = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \overrightarrow{OB} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \tag{6}$$

である． □

例 1.12 （位置ベクトルの具体例） 点 $A(1,2,3) \in \mathbb{R}^3$ の位置ベクトルは

$$\boldsymbol{a} = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix} \tag{7}$$

である．

□

§ 1.3 ベクトルの演算

定義 1.13 （ベクトルの和） ベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c} \in \mathbb{R}^n$ に対して，ベクトルの和（**vector sum**）を

$$\boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} + \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ c_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_1 + b_1 \\ a_2 + b_2 \\ \vdots \\ a_n + b_n \end{bmatrix} \tag{8}$$

と定義する．

□

定義 1.14 （ベクトルのスカラー倍） ベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b} \in \mathbb{R}^n$ とスカラー $\alpha \in \mathbb{R}$ に対して，ベクトルのスカラー倍（**scalar multiple**）を

$$\boldsymbol{b} = \alpha \boldsymbol{a} = \alpha \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha a_1 \\ \alpha a_2 \\ \vdots \\ \alpha a_n \end{bmatrix} \tag{9}$$

と定義する．

□

注意 1.15 （ベクトルの和） ベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$ とそれらの和 $\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}$ を考える．このとき，点 O, $A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$, $C(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})$ は平行四辺形となる．

□

注意 1.16 （ベクトルのスカラー倍） ベクトル $\boldsymbol{a}$ とそのスカラー倍 $\boldsymbol{b} = \alpha\boldsymbol{a}$ を考える．点 $A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$ とする．このとき点 B は直線 OA 上にある．線分 $\overline{OB}$ の長さは線分 $\overline{OA}$ の長さの α 倍である．

□

例 1.17 (ベクトルの和の具体例)

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ -3 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^3 \tag{10}$$

のとき，これらの和は

$$\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ -3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1+2 \\ 0-1 \\ 2-3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 \\ -1 \\ -1 \end{bmatrix} \tag{11}$$

である．

□

例 1.18 (ベクトルのスカラー倍の具体例)

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^3 \tag{12}$$

のとき，$\boldsymbol{a}$ の 2 倍は

$$2\boldsymbol{a} = 2 \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \times 1 \\ 2 \times 0 \\ 2 \times 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ 0 \\ 4 \end{bmatrix} \tag{13}$$

である．

□

§ 1.4 線形結合

定義 1.19 （線形結合） ベクトル $\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}, \boldsymbol{c} \in \mathbb{R}^n$ とスカラー $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ に対して，

$$\boldsymbol{c} = \alpha\,\boldsymbol{a} + \beta\,\boldsymbol{b} \tag{14}$$

を $\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ の 1 次結合または線形結合 (**linear combination**) という．□

注意 1.20 （線形結合） 線形結合 $\boldsymbol{c} = \alpha\boldsymbol{a} + \beta\boldsymbol{b}$ を考える．$A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$, $A'(\alpha\boldsymbol{a})$, $B'(\beta\boldsymbol{b})$, $C(\boldsymbol{c})$ とする．点 A', B' はそれぞれ直線 OA, OB の延長線上にあり，$\overline{OA'} = \alpha\overline{OA}$, $\overline{OB'} = \beta\overline{OB}$ を満す．点 O, A', B', C は平行四辺形となる．□

例 1.21 （線形結合の具体例） ベクトル $\boldsymbol{c} = 2\boldsymbol{a} - 3\boldsymbol{b}$ を考える．原点 O から点 $A(\boldsymbol{a})$ への延長線上の点で，原点との長さが $\overline{OA}$ の 2 倍となる点を A' とする．原点 O から点 $B(\boldsymbol{a})$ とは逆向きにのばした直線上の点で，原点との長さが $\overline{OB}$ の 3 倍となる点を B' とする．点 C は線分 OA', OB' からなる平行四辺形の原点の対角線上の頂点となる．□

定義 1.22 （基本ベクトル） $\mathbb{R}^n$ 空間の座標軸上の点

$$E_1(1,0,0,\cdots,0)\,,\quad E_2(0,1,0,\cdots,0)\,,\quad E_3(0,0,1,\cdots,0)\,,\quad \cdots,\quad E_n(0,0,0,\cdots,1) \tag{15}$$

の位置ベクトル

$$\mathbb{R}^n \ni \boldsymbol{e}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix},\quad \boldsymbol{e}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix},\quad \boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix},\quad \cdots,\quad \boldsymbol{e}_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \tag{16}$$

を $\mathbb{R}^n$ の基本ベクトル (**fundamental vectors**) という．□

例 1.23 （線形結合の具体例） $\mathbb{R}^n$ 空間内の任意の点 $\boldsymbol{x}$ は

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix} = x_1\boldsymbol{e}_1 + x_2\boldsymbol{e}_2 + \cdots x_n\boldsymbol{e}_n \tag{17}$$

であり，$\boldsymbol{e}_1$, $\boldsymbol{e}_2$, $\cdots$, $\boldsymbol{e}_n$ の線形結合で表される．□

§ 1.5 ベクトルの座標

定義 1.24 （ベクトルの座標） 位置ベクトル $\boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^n$ が

$$\boldsymbol{x} = x_1\boldsymbol{e}_1 + x_2\boldsymbol{e}_2 + \cdots x_n\boldsymbol{e}_n \tag{18}$$

と表されるとき，係数の組 $(x_1, x_2, \cdots, x_n)$ を基本ベクトル $\{\boldsymbol{e}_1, \boldsymbol{e}_2, \cdots, \boldsymbol{e}_n\}$ に関するベクトル $\boldsymbol{x}$ の座標（coordinate）という．

また，$\mathbb{R}^n$ の基底（basis）（座標軸と同じ向きのベクトル）$\boldsymbol{u}_1, \boldsymbol{u}_2, \cdots, \boldsymbol{u}_n$ が与えられているとする．位置ベクトル $\boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^n$ が

$$\boldsymbol{x} = y_1\boldsymbol{u}_1 + y_2\boldsymbol{u}_2 + \cdots y_n\boldsymbol{u}_n \tag{19}$$

と表されるとき，係数の組 $(y_1, y_2, \cdots, y_n)$ を基底 $\{\boldsymbol{u}_1, \boldsymbol{u}_2, \cdots, \boldsymbol{u}_n\}$ に関するベクトル $\boldsymbol{x}$ の座標（coordinate）という． □

例 1.25 （ベクトルの座標の具体例） $\mathbb{R}^2$ 空間とその中の点

$$\boldsymbol{c}_1 = 2\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}, \quad \boldsymbol{c}_2 = 3\boldsymbol{a} - \boldsymbol{b}, \quad \boldsymbol{c}_3 = \alpha\boldsymbol{a} + \beta\boldsymbol{b} \quad \in \mathbb{R}^2 \tag{20}$$

を考える．ただし，$\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ は基底であり，

$$\Sigma' = \{\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}\} = \left\{ \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix} \right\} \tag{21}$$

とする．このとき

$$\boldsymbol{c}_1 = \begin{bmatrix} 4 \\ -1 \end{bmatrix} = 4\boldsymbol{e}_1 - \boldsymbol{e}_2\,, \tag{22}$$

$$\boldsymbol{c}_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ -4 \end{bmatrix} = \boldsymbol{e}_1 - 4\boldsymbol{e}_2\,, \tag{23}$$

$$\boldsymbol{c}_3 = \begin{bmatrix} \alpha + 2\beta \\ -\alpha + \beta \end{bmatrix} = (\alpha + 2\beta)\boldsymbol{e}_1 + (-\alpha + \beta)\boldsymbol{e}_2 \tag{24}$$

が成り立つ．ベクトル $\boldsymbol{c}_1, \boldsymbol{c}_2, \boldsymbol{c}_3$ の基本ベクトル

$$\Sigma = \{\boldsymbol{e}_1, \boldsymbol{e}_2\} = \left\{ \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} \right\} \tag{25}$$

に関する座標はそれぞれ $(4, -1)_\Sigma$, $(1, -4)_\Sigma$, $(\alpha + 2\beta, -\alpha + \beta)_\Sigma$ である．ベクトル $\boldsymbol{c}_1, \boldsymbol{c}_2, \boldsymbol{c}_3$ の基底 $\{\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}\}$ に関する座標はそれぞれ $(2, 1)_{\Sigma'}$, $(3, -1)_{\Sigma'}$, $(\alpha, \beta)_{\Sigma'}$ である．

これは次のように考える．$\mathbb{R}^2$ の座標軸を x_1x_2 とする．これとは別の座標軸として y_1y_2 を導入する．原点を通り $\boldsymbol{a}$ と同じ向きの座標軸を y_1 とし，同様に $\boldsymbol{b}$ と同じ向きの座標軸を y_2 とする．座標軸 y_1, y_2 の目盛はそれぞれ $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$ の長さを 1 として書く．このとき点 $C_1(\boldsymbol{c}_1)$, $C_2(\boldsymbol{c}_2)$, $C_3(\boldsymbol{c}_3)$ は座標軸 y_1y_2 上の座標で表すとそれぞれ $(2, 1)_{\Sigma'}$, $(3, -1)_{\Sigma'}$, $(\alpha, \beta)_{\Sigma'}$ となる． □

注意 1.26 （ベクトルの座標） 標準基底 $\{\boldsymbol{e}, \cdots, \boldsymbol{e}_n\}$ における座標 $(x_1, \cdots, x_n)$ はベクトルの成分となる．□

§ 1.6 内分点

定理 1.27 （内分点） 点 $A(\boldsymbol{a}), B(\boldsymbol{b}) \in \mathbb{R}^n$ に対して点 $P(\boldsymbol{p})$ が

$$AP : PB = t : 1-t \tag{26}$$

を満すとき，

$$\boldsymbol{p} = \boldsymbol{p}(t) = \boldsymbol{a} + t(\boldsymbol{b} - \boldsymbol{a}) = (1-t)\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b}\,, \qquad t \in \mathbb{R} \tag{27}$$

が成り立つ．$0 < t < 1$ のとき点 P は点 A, B の内分点（**internally dividing point**）を表し，$t < 0$, $1 < t$ のとき外分点（**externally dividing point**）を表す．□

注意 1.28 （内分点とパラメータ） 端点は $\boldsymbol{p}(0) = \boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{p}(1) = \boldsymbol{b}$ であり，A, B の中点は $\boldsymbol{p}(1/2) = (\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b})/2$ である．□

例 1.29 （内分点の具体例） 点 $A(1,1)$, $B(2,-1) \in \mathbb{R}^2$ を考える．このとき $AP : PB = t : 1-t$ とする内分点 $P(\boldsymbol{p})$ は

$$\boldsymbol{p} = (1-t)\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b} = (1-t)\begin{bmatrix}1\\1\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}2\\-1\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1+t\\1-2t\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1\\1\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}1\\-2\end{bmatrix} \tag{28}$$

と与えられる．点 P の座標を (x, y) とする．このとき

$$\boldsymbol{p} = \begin{bmatrix}x\\y\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1+t\\1-2t\end{bmatrix} \tag{29}$$

より

$$\frac{x-1}{1} = \frac{y-1}{-2} = t \tag{30}$$

が成り立つ．t を消去すると

$$2x + y - 3 = 0 \tag{31}$$

となる．この式は点 A, B を通る $\mathbb{R}^2$ 内の直線の方程式を表す．内分点 P は直線上の点である．□

問 1.30 （**2** 次元空間内の内分点） 点 $A(a_1, a_2)$, $B(b_1, b_2)$ を $AP : PB = t : 1-t$ と内分する点 $P(x, y)$ を求めよ．また，点 A, B を通る直線の方程式を求めよ．□

例 1.31 （内分点の具体例） 点 $A(1,1,1),\ B(2,-1,1) \in \mathbb{R}^3$ を考える．このとき $AP : PB = t : 1-t$ と内分する点 $P(\boldsymbol{p})$ は

$$\boldsymbol{p} = (1-t)\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b} = (1-t)\begin{bmatrix}1\\1\\1\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1+t\\1-2t\\1\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1\\1\\1\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}1\\-2\\0\end{bmatrix} \tag{32}$$

と与えられる．$P(x,y,z)$ とすると $\boldsymbol{p} = \begin{bmatrix}x\\y\\z\end{bmatrix}$ より

$$\frac{x-1}{1} = \frac{y-1}{-2} = t\,, \quad z = 1 \tag{33}$$

が成り立つ．この式は点 $A,\ B$ を通る $\mathbb{R}^3$ 内の直線の方程式を表す． □

定理 1.32 （3 次元空間内の内分点と直線の方程式） 点 $A(a_1,a_2,a_3),\ B(b_1,b_2,b_3) \in \mathbb{R}^3$ を考える．$AP : PB = t : 1-t$ と内分する点を $P(\boldsymbol{p}) = P(x,y,z)$ とする．このとき

$$\boldsymbol{p}(t) = (1-t)\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b} = a + t(\boldsymbol{b}-\boldsymbol{a}) \tag{34}$$

であり，

$$\begin{bmatrix}x\\y\\z\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}a_1\\a_2\\a_3\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}b_1-a_1\\b_2-a_2\\b_3-a_3\end{bmatrix} \tag{35}$$

が成り立つ．点 $A,\ B$ を通る $\mathbb{R}^3$ 内の直線の方程式は

$$\frac{x-a_1}{b_1-a_1} = \frac{y-a_2}{b_2-a_2} = \frac{z-a_3}{b_3-a_3} = t \tag{36}$$

で与えられる． □

注意 1.33 （内分点，外分点が成す集合は 1 次元） パラメータ t が一つ定まれば $\mathbb{R}^n$ 内の点が $\boldsymbol{p}(t) = (1-t)\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b}$ により一つ定まる．t は $\mathbb{R}^1$ 内の全ての点を動く．よって $\mathbb{R}^1$ 内の全ての点と直線 $\boldsymbol{p}(t)$ 上の全ての点は一対一対応する．$\mathbb{R}^1$ は 1 次元の空間であるので直線 $\boldsymbol{p}(t)$ が成す集合もまた 1 次元である． □

§ 1.7 直線の方程式

定義 1.34 (直線)　$\mathbb{R}^n$ 空間内の点 X の位置ベクトルが

$$\boldsymbol{x}(t) = \boldsymbol{x}_0 + t\,\boldsymbol{p}\,, \quad \boldsymbol{x}, \boldsymbol{p}, \boldsymbol{q} \in \mathbb{R}^n\,, \quad \forall t \in \mathbb{R} \tag{37}$$

と表されるとき , 点 X の軌跡を直線 (**line**) という . $\boldsymbol{p}$ を方向ベクトル (**tangent vector**) という .

□

§ 1.8 $\mathbb{R}^2$ における直線の方程式

注意 1.35 ($\mathbb{R}^2$ の直線の方程式)　直線 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_0 + t\boldsymbol{p} \in \mathbb{R}^2$ を考える . このとき

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix}\,, \quad \boldsymbol{x}_0 = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \end{bmatrix}\,, \quad \boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} a \\ b \end{bmatrix} \tag{38}$$

とおく . $\mathbb{R}^2$ の直線の方程式は

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = t \tag{39}$$

と表される . この式は点 $Q(x_0, y_0)$ を通り方向ベクトルが $\boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} a \\ b \end{bmatrix}$ であることが分かり易い形である .

式変形をする . $a' = b,\, b' = -a,\, c' = -a'x_0 - b'y_0$ とおく . すると

$$a'(x - x_0) + b'(y - y_0) = 0 \tag{40}$$

であり , または

$$a'x + b'y + c' = 0 \tag{41}$$

となる . この式は $\boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} a' \\ b' \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b \\ -a \end{bmatrix}$ を用いると

$$\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x} - \boldsymbol{x}_0) = 0 \tag{42}$$

とも表される . $\boldsymbol{x} - \boldsymbol{x}_0 = t\boldsymbol{p}$ であるから , ベクトル $\boldsymbol{n}$ は $\boldsymbol{n} \cdot \boldsymbol{p} = 0$ を満たす . すなわち $\boldsymbol{n}$ は方向ベクトル $\boldsymbol{p}$ と直交する . 方向ベクトルと直交するベクトルを法線ベクトル (**normal vector**) という .

さらに式変形する . $\tilde{a} = -a'/b' = b/a$ とおく . すると

$$y = \tilde{a}(x - x_0) + y_0 \tag{43}$$

と表される . この式は y は x についての 1 次関数であることと , 直線は点 $Q(x_0, y_0)$ を通り傾きが $\tilde{a}$ であることが分かり易い形である .

□

注意 1.36 （$\mathbb{R}^2$ の直線の方程式） $\mathbb{R}^2$ の直線の方程式はいくつかの書き方がある．まず，

$$\frac{x-x_0}{a}=\frac{y-y_0}{b} \tag{44}$$

と書くとき，$\begin{bmatrix}a\\b\end{bmatrix}$ は方向ベクトルを表す．

$$y=ax+b \tag{45}$$

と書くときでは，a は傾きを b は y 切片をそれぞれ表す．

$$ax+by+c=0 \tag{46}$$

と書くときは，$\begin{bmatrix}a\\b\end{bmatrix}$ は法線ベクトルを表す．

$$\frac{x}{a}+\frac{y}{b}=1 \tag{47}$$

と書けば，a は x 切片を b は y 切片をそれぞれ表す． □

例 1.37 （$\mathbb{R}^2$ の直線の方程式の具体例） 点 $A(1,2), B(3,-2)$ を通る直線の方程式を考える．まず

$$\boldsymbol{x}_0=\overrightarrow{OA}=\begin{bmatrix}1\\2\end{bmatrix},\quad \boldsymbol{p}=\overrightarrow{AB}=\overrightarrow{OB}-\overrightarrow{OA}=\begin{bmatrix}3\\-2\end{bmatrix}-\begin{bmatrix}1\\2\end{bmatrix}=\begin{bmatrix}2\\-4\end{bmatrix} \tag{48}$$

とおく．$\boldsymbol{p}$ は方向ベクトルである．直線の方程式のパラメータ表示は

$$\boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}(t)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{p}=\begin{bmatrix}1\\2\end{bmatrix}+t\begin{bmatrix}2\\-4\end{bmatrix}=\begin{bmatrix}2t+1\\-4t+2\end{bmatrix} \tag{49}$$

である．$\boldsymbol{x}=\begin{bmatrix}x\\y\end{bmatrix}$ とおき t を消去すると，直線の方程式の成分表示は

$$\frac{x-1}{2}=\frac{y-2}{-4} \tag{50}$$

であり，変形して

$$2x+y-4=0 \tag{51}$$

である．法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=\begin{bmatrix}2\\1\end{bmatrix}$ である．さらに変形して

$$y=-2x+4 \tag{52}$$

となる．傾きは -2 であり，y 切片は 4 である．さらに変形して

$$\frac{x}{2}+\frac{y}{4}=1 \tag{53}$$

となる．x 切片は 2 であり，y 切片は 4 である． □

例 1.38 （$\mathbb{R}^2$ の直線の方程式の具体例） 点 $A(1,2)$, $B(3,-2)$ を通る直線の方程式を考える．直線の方程式を

$$ax + by = 1 \tag{54}$$

と仮定する．点 A, B は直線上にあるので

$$a + 2b = 1, \qquad 3a - 2b = 1 \tag{55}$$

が成り立つ．この連立方程式を解くと

$$a = \frac{1}{2}, \qquad b = \frac{1}{4} \tag{56}$$

となる．直線の方程式を

$$\frac{x}{2} + \frac{y}{4} = 1 \tag{57}$$

と得る． □

注意 1.39 （$\mathbb{R}^2$ の直線の方程式） 直線は 2 点より定まることと連立方程式の解が一意に定まることとは等価である． □

例 1.40 （直線） 2 点 $A(2,-3)$, $B(-1,1)$ を通る直線を考える．この直線の方向ベクトルは

$$\boldsymbol{p} = \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 2 \\ -3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -3 \\ 4 \end{bmatrix}$$

である．直線の方程式のパラメータ表示は

$$\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix} x(t) \\ y(t) \end{bmatrix} = \boldsymbol{x}_0 + t\boldsymbol{p} = \overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{AB} = \begin{bmatrix} 2 \\ -3 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} -3 \\ 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 - 3t \\ -3 + 4t \end{bmatrix}$$

である．$x = 2 - 3t$, $y = -3 + 4t$ で t を消去すると

$$\frac{x-2}{-3} = \frac{y+3}{4}$$

となる．式変形して

$$4(x-2) + 3(y+3) = 0$$

とする．この式より，この直線は法線ベクトルが

$$\boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} 4 \\ 3 \end{bmatrix}$$

で点 $(2,-3)$ を通る直線である．さらに式変形して一般形で表すと

$$4x+3y+1=0$$

である．また，式変形して

$$y=-\frac{4}{3}x-\frac{1}{3},\qquad \frac{x}{-\frac{1}{4}}+\frac{y}{-\frac{1}{3}}=1$$

とする．直線の傾きは $-\frac{4}{3}$ であり，x 切片は $-\frac{1}{4}$ で y 切片は $-\frac{1}{3}$ である．

次にこの直線と直交し点 $A(2,-3)$ を通る直線を考える．法線ベクトル $\boldsymbol{n}$ が方向ベクトルとるので，法線の方程式は

$$\frac{x-2}{4}=\frac{y+3}{3}$$

である．式変形すれば

$$3(x-2)-4(y+3)=0,\quad 3x-4y-18=0,\quad y=\frac{3}{4}x+\frac{9}{2},\quad \frac{x}{6}+\frac{y}{-\frac{9}{2}}=1$$

と書ける．法線は傾きが $\frac{3}{4}$ で，x 切片が 6 で，y 切片が $-\frac{9}{2}$ で，法線ベクトルが $\begin{bmatrix}3\\-4\end{bmatrix}$ である．

□

§ 1.9 $\mathbb{R}^3$ における直線の方程式

注意 1.41 ($\mathbb{R}^3$ の直線の方程式)　直線 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_0 + t\boldsymbol{p} \in \mathbb{R}^3$ を考える．ここで

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{x}_0 = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix} \tag{58}$$

とおく．$\boldsymbol{x}$ は点 $Q(x_0, y_0, z_0)$ を通り方向ベクトルが $\boldsymbol{p}$ の直線である．成分をまとめて書くと

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_0 + at \\ y_0 + bt \\ z_0 + ct \end{bmatrix} \tag{59}$$

である．これを直線の方程式のパラメータ表示と呼ぶことにする．また，t についてまとめると直線の方程式は

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c} = t \tag{60}$$

と表される．これを $\mathbb{R}^3$ の直線の方程式の成分表示と呼ぶことにする． □

注意 1.42 (直線の方程式の成分表示)　直線の方程式

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c} \tag{61}$$

は 3 変数，2 本の連立方程式であることに注意する． □

問 1.43 (直線の方程式の成分表示)　$\mathbb{R}^n$ の直線の方程式の成分表示を求めよ． □

例 1.44 ($\mathbb{R}^3$ の直線の方程式の具体例)　点 $A(1, 2, -1)$, $B(-1, 3, -2)$ を通る直線の方程式を考える．直線は点 A を通り，方向ベクトルは $\overrightarrow{AB}$ である．すなわち，

$$\boldsymbol{x}_0 = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{p} = \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} -1 \\ 3 \\ -2 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix} \tag{62}$$

とおく．直線の方程式のパラメータ表示は

$$\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_0 + t\boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 - 2t \\ 2 + t \\ -1 - t \end{bmatrix} \tag{63}$$

である．t を消去して直線の方程式の成分表示は

$$\frac{x-1}{-2} = \frac{y-2}{1} = \frac{z+1}{-1} \tag{64}$$

である．この方程式は 3 元 2 連立の方程式であることに注意する．例えば第 $1, 2$ 式と第 $2, 3$ 式の組で連立を組むと

$$\begin{cases} x + 2y - 5 = 0 \\ -y - z + 1 = 0 \end{cases}$$

となる．

□

例 1.45 （$\mathbb{R}^3$ の直線の方程式の具体例） 2 点 $A(1, 1, -2)$, $B(3, 0, 1)$ を通る xyz 空間内の直線を考える．この直線の方向ベクトルは

$$\boldsymbol{p} = \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 3 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{bmatrix}$$

である．直線のパラメータ表示は

$$\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix} x(t) \\ y(t) \\ z(t) \end{bmatrix} = \boldsymbol{x}_0 + t\boldsymbol{p} = \overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{AB} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 + 2t \\ 1 - t \\ -2 + 3t \end{bmatrix}$$

となる．$x = 1 + 2t$, $y = 1 - t$, $z = -2 + 3t$ で t を消去すると，直線の方程式

$$\frac{x-1}{2} = \frac{y-1}{-1} = \frac{z+2}{3}$$

を得る．この方程式は 3 元 2 連立の方程式であることに注意する．例えば第 $1, 2$ 式と第 $2, 3$ 式の組で連立を組むと

$$\begin{cases} -x - 2y + 3 = 0 \\ 3y + z - 1 = 0 \end{cases}$$

となる．

□

§ 1.10 演習問題 ~ 直線

問 1.46 (内分点)　次の内分点，外分点を求めよ．

(1) $\mathbb{R}^2$ の 2 点 $(1,1), (2,3)$ を $1:2$ に内分する点．
(2) $\mathbb{R}^3$ の 2 点 $(1,1,-1), (1,-3,2)$ を $3:2$ に内分する点．
(3) $\mathbb{R}^3$ の 2 点 $(1,4,8), (4,-2,2)$ を $2:3$ に内分する点．
(4) $\mathbb{R}^3$ の 2 点 $(1,4,8), (4,-2,2)$ を $2:1$ に内分する点．
(5) $\mathbb{R}^4$ の 2 点 $(1,1,-1,2), (0,1,-2,5)$ を $2:7$ に内分する点．
(6) $\mathbb{R}^2$ の 2 点 $(1,1), (2,3)$ を $-1:5$ に外分する点．
(7) $\mathbb{R}^3$ の 2 点 $(1,1,-1), (1,-3,2)$ を $3:-2$ に外分する点．
(8) $\mathbb{R}^4$ の 2 点 $(1,1,-1,2), (0,1,-2,5)$ を $-3:4$ に外分する点． □

問 1.47 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　点 $(3,5), (2,-1)$ を通る直線の方程式を求めよ． □

問 1.48 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　点 $(3,5)$ を通り方向ベクトルが $\begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}$ の直線の方程式を求めよ．
□

問 1.49 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　点 $(3,5)$ を通り法線ベクトルが $\begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}$ の直線の方程式を求めよ．
□

問 1.50 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　傾きが 2，y 切片が -1 の直線の方程式を求めよ． □

問 1.51 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　x 切片が 2，y 切片が -1 の直線の方程式を求めよ． □

問 1.52 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　次の $\mathbb{R}^2$ の直線に関して，傾き，y 切片，x 切片，方向ベクトル，法線ベクトルを求めよ．また，この直線に直交し原点を通る法線を求めよ．

(1) $y = 3x - 2$　(2) $3x - 2y + 5 = 0$　(3) 2 点 $(3,2), (1,-2)$ を通る直線
(4) $\dfrac{x-1}{3} = \dfrac{y+2}{2}$　(5) $\dfrac{x}{3} - \dfrac{y}{2} = 1$ □

問 1.53 ($\mathbb{R}^2$ の直線)　次の $\mathbb{R}^2$ の直線をパラメータ表示で表せ．また，直線の方向ベクトル，法線ベクトル，x 切片，y 切片，傾きを求めよ．さらには，この直線に直交し点 $(1,2)$ を通る法線を求めよ．

(1) 点 $(1,-1), (2,3)$ を通る直線　(2) 点 $(0,2), (1,0)$ を通る直線
(3) 点 $(-3,1), (4,2)$ を通る直線　(4) 点 $(2,1), (5,-1)$ を通る直線
(5) $\dfrac{x-2}{2} = \dfrac{y-1}{4}$　(6) $\dfrac{x}{-1} = \dfrac{y+2}{-3}$　(7) $\dfrac{x-5}{-3} = \dfrac{y-3}{5}$
(8) $\dfrac{x+3}{2} = \dfrac{y-1}{-1}$　(9) $y = 2x-1$　(10) $y = -2x+3$　(11) $y = 4x-3$　(12) $y = -3x-5$
(13) $3x+2y+5 = 0$　(14) $-x+y+1 = 0$　(15) $2x-y-2 = 0$　(16) $-x-3y+1 = 0$
(17) $\dfrac{x}{2} + \dfrac{y}{3} = 1$　(18) $\dfrac{x}{-2} + \dfrac{y}{4} = 1$　(19) $\dfrac{x}{-3} + \dfrac{y}{-5} = 1$　(20) $\dfrac{x}{4} + \dfrac{y}{-3} = 1$ □

問 1.54 ($\mathbb{R}^3$ の直線) 点 $(2,1,3)$ を通り方向ベクトルが $\begin{bmatrix} -2 \\ 3 \\ 1 \end{bmatrix}$ の直線の方程式を求めよ．

□

問 1.55 ($\mathbb{R}^3$ の直線) 次の $\mathbb{R}^3$ の直線の方向ベクトルと直線上の点を 1 つ答えよ．

(1) $\dfrac{x+1}{2} = \dfrac{y}{-2} = \dfrac{z+1}{3}$ (2) $\dfrac{x}{-1} = \dfrac{y+2}{2} = \dfrac{z-2}{-1}$ (3) $\dfrac{x}{-2} = y = -z$

(4) $x = 3, \dfrac{y-1}{2} = \dfrac{z+1}{-1}$ (5) $x = 3, y + 2z + 1 = 0$ (6) $y = -1, \dfrac{x+2}{-3} = \dfrac{z}{2}$

(7) $y = -1, 2x + 3z + 4 = 0$ (8) $z = 2, \dfrac{x-1}{2} = \dfrac{y+1}{-3}$ (9) $z = 2, 3x + 2y = 1$ □

問 1.56 ($\mathbb{R}^3$ の直線) 次の 2 点を通る $\mathbb{R}^3$ の直線をパラメータ表示と成分表示で表せ．

(1) 点 $(1,2,-1), (0,2,1)$ (2) 点 $(1,2,-1), (0,1,2)$ (3) 点 $(0,1,2), (-1,2,-1)$

(4) 点 $(4,0,2), (2,-1,0)$ (5) 点 $(0,1,2), (3,-1,0)$ □

問 1.57 ($\mathbb{R}^3$ の直線) $\mathbb{R}^3$ の 3 点 $(-2,4,5), (1,p,2), (0,1,q)$ が，1 直線にあるような p, q の値を求めよ． □

問 1.58 ($\mathbb{R}^3$ の直線) 次の $\mathbb{R}^3$ の直線と直交し点 $(1,2,3)$ を通る直線の方程式を求めよ．また，その交点を求めよ．

(1) $\dfrac{x-1}{2} = \dfrac{y-3}{-1} = \dfrac{z-2}{3}$ (2) $\dfrac{x+2}{-1} = \dfrac{y-1}{2} = \dfrac{z}{-2}$ □

問 1.59 (線形結合)

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ 2 \end{bmatrix} = p \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} + q \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} + r \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

をみたす p, q, r を求めよ． □

§ 1.11 内積

定義 1.60 （内積） $\mathbb{R}^n \ni \boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{bmatrix}, \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{bmatrix}$ に対して

$$\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = (\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}) = \sum_k^n a_k b_k = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \cdots + a_n b_n = \boldsymbol{a}^T \boldsymbol{b} \tag{65}$$

なる二項演算を内積（**inner product**）またはスカラー積（**scalar product**）という．また，$\mathbb{C}^n \ni \boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ に対しては

$$\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = (\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}) = \sum_k^n a_k \overline{b}_k = a_1 \overline{b}_1 + a_2 \overline{b}_2 + \cdots + a_n \overline{b}_n = \boldsymbol{a}^T \overline{\boldsymbol{b}} \tag{66}$$

と定義する．

□

定義 1.61 （複素数） 複素数（**complex number**）とは，実数 a, b に対して $z = a + ib$ で定まる数である．ただし i は $i^2 = -1$ をみたし，虚数単位（**imaginary unit**）と呼ぶ．a を実部（**real part**）といい $a = \mathrm{Re}(z)$ と表す．b を虚部（**imaginary part**）といい $b = \mathrm{Im}(z)$ と表す．虚部が $\mathrm{Im}(z) = 0$ のとき z は実数（**real number**）といい，実部が $\mathrm{Re}(z) = 0$ のとき z は純虚数（**pure imaginary number**）という．複素数全体の集合を $\mathbb{C}$ と表す．実部 $\mathrm{Re}(z)$ を横軸に虚部 $\mathrm{Im}(z)$ を縦軸にとることできる集合 $\mathbb{C}$ の平面を複素平面（**complex plane**）と呼ぶ．複素平面の横軸を実軸（**real axis**）といい，縦軸を虚軸（**imaginary axis**）という．また，複素数 $z = a + ib$ に対して複素数 $\overline{z} = a - ib$ を z の複素共役（**complex conjugate**）という．実数 $|z| = \sqrt{z\overline{z}} = \sqrt{a^2 + b^2}$ を z の絶対値（**absolute value**）または大きさ（**modulus**）という．実数 $\arg z = \arctan(b/a)$ を z の偏角（**argument**）という．$|z|$ は複素平面上で原点 0 と z との距離を表し，$\arg z$ は点 $0, z$ を通る直線と実軸とのなす角を表す．

□

定理 1.62 （複素数の性質） 複素数 z, w に対して次の性質が成り立つ：

(i) $\overline{z + w} = \overline{z} + \overline{w}$ (ii) $\overline{zw} = \overline{z}\,\overline{w}$ (iii) $|z + w| \leq |z| + |w|$ (iv) $|zw| = |z||w|$

(v) $|z|^2 = z\overline{z}$ (vi) $\mathrm{Re}(z) = \dfrac{z + \overline{z}}{2}$ (vii) $\mathrm{Re}(z) = \dfrac{z - \overline{z}}{2i}$ (viii) $z - \overline{z} = 0 \Leftrightarrow z$ は実数

(ix) $z + \overline{z} = 0 \Leftrightarrow z$ は純虚数

□

例 1.63 （内積の具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^2 \tag{67}$$

の内積は

$$\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = a_1 b_1 + a_2 b_2 = 1 \times 2 + 1 \times (-1) = 1 \tag{68}$$

である．

□

例 1.64 （内積の具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^3 \tag{69}$$

の内積は

$$\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = a_1 b_1 + a_2 b_2 + a_3 b_3 = 1 \times 2 + 1 \times (-1) + 1 \times 1 = 2 \tag{70}$$

である．

□

例 1.65 （内積の具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1+i \\ 1-i \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2-2i \\ -1+i \\ -i \end{bmatrix} \in \mathbb{C}^3 \tag{71}$$

の内積は

$$\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = a_1 \overline{b}_1 + a_2 \overline{b}_2 + a_3 \overline{b}_3 = (1+i)(2+2i) + (1-i)(-1-i) + 1 \cdot i = -2 + 3i \tag{72}$$

である．

□

定理 1.66 （内積の性質）

(i) $(\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b}) \cdot \boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \cdot (\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c})$（結合則）

(ii) $(\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}) \cdot \boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c} + \boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c}$（分配則）

(iii) $(\alpha \boldsymbol{a}) \cdot \boldsymbol{b} = \alpha (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b})$（スカラー倍の結合則）

(iv) $\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = \overline{\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{a}}$（交換則）

(v) $\boldsymbol{a} \neq \boldsymbol{0}$ のとき $\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{a} > 0$（内積の非負性）

□

問 1.67 （内積の性質） これを示せ．

□

§ 1.12 ノルム

定義 1.68 （ノルム） ベクトル $\boldsymbol{a} \in \mathbb{R}^n$ に対して，

$$\|\boldsymbol{a}\| = \sqrt{\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{a}} = \sqrt{\sum_{k=1}^{n} a_k^2} \tag{73}$$

をベクトル $\boldsymbol{a}$ のノルム（**norm**）または長さ（**length**）という．また，ベクトル $\boldsymbol{a} \in \mathbb{C}^n$ に対しては

$$\|\boldsymbol{a}\| = \sqrt{\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{a}} = \sqrt{\sum_{k=1}^{n} a_k \overline{a_k}} = \sqrt{\sum_{k=1}^{n} |a_k|^2} \tag{74}$$

と定義する． □

例 1.69 （ノルムの具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^2 \tag{75}$$

のノルムはそれぞれ

$$\|\boldsymbol{a}\| = \sqrt{\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{a}} = \sqrt{1 \times 1 + 1 \times 1} = \sqrt{2}, \tag{76}$$

$$\|\boldsymbol{b}\| = \sqrt{\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{b}} = \sqrt{2 \times 2 + (-1) \times (-1)} = \sqrt{5} \tag{77}$$

である． □

例 1.70 （ノルムの具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^3 \tag{78}$$

のノルムはそれぞれ

$$\|\boldsymbol{a}\| = \sqrt{\sum_{k=1}^{3} a_k^2} = \sqrt{1^2 + 1^2 + 1^2} = \sqrt{3}, \tag{79}$$

$$\|\boldsymbol{b}\| = \sqrt{\sum_{k=1}^{3} b_k^2} = \sqrt{2^2 + (-1)^2 + 1^2} = \sqrt{6} \tag{80}$$

である． □

例 1.71 （ノルムの具体例） ベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1+i \\ 1-i \\ i \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2-2i \\ -1 \\ -i \end{bmatrix} \in \mathbb{C}^3 \tag{81}$$

のノルムはそれぞれ

$$\|\boldsymbol{a}\| = \sqrt{\sum_{k=1}^{3} |a_k|^2} = \sqrt{|1+i|^2 + |1-i|^2 + |i|^2} = \sqrt{(1^2+1^2) + (1^2+(-1)^2) + 1} = \sqrt{5}, \tag{82}$$

$$\|\boldsymbol{b}\| = \sqrt{\sum_{k=1}^{3} |b_k|^2} = \sqrt{|2-2i|^2 + |-1|^2 + |-i|^2} = \sqrt{(2^2+(-2)^2) + 1 + 1} = \sqrt{10} \tag{83}$$

である．

□

定理 1.72 （ノルムの性質） シュバルツの不等式（**Schwartz' inequality**）：

$$|\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b}| \leq \|\boldsymbol{a}\| \|\boldsymbol{b}\|, \quad \boldsymbol{a}, \boldsymbol{b} \in \mathbb{R}^n \tag{84}$$

三角不等式（**triangle inequality???**）：

$$\|\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}\| \leq \|\boldsymbol{a}\| + \|\boldsymbol{b}\|, \quad \boldsymbol{a}, \boldsymbol{b} \in \mathbb{R}^n \tag{85}$$

□

問 1.73 （ノルムの性質） 次の関係式を示せ．

(1) $\|\boldsymbol{a} - \boldsymbol{b}\|^2 + \|\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}\|^2 = 2(\|\boldsymbol{a}\|^2 + \|\boldsymbol{b}\|^2)$

(2) $(\boldsymbol{a} - \boldsymbol{b}) \cdot (\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}) = \|\boldsymbol{a}\|^2 - \|\boldsymbol{b}\|^2$

(3) $\|\boldsymbol{a} \pm \boldsymbol{b}\|^2 = \|\boldsymbol{a}\|^2 + \|\boldsymbol{b}\|^2 \pm 2\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b}$

(4) $\left\| \dfrac{\boldsymbol{a}}{\|\boldsymbol{a}\|^2} \pm \dfrac{\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{b}\|^2} \right\|^2 = \dfrac{\|\boldsymbol{a} \pm \boldsymbol{b}\|^2}{\|\boldsymbol{a}\|^2 \|\boldsymbol{b}\|^2}$

□

§ 1.13 ベクトルの成す角

定義 1.74 （ベクトルの成す角） $\mathbb{R}^n \ni \boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ に対して

$$\cos\theta = \frac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|} \tag{86}$$

により得られる θ をベクトル $\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ との成す角(**angular**)という．$\cos\theta$ を方向余弦(**direction cosine**) という．

□

注意 1.75 （内積とノルムの比） シュバルツの不等式より

$$-1 \leq \frac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|} \leq 1 \tag{87}$$

となることに注意する．

□

例 1.76 （成す角の具体例） 2 つのベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \quad \in \mathbb{R}^2 \tag{88}$$

を考える．このとき方向余弦は

$$\cos\theta = \frac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|} = \frac{1}{\sqrt{2}\sqrt{5}} = \frac{1}{\sqrt{10}} \tag{89}$$

となるので，成す角は

$$\theta = \arccos\frac{1}{\sqrt{10}} \simeq 0.4\pi \simeq 72^\circ \tag{90}$$

である．

□

例 1.77 （成す角の具体例） 2 つのベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} \quad \in \mathbb{R}^3 \tag{91}$$

を考える．このとき方向余弦は

$$\cos\theta = \frac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|} = \frac{2}{\sqrt{3}\sqrt{6}} = \frac{\sqrt{2}}{3} \tag{92}$$

となるので，成す角は

$$\theta = \arccos\frac{\sqrt{2}}{3} \simeq 0.34\pi \simeq 62^\circ \tag{93}$$

である．

□

§ 1.14 ベクトルの直交

定義 1.78 （ベクトルの直交） $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=0$ のとき $\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ は直交する（orthogonal）という．このとき $\boldsymbol{a}\perp\boldsymbol{b}$ と表記する．

□

例 1.79 （ベクトルの直交の具体例）

$$\mathbb{R}^2\ni\boldsymbol{a}=\begin{bmatrix}1\\1\end{bmatrix},\quad \boldsymbol{b}=\begin{bmatrix}1\\-1\end{bmatrix} \tag{94}$$

を考える．このとき

$$\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=1\times1+1\times(-1)=0 \tag{95}$$

が成り立つ．$\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ は互いに直交する．

□

例 1.80 （ベクトルの直交の具体例）

$$\mathbb{R}^n\ni\boldsymbol{e}_1=\begin{bmatrix}1\\0\\0\\\vdots\\0\end{bmatrix},\quad \boldsymbol{e}_2=\begin{bmatrix}0\\1\\0\\\vdots\\0\end{bmatrix},\quad \boldsymbol{e}_3=\begin{bmatrix}0\\0\\1\\\vdots\\0\end{bmatrix},\quad \cdots,\quad \boldsymbol{e}_n=\begin{bmatrix}0\\0\\\vdots\\0\\1\end{bmatrix} \tag{96}$$

を考える．このとき $i,j=1,2,\cdots,n$ に対して

$$\boldsymbol{e}_i\cdot\boldsymbol{e}_j=\delta_{ij}=\begin{cases}1 & (i=j)\\ 0 & (i\neq j)\end{cases} \tag{97}$$

が成り立つ．よって $\boldsymbol{e}_1,\boldsymbol{e}_2,\cdots,\boldsymbol{e}_n$ は互いに直交する．

□

§ 1.15 内積の幾何学的イメージ

注意 1.81 （ベクトルの内積の図説） ベクトル $\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ の成す角を θ とするとき

$$\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|\cos\theta=(\|\boldsymbol{a}\|\cos\theta)(\|\boldsymbol{b}\|) \tag{98}$$

が成り立つ．すなわち，辺の長さが $\|\boldsymbol{a}\|\cos\theta$ と $\|\boldsymbol{b}\|$ の長方形の面積を表す．角度 θ の値により面積は変化する．$\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ とが同じ向きのとき，すなわち $\theta=0$ のときは，面積は最大値をとり $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|$ で与えられる．$\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ とが直交し $\theta=\pi/2$ のときは，面積は最小値をとり $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=0$ で与えられる．

□

§ 1.16 平行四辺形の面積

定理 1.82 （平行四辺形の面積） $\mathbb{R}^2$ 内の点 O, $A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$, $D(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})$ を考える．このとき平行四辺形 $OADB$ の面積は

$$S = \mathrm{abs}\left(\begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix}\right) = |a_1 b_2 - a_2 b_1| \,, \quad \boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \end{bmatrix} \,, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \end{bmatrix} \tag{99}$$

で与えられる．ただし $\mathrm{abs}(x) = |x|$ とする． □

問 1.83 （平行四辺形の面積） これを証明せよ．

（証明その 1）角度 $\theta = \angle AOB$ とする．平行四辺形の面積は底辺の長さ $\|\boldsymbol{a}\|$ と高さ $\|\boldsymbol{b}\| \sin\theta$ を掛けたものであるので，これを計算すると

$$S = \|\boldsymbol{a}\| \left(\|\boldsymbol{b}\| \sin\theta\right) = \|\boldsymbol{a}\| \|\boldsymbol{b}\| \sin\theta = \|\boldsymbol{a}\| \|\boldsymbol{b}\| \sqrt{1 - \cos^2\theta} \tag{100}$$

$$= \sqrt{\|\boldsymbol{a}\|^2 \|\boldsymbol{b}\|^2 - \left(\|\boldsymbol{a}\| \|\boldsymbol{b}\| \cos\theta\right)^2} = \sqrt{(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{a})(\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{b}) - (\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b})^2} \tag{101}$$

$$= \sqrt{({a_1}^2 + {a_2}^2)({b_1}^2 + {b_2}^2) - (a_1 b_1 + a_2 b_2)^2} = \sqrt{{a_1}^2 {b_2}^2 - 2 a_1 a_2 b_1 b_2 + {a_2}^2 {b_1}^2} \tag{102}$$

$$= \sqrt{(a_1 b_2 - a_2 b_1)^2} = |a_1 b_2 - a_2 b_1| \tag{103}$$

を得る．

（証明その 2）$\mathbb{R}^3$ のベクトル

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ 0 \end{bmatrix} \,, \qquad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ 0 \end{bmatrix} \,, \qquad \boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ c_3 \end{bmatrix} \tag{104}$$

が

$$\boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} \tag{105}$$

を満すとする．このとき

$$c_3 = \begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix} \tag{106}$$

が成り立つ．$\|\boldsymbol{c}\| = |c_3|$ はベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$ がなす平行四辺形の面積に等しい． □

§ 1.17 外積

定義 1.84 （外積） $\mathbb{R}^3 \ni \boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}, \boldsymbol{c}$ に対して，外積 **(outer product)** またはベクトル積 **(vector product)** は

$$\boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} \tag{107}$$

と表記する二項演算である．$\boldsymbol{c}$ の長さは $\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\| \sin\theta$ であり，$\boldsymbol{c}$ の向きは $\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ に右手系で直交する方向である．

□

注意 1.85 （外積の長さ） $\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}$ の長さは O, $A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$, $D(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})$ を頂点とする平行四辺形の面積である．

□

注意 1.86 （右手系） 3 次元空間内の直交する座標軸 x, y, z を考える．軸のとり方は二通り存在する．親指，人差指，中指を互いに直交するように曲げる．このとき，これらの指の向きをそれぞれ x 軸，y 軸，z 軸の向きとする．右手の指に対応させるときと，左手の指に対応させるときでは生成される座標軸は異なる．それぞれ右手系，左手系と呼ぶ．通常は右手系を使うことが多い．

□

注意 1.87 （外積の向き） 外積 $\boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}$ では右手の親指，人差指，中指と $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c}$ を対応させる．

□

§ 1.18 外積の性質

定理 1.88 （外積の性質）

(i) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \times \boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times (\boldsymbol{b} \times \boldsymbol{c})$（結合則）

(ii) $\boldsymbol{a} \times (\boldsymbol{b}+\boldsymbol{c}) = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} + \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{c}$, $(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}) \times \boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{c} + \boldsymbol{b} \times \boldsymbol{c}$（分配則）

(iii) $(\alpha\boldsymbol{a}) \times \boldsymbol{b} = \alpha(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) = \boldsymbol{a} \times (\alpha\boldsymbol{b})$（スカラー倍の結合則）

(iv) $\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} = -\boldsymbol{b} \times \boldsymbol{a}$（交換則）

(v) $\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{a} = \boldsymbol{0}$

(vi) $\boldsymbol{a} \parallel \boldsymbol{b} \Leftrightarrow \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} = \boldsymbol{0}$

□

問 1.89 （外積の性質） これを示せ．

（証明）(iv) 積の順を入れ換えると向きが反対向きになるため．(v) 自分自身との角度は $\theta = 0$ であるから長さは 0 となり，外積は $\boldsymbol{0}$ である．(vi) $\boldsymbol{a}$ と $\boldsymbol{b}$ が並行なとき $\theta = 0$ であるから長さは 0 となり，外積は $\boldsymbol{0}$ である．

□

注意 1.90 （内積の性質） 外積の性質と内積の性質の違いに注意する：

(i) $\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = \boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{a}$.

(ii) $\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{a} = \|\boldsymbol{a}\|^2$.

(iii) $\boldsymbol{a} \perp \boldsymbol{b} \Leftrightarrow \boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b} = 0$.

□

問 1.91 （外積の性質） 次の関係式を示せ．

(1) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \cdot \boldsymbol{a} = 0$ (2) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \cdot \boldsymbol{b} = 0$ (3) $(\boldsymbol{a} - \boldsymbol{b}) \times (\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}) = 2(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b})$

(4) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \times \boldsymbol{c} = (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c})\boldsymbol{b} - (\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c})\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{a} \times (\boldsymbol{b} \times \boldsymbol{c}) = (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c})\boldsymbol{b} - (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b})\boldsymbol{c}$. **これをベクトル 3 重積 (vector triple product) またはラグランジュの公式 (Lagrange's formula) という．**

(5) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \times \boldsymbol{c} + (\boldsymbol{b} \times \boldsymbol{c}) \times \boldsymbol{a} + (\boldsymbol{c} \times \boldsymbol{a}) \times \boldsymbol{b} = \boldsymbol{0}$. **これをヤコビの公式 (Jacobi's formula) という．**

(6) $(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \cdot (\boldsymbol{c} \times \boldsymbol{d}) = (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c})(\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{d}) - (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{d})(\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c})$

(7) $\boldsymbol{a} \cdot (\boldsymbol{b} \times (\boldsymbol{c} \times \boldsymbol{d})) = (\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \cdot (\boldsymbol{c} \times \boldsymbol{d}) = \begin{vmatrix} \boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c} & \boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c} \\ \boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{d} & \boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{d} \end{vmatrix}$ □

§ 1.19 外積を成分で計算

注意 1.92 （外積の成分表示） $\mathbb{R}^3$ のベクトル $\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ を xy 平面上とする．すなわち，$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ 0 \end{bmatrix}, \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ 0 \end{bmatrix}$ とおく．このとき，4 点 $O, A(\boldsymbol{a}), C(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}), B(\boldsymbol{b})$ からなる平行四辺形の面積は $S = \begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix}$ である．ここで符合は $\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}$ の向きに正とする．外積 $\boldsymbol{c} = \boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}$ は z 軸と同じ向きで大きさは S となるで，

$$\boldsymbol{c} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ S \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix} \end{bmatrix}$$

と得られる．

□

定理 1.93 （外積の成分表示） $\mathbb{R}^3$ のベクトル $\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{bmatrix}, \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$ に対して，

$$\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} a_2b_3 - a_3b_2 \\ a_3b_1 - a_1b_3 \\ a_1b_2 - a_2b_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \begin{vmatrix} a_2 & b_2 \\ a_3 & b_3 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} a_3 & b_3 \\ a_1 & b_1 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix} \end{bmatrix} = \begin{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 & a_1 & b_1 \\ \boldsymbol{e}_2 & a_2 & b_2 \\ \boldsymbol{e}_3 & a_3 & b_3 \end{vmatrix} \tag{108}$$

が成り立つ．

□

問 1.94 （外積の成分表示） これを示せ．

□

例 1.95 （外積の計算例） $\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix}, \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 4 \\ 5 \\ 6 \end{bmatrix}$ の外積は

$$\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} = \begin{vmatrix} 2 & 5 \\ 3 & 6 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 + \begin{vmatrix} 3 & 6 \\ 1 & 4 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_2 + \begin{vmatrix} 1 & 4 \\ 2 & 5 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_3 = -3\boldsymbol{e}_1 + 6\boldsymbol{e}_2 - 3\boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} -3 \\ 6 \\ -3 \end{bmatrix} \tag{109}$$

である．

□

§ 1.20 外積をベクトルで計算

例 1.96 （外積の計算例） $\mathbb{R}^3$ の軸 x_1, x_2, x_3 と同じ向きの単位ベクトル

$$\boldsymbol{e}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{e}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{e}_1 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \tag{110}$$

を考える．このとき

$$\boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_1 = \boldsymbol{0}, \quad \boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_2 = \boldsymbol{0}, \quad \boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_3 = \boldsymbol{0}, \tag{111}$$

$$\boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_2 = \boldsymbol{e}_3, \quad \boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_3 = \boldsymbol{e}_1, \quad \boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_1 = \boldsymbol{e}_2, \tag{112}$$

$$\boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_1 = -\boldsymbol{e}_3, \quad \boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_2 = -\boldsymbol{e}_1, \quad \boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_3 = -\boldsymbol{e}_2 \tag{113}$$

が成り立つ．

□

例 1.97 （外積の計算例）

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix} = \boldsymbol{e}_1 + 2\boldsymbol{e}_2 + 3\boldsymbol{e}_3, \quad \boldsymbol{b} = \begin{bmatrix} 4 \\ 5 \\ 6 \end{bmatrix} = 4\boldsymbol{e}_1 + 5\boldsymbol{e}_2 + 6\boldsymbol{e}_3 \tag{114}$$

を考える．このとき外積は

$$\begin{aligned}
\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b} &= (\boldsymbol{e}_1 + 2\boldsymbol{e}_2 + 3\boldsymbol{e}_3) \times (4\boldsymbol{e}_1 + 5\boldsymbol{e}_2 + 6\boldsymbol{e}_3) && (115)\\
&= 4\boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_1 + 5\boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_2 + 6\boldsymbol{e}_1 \times \boldsymbol{e}_3 && (116)\\
&\quad + 8\boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_1 + 10\boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_2 + 12\boldsymbol{e}_2 \times \boldsymbol{e}_3 && (117)\\
&\quad + 12\boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_1 + 15\boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_2 + 18\boldsymbol{e}_3 \times \boldsymbol{e}_3 && (118)\\
&= 4(\boldsymbol{0}) + 5\boldsymbol{e}_3 + 6(-\boldsymbol{e}_2) && (119)\\
&\quad + 8(-\boldsymbol{e}_3) + 10(\boldsymbol{0}) + 12\boldsymbol{e}_1 && (120)\\
&\quad + 12\boldsymbol{e}_2 + 15(-\boldsymbol{e}_1) + 18(\boldsymbol{0}) && (121)\\
&= -3\boldsymbol{e}_1 + 6\boldsymbol{e}_2 - 3\boldsymbol{e}_3 && (122)\\
&= \begin{bmatrix} -3 \\ 6 \\ -3 \end{bmatrix} && (123)
\end{aligned}$$

となる．

□

§ 1.21 スカラー三重積と平行六面体の体積

問 1.98 （スカラー三重積） すべての $\mathbb{R}^3$ のベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c}$ に対して

$$(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\cdot(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})=(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a})\cdot\boldsymbol{b} \tag{124}$$

が成り立つことを示せ．

□

定義 1.99 （スカラー三重積） スカラー三重積 (scalar triple vector) を

$$[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]=(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\cdot(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})=(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a})\cdot\boldsymbol{b} \tag{125}$$

と定義する．

□

定理 1.100 （スカラー三重積の値）

$$[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]=\begin{vmatrix}a_1 & a_2 & a_3\\ b_1 & b_2 & b_3\\ c_1 & c_2 & c_3\end{vmatrix} \tag{126}$$

□

問 1.101 （スカラー三重積の値） これを示せ．

（証明）

$$(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\begin{vmatrix}a_2 & a_3\\ b_2 & b_3\end{vmatrix}c_1-\begin{vmatrix}a_1 & a_3\\ b_1 & b_3\end{vmatrix}c_2+\begin{vmatrix}a_1 & a_2\\ b_1 & b_2\end{vmatrix}c_3=\begin{vmatrix}c_1 & c_2 & c_3\\ a_1 & a_2 & a_3\\ b_1 & b_2 & b_3\end{vmatrix}=\begin{vmatrix}a_1 & a_2 & a_3\\ b_1 & b_2 & b_3\\ c_1 & c_2 & c_3\end{vmatrix}. \tag{127}$$

□

問 1.102 （外積の性質） 次の関係式を示せ．

(1) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\times(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d})=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{d}]\boldsymbol{c}-[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]\boldsymbol{d}$

(2) $[\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b},\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c},\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a}]=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]^2$

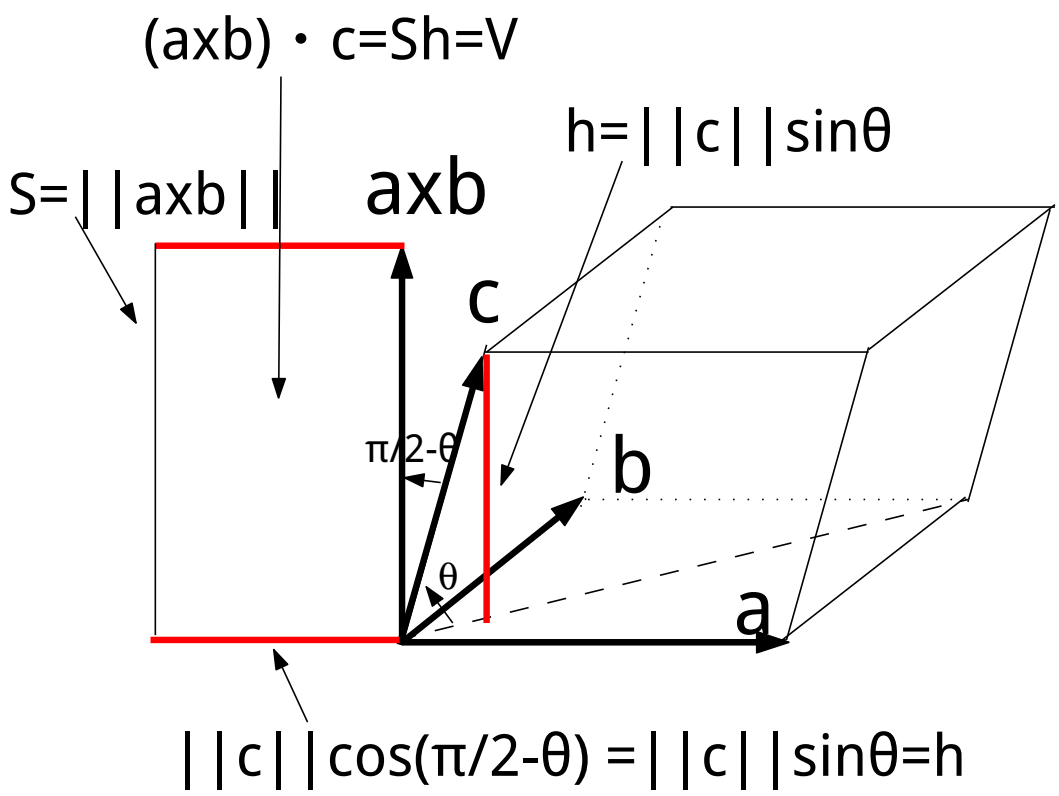
(3) $[\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d},\boldsymbol{e}\times\boldsymbol{f}]=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{d}][\boldsymbol{c},\boldsymbol{e},\boldsymbol{f}]-[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}][\boldsymbol{d},\boldsymbol{e},\boldsymbol{f}]$

(4) $[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}][\boldsymbol{l},\boldsymbol{m},\boldsymbol{n}]=\begin{vmatrix}\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{n}\\ \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{n}\\ \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{n}\end{vmatrix}$

□

問 1.103 （スカラー三重積と体積） 頂点が O, $A(\boldsymbol{a})$, $B(\boldsymbol{b})$, $C(\boldsymbol{c})$, $D(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})$, $E(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{c})$, $F(\boldsymbol{b}+\boldsymbol{c})$, $G(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}+\boldsymbol{c})$ である並行 6 面体の体積は $V=|[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]|$ である．これを示せ．

（答え） 平行 6 面体の体積は，底面積を S とし，高さを h とすると，$V=Sh$ で与えれる．底面の平行四辺形 $OABD$ の面積は，$S=\|\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}\|$ である．また，底面に対する単位法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})/\|\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}\|$ である．ベクトル $\boldsymbol{c}$ を垂線に正射影してできるベクトルの長さが高さ h であるから，$h=|\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{c}|=|(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}|/\|\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}\|$ となる．よって体積は $V=|(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}|$ と求まる． □



§ 1.22 演習問題 ~ 内積，ノルム，外積

問 1.104 （内積，ノルム，外積） $\mathbb{R}^3$ のベクトルに対して，次の関係式が成り立つこと証明せよ．

(1) $(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\cdot(\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{c})$ (2) $(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{c}+\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{c}$ (3) $(\alpha\boldsymbol{a})\cdot\boldsymbol{b}=\alpha(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b})$ (4) $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{a}$

(5) $\boldsymbol{a}\neq\boldsymbol{0}$ のとき $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{a}>0$ (6) $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{a}$ (7) $\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{a}=\|\boldsymbol{a}\|^2$ (8) $\boldsymbol{a}\perp\boldsymbol{b}\Leftrightarrow\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}=0$

(9) $|\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}|\leq\|\boldsymbol{a}\|\,\|\boldsymbol{b}\|$ (10) $\|\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}\|\leq\|\boldsymbol{a}\|+\|\boldsymbol{b}\|$ (11) $-1\leq\dfrac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{a}\|\|\boldsymbol{b}\|}\leq 1$

(12) $\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}\|^2+\|\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}\|^2=2(\|\boldsymbol{a}\|^2+\|\boldsymbol{b}\|^2)$ (13) $(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b})\cdot(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})=\|\boldsymbol{a}\|^2-\|\boldsymbol{b}\|^2$

(14) $\|\boldsymbol{a}\pm\boldsymbol{b}\|^2=\|\boldsymbol{a}\|^2+\|\boldsymbol{b}\|^2\pm 2\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}$ (15) $\left\|\dfrac{\boldsymbol{a}}{\|\boldsymbol{a}\|^2}\pm\dfrac{\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{b}\|^2}\right\|^2=\dfrac{\|\boldsymbol{a}\pm\boldsymbol{b}\|^2}{\|\boldsymbol{a}\|^2\|\boldsymbol{b}\|^2}$

(16) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}=-\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{a}$ (17) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{a}=\boldsymbol{0}$ (18) $\boldsymbol{a}\parallel\boldsymbol{b}\Leftrightarrow\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}=\boldsymbol{0}$ (19) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\times\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\times(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})$

(20) $\boldsymbol{a}\times(\boldsymbol{b}+\boldsymbol{c})=\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}+\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{c}$ (21) $(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})\times\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{c}+\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c}$

(22) $(\alpha\boldsymbol{a})\times\boldsymbol{b}=\alpha(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})=\boldsymbol{a}\times(\alpha\boldsymbol{b})$ (23) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{a}=0$ (24) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{b}=0$

(25) $(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b})\times(\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b})=2(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})$ (26) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\times\boldsymbol{c}=(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{c})\boldsymbol{b}-(\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{c})\boldsymbol{a}$

(27) $\boldsymbol{a}\times(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})=(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{c})\boldsymbol{b}-(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b})\boldsymbol{c}$ (28) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\times\boldsymbol{c}+(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})\times\boldsymbol{a}+(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a})\times\boldsymbol{b}=0$

(29) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d})=(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{c})(\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{d})-(\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{d})(\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{c})$ (30) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=\boldsymbol{a}\cdot(\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c})=(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a})\cdot\boldsymbol{b}$

(31) $\boldsymbol{a}\cdot(\boldsymbol{b}\times(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d}))=(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d})=\begin{vmatrix}\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{c} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{c}\\ \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{d} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{d}\end{vmatrix}$

(32) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\times(\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d})=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{d}]\boldsymbol{c}-[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]\boldsymbol{d}$ (33) $[\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b},\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c},\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a}]=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}]^2$

(34) $[\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{d},\boldsymbol{e}\times\boldsymbol{f}]=[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{d}][\boldsymbol{c},\boldsymbol{e},\boldsymbol{f}]-[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}][\boldsymbol{d},\boldsymbol{e},\boldsymbol{f}]$

(35) $[\boldsymbol{a},\boldsymbol{b},\boldsymbol{c}][\boldsymbol{l},\boldsymbol{m},\boldsymbol{n}]=\begin{vmatrix}\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{n}\\ \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{n}\\ \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{l} & \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{m} & \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{n}\end{vmatrix}$ □

問 1.105 （内積） 次の 2 つのベクトルのノルムをそれぞれ求めよ．またこれらの内積，方向余弦，成す角を求めよ．

(1) $\begin{bmatrix}-\sqrt{3}\\1\end{bmatrix},\begin{bmatrix}3\\\sqrt{3}\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}1\\2\end{bmatrix},\begin{bmatrix}-2\\3\end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix}1\\2\\1\end{bmatrix},\begin{bmatrix}-2\\-1\\1\end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix}0\\1\\-1\end{bmatrix},\begin{bmatrix}1\\0\\-2\end{bmatrix}$

(5) $\begin{bmatrix}1\\-1\\0\\2\end{bmatrix},\begin{bmatrix}2\\1\\3\\0\end{bmatrix}$ (6) $\begin{bmatrix}-1\\2\\3\\0\\1\end{bmatrix},\begin{bmatrix}1\\-1\\2\\1\\-1\end{bmatrix}$ □

問 1.106 （内積） $\mathbb{R}^n$ のベクトル $\boldsymbol{a},\boldsymbol{b}$ が $\|\boldsymbol{a}\|=1,\ \|\boldsymbol{b}\|=3,\ \|\boldsymbol{a}+\boldsymbol{b}\|=2$ をみたすとき，$\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}$ と $\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}\|$ の値を求めよ． □

問 1.107 （内積） $\mathbb{R}^2$ のベクトル $\boldsymbol{a}=\begin{bmatrix}1\\2\end{bmatrix},\boldsymbol{b}=\begin{bmatrix}3\\8\end{bmatrix},\boldsymbol{c}=\begin{bmatrix}1\\-1\end{bmatrix}$ が $(s\boldsymbol{a}+t\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}=0$ をみたすような実数 s,t を求めよ．ただし $s+t=1$ とする．このとき $\|s\boldsymbol{a}+t\boldsymbol{b}\|$ の値を求めよ． □

問 1.108 （方向余弦） $\mathbb{R}^3$ の 3 点 $O(0,0,0)$, $A(1,-2,2)$, $B(3,4,0)$ に対して，方向余弦 $\cos\angle AOB$ を求めよ．また，$\triangle OAB$ の面積を求めよ． □

問 1.109 （直交） 次のベクトルに直交するベクトルを 1 つ求めよ．

(1) $\begin{bmatrix}2\\-1\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}1\\1\\0\end{bmatrix}, \begin{bmatrix}0\\1\\1\end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix}1\\-2\\3\end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix}-1\\2\\1\\-1\end{bmatrix}$ (5) $\begin{bmatrix}2\\0\\-1\\1\\3\end{bmatrix}$ □

問 1.110 （外積） 次のベクトルの外積を求めよ．

(1) $\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix}\times\begin{bmatrix}1\\0\\1\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}1\\2\\-1\end{bmatrix}\times\begin{bmatrix}3\\2\\-1\end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix}0\\1\\2\end{bmatrix}\times\begin{bmatrix}-1\\-1\\2\end{bmatrix}$ □

問 1.111 （外積） 次の外積を計算せよ．

(1) $(2\boldsymbol{e}_1-2\boldsymbol{e}_2+\boldsymbol{e}_3)\times(12\boldsymbol{e}_1-4\boldsymbol{e}_2-3\boldsymbol{e}_3)$ (2) $(-2\boldsymbol{e}_1+3\boldsymbol{e}_3)\times(-\boldsymbol{e}_1+2\boldsymbol{e}_2-\boldsymbol{e}_3)$
(3) $(2\boldsymbol{e}_1-3\boldsymbol{e}_2+\boldsymbol{e}_3)\times(\boldsymbol{e}_1+\boldsymbol{e}_2+4\boldsymbol{e}_3)$

ただし，$\mathbb{R}^3$ の基本ベクトルを $\boldsymbol{e}_1=\begin{bmatrix}1\\0\\0\end{bmatrix}, \boldsymbol{e}_2=\begin{bmatrix}0\\1\\0\end{bmatrix}, \boldsymbol{e}_3=\begin{bmatrix}0\\0\\1\end{bmatrix}$ とする．

□

問 1.112 （外積） ベクトル $\boldsymbol{a}=3\boldsymbol{e}_1-\boldsymbol{e}_2+2\boldsymbol{e}_3$, $\boldsymbol{b}=2\boldsymbol{e}_1-\boldsymbol{e}_3$, $\boldsymbol{c}=-2\boldsymbol{e}_1+\boldsymbol{e}_2-\boldsymbol{e}_3$ に対して次を求めよ．

(1) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{a}$ (2) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}$ (3) $\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{a}$ (4) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{c}$ (5) $\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c}$ (6) $\boldsymbol{a}\times(\boldsymbol{b}+\boldsymbol{c})$ (7) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{c}$
(8) $(\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b})\cdot\boldsymbol{a}$ (9) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c}$ (10) $\boldsymbol{b}\times\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a}$ (11) $\boldsymbol{a}\times\boldsymbol{c}\times\boldsymbol{a}$ □

問 1.113 （右手系） ベクトル $\boldsymbol{c}$ はベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$ に垂直なベクトルであり，かつ $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c}$ はこの順序で右手系をなすとする．$\boldsymbol{c}$ を求めよ．

(1) $\boldsymbol{a}=4\boldsymbol{e}_1+3\boldsymbol{e}_2-\boldsymbol{e}_3$, $\boldsymbol{b}=2\boldsymbol{e}_1-6\boldsymbol{e}_2-3\boldsymbol{e}_3$ (2) $\boldsymbol{a}=\boldsymbol{e}_1+2\boldsymbol{e}_2-3\boldsymbol{e}_3$, $\boldsymbol{b}=-3\boldsymbol{e}_1+\boldsymbol{e}_2+2\boldsymbol{e}_3$
(3) $\boldsymbol{a}=\boldsymbol{e}_1-2\boldsymbol{e}_2+\boldsymbol{e}_3$, $\boldsymbol{b}=3\boldsymbol{e}_1+\boldsymbol{e}_2-2\boldsymbol{e}_3$

□

問 1.114 （右手系） ベクトル $\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c}$ はこの順で右手系であり，お互いに直交するとする．$\boldsymbol{c}$ を求めよ．

(1) $\boldsymbol{a}=\begin{bmatrix}-1\\-1\\2\end{bmatrix}, \boldsymbol{b}=\begin{bmatrix}3\\1\\2\end{bmatrix}$ (2) $\boldsymbol{a}=\begin{bmatrix}-1\\2\\-1\end{bmatrix}, \boldsymbol{b}=\begin{bmatrix}1\\0\\-1\end{bmatrix}$ (3) $\boldsymbol{a}=\begin{bmatrix}2\\3\\-1\end{bmatrix}, \boldsymbol{b}=\begin{bmatrix}-1\\1\\1\end{bmatrix}$ □

問 1.115 （平行四辺形の面積） 次の $\mathbb{R}^2$ の 4 点からなる平行四辺形の面積を求めよ．

(1) $(0,0), (1,3), (3,4), (2,1)$ (2) $(0,0), (-3,1), (-1,3), (2,2)$

(3) $(-2,0), (0,2), (3,0), (1,-2)$ □

問 1.116 （平行四辺形の面積） 次の $\mathbb{R}^3$ の 4 点からなる平行四辺形の面積を求めよ．

(1) $(0,0,0), (0,1,0), (1,1,0), (1,2,0)$ (2) $(4,-2,6), (6,-1,7), (5,0,5), (3,3,0)$

(3) $(1,2,3), (2,-1,1), (1,2,-4), (1,-3,-9)$ □

問 1.117 （平行六面体の体積） 次の $\mathbb{R}^3$ の 8 点からなる平行六面体の体積を求めよ．

(1) $(0,0,0), (0,1,0), (1,1,0), (1,2,0), (1,0,1), (1,1,1), (2,1,1), (2,2,1)$

(2) $(1,2,3), (2,-1,1), (1,2,-4), (1,-3,-9), (0,3,2), (1,0,0), (0,3,-5), (0,-2,-10)$ □

§ 1.23 単位ベクトル

定義 1.118 （単位ベクトル） ノルムが 1 のベクトルを単位ベクトル（**unit vectar**）という．

□

例 1.119 （単位ベクトルの具体例）

$$\mathbb{R}^n \ni \boldsymbol{e}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{e}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \cdots, \quad \boldsymbol{e}_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \tag{128}$$

は $\|\boldsymbol{e}_j\| = 1$ であり全て単位ベクトルである．

□

定義 1.120 （正規化） あるベクトルを向きが同じで長さが 1 のベクトルに変換することを正規化（**normalization**）という．

□

例 1.121 （正規化の具体例） ベクトル $\mathbb{R}^2 \ni \boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$ を正規化し $\boldsymbol{e}$ とする．すなわち

$$\boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{a}}{\|\boldsymbol{a}\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{2}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} \end{bmatrix} \tag{129}$$

と得られる．

□

定義 1.122 （単位方向ベクトル，単位法線ベクトル） 長さが 1 の方向ベクトルを単位方向ベクトル（**unit tangent vector**）という．長さが 1 の法線ベクトルを単位法線ベクトル（**unit normal vector**）という．

□

例 1.123 （単位ベクトル） 方程式

$$2x + y - 4 = 0 \tag{130}$$

の単位方向ベクトルは

$$\boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{-2}{\sqrt{3}} \end{bmatrix} \tag{131}$$

であり，単位法線ベクトルは

$$\boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} \frac{2}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} \end{bmatrix} \tag{132}$$

である．

□

§ 1.24 点の直線への正射影

定義 1.124 （点の直線への正射影） 点 A から直線 l に垂線を下ろした足 C を正射影という．点 A から点 C への変換を射影変換という． □

定理 1.125 （正射影） 点 A から直線 OB への正射影 C は

$$\boldsymbol{c} = (\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{b}}{\boldsymbol{b}\cdot\boldsymbol{b}}\boldsymbol{b}, \quad \boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{b}\|}, \quad \boldsymbol{a} = \overrightarrow{OA}, \quad \boldsymbol{b} = \overrightarrow{OB}, \quad \boldsymbol{c} = \overrightarrow{OC} \tag{133}$$

で与えられる．

（証明）直線の単位方向ベクトルを $\boldsymbol{e}$ とする．このとき $\boldsymbol{c} = \alpha\boldsymbol{e}$ とおく．$\boldsymbol{a}-\boldsymbol{c}$ と $\boldsymbol{e}$ が直交するので $(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{c})\cdot\boldsymbol{e} = 0$ より

$$0 = (\boldsymbol{a}-\boldsymbol{c})\cdot\boldsymbol{e} = \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} - \boldsymbol{c}\cdot\boldsymbol{e} = \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} - (\alpha\boldsymbol{e})\cdot\boldsymbol{e} \tag{134}$$

$$= \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} - \alpha(\boldsymbol{e}\cdot\boldsymbol{e}) = \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} - \alpha\|\boldsymbol{e}\|^2 = \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} - \alpha \tag{135}$$

となるので，$\alpha = \boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e}$ が成り立ち，$\boldsymbol{c} = (\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e}$ を得る． □

例 1.126 （正射影の具体例） 点 $A(1,1,1)$, $B(2,-1,1) \in \mathbb{R}^3$ を考える．点 A を直線 OB への正射影を C とする．
$\overrightarrow{OA} = \boldsymbol{a}$, $\overrightarrow{OB} = \boldsymbol{b}$, $\overrightarrow{OC} = \boldsymbol{c}$ とおく．$\boldsymbol{b}$ と向きが同じ単位ベトクルは

$$\boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{b}}{\|\boldsymbol{b}\|} = \frac{1}{\sqrt{6}}\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix} \tag{136}$$

である．ベクトル $\boldsymbol{c}$ の長さは

$$\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e} = \begin{bmatrix}1\\1\\1\end{bmatrix}\cdot\left(\frac{1}{\sqrt{6}}\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix}\right) = \frac{2\times 2 + 1\times(-1) + 1\times 1}{\sqrt{6}} = \frac{2}{\sqrt{6}} \tag{137}$$

で与えられる．よって $\boldsymbol{c}$ の向きは $\boldsymbol{e}$ と同じなので

$$\overrightarrow{OC} = \boldsymbol{c} = (\boldsymbol{a}\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e} = \frac{2}{\sqrt{6}}\frac{1}{\sqrt{6}}\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix} = \frac{1}{3}\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix} = \frac{1}{3}\boldsymbol{b} \tag{138}$$

となる．以上より $D(2/3, -1/3, 1/3)$ である． □

例 1.127 （正射影の具体例） 点 $A(1,0,2)$, $B(0,2,3)$, $C(1,2,-1) \in \mathbb{R}^3$ を考える．点 C から直線 AB へ垂線を下ろした正射影を D とする．

$\boldsymbol{a} = \overrightarrow{AC}$, $\boldsymbol{b} = \overrightarrow{AB}$, $\boldsymbol{c} = \overrightarrow{AD}$ とおく．このとき

$$\boldsymbol{a} = \overrightarrow{AC} = \begin{bmatrix} 1-1 \\ 2-0 \\ -1-2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 2 \\ -3 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b} = \overrightarrow{AB} = \begin{bmatrix} 0-1 \\ 2-0 \\ 3-2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{e} = \frac{b}{\|\boldsymbol{b}\|} \tag{139}$$

より

$$\boldsymbol{c} = (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{e})\boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{b}}{\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{b}}\boldsymbol{b} = \frac{0 \times (-1) + 2 \times 2 + (-3) \times 1}{(-1) \times (-1) + 2 \times 2 + 1 \times 1} \begin{bmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix} \tag{140}$$

である．よって

$$\overrightarrow{OD} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AD} = \overrightarrow{OA} + \boldsymbol{c} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{bmatrix} + \frac{1}{6} \begin{bmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 6-1 \\ 0+2 \\ 12+1 \end{bmatrix} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 5 \\ 2 \\ 13 \end{bmatrix} \tag{141}$$

となるので，

$$D\left(\frac{5}{6}, \frac{1}{3}, \frac{13}{6}\right)$$

を得る． □

定理 1.128 （点の直線への正射影） 点 $A(\boldsymbol{a})$ から直線 $\boldsymbol{q} + t\boldsymbol{p}$ への正射影 $B(\boldsymbol{b})$ は

$$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{q} + \frac{\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|^2}\boldsymbol{p} \tag{142}$$

である． □

問 1.129 （点の直線への正射影） これを示せ． □

§ 1.25 点と直線との距離

定義 1.130 （点と直線との距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 A と直線 l を考える．点 A と l 上の点 B との距離が最小となるとき，その距離を点と直線との距離という． □

定理 1.131 （点と直線との距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 A と直線 l を考える．点 A と l 上の点 B との距離が最小となるのは，直線 AB と直線 l が直交するときである． □

問 1.132 （点と直線との距離） これを示せ．

（証明）点 $A(\boldsymbol{a}),\ B(\boldsymbol{b})$ とする．点 B を直線 l 上の点とする．すなわち $\boldsymbol{b}(t) = \boldsymbol{q} + t\boldsymbol{p}$ とおく．点 A と B の距離を考える．

$$AB^2 = \|\boldsymbol{b}-\boldsymbol{a}\|^2 = (\boldsymbol{b}-\boldsymbol{a})\cdot(\boldsymbol{b}-\boldsymbol{a}) = (\boldsymbol{q}+t\boldsymbol{p}-\boldsymbol{a})\cdot(\boldsymbol{q}+t\boldsymbol{p}-\boldsymbol{a}) \tag{143}$$

$$= (\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) - 2t\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) + t^2\boldsymbol{p}\cdot\boldsymbol{p} \tag{144}$$

$$= \|\boldsymbol{p}\|^2t^2 - 2t\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) + \|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 \tag{145}$$

$$= \|\boldsymbol{p}\|^2\left(t - \frac{\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|^2}\right)^2 + \|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - \left(\frac{\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|}\right)^2 \tag{146}$$

より $t = t_{\min} = \boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})/\|\boldsymbol{p}\|^2$ のとき最小値

$$\min_{t\in\mathbb{R}} \|\boldsymbol{b}-\boldsymbol{a}\|^2 = \|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - \left(\frac{\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|}\right)^2 \tag{147}$$

をとる．このとき

$$\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}(t_{\min})) = \boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}-t_{\min}\boldsymbol{p}) = \boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) - t_{\min}\|\boldsymbol{p}\|^2 \tag{148}$$

$$= \|\boldsymbol{p}\|^2\left(\frac{\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|^2} - t_{\min}\right) = 0 \tag{149}$$

が成り立つ．$\boldsymbol{p}$ と $\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}(t_{\min})$ とは直交する．$\boldsymbol{p}$ は直線 l の方向ベクトルであり，$\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}(t_{\min})$ は直線 AB の方向ベクトルである．よって距離が最小になるとき直線 l と直線 AB は直交する．

□

例 1.133 （点と直線の距離） 点 $A(1,0,2),\ B(0,2,3),\ C(1,2,-1) \in \mathbb{R}^3$ において，点 C と直線 AB を考える．点 C から直線 AB への正射影は

$$D\left(\frac{5}{6}, \frac{1}{3}, \frac{13}{6}\right)$$

であるら，距離は

$$\|\overrightarrow{CD}\| = \sqrt{\left(1-\frac{5}{6}\right)^2 + \left(2-\frac{1}{3}\right)^2 + \left(-1-\frac{13}{6}\right)^2} = \sqrt{\frac{77}{6}}$$

より求まる． □

定理 1.134 （点と直線の距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 $A(\boldsymbol{a})$ と直線 $\boldsymbol{x}(t) = \boldsymbol{q} + t\boldsymbol{p}$ との距離は

$$\sqrt{\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - \left(\frac{\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|}\right)^2} \tag{150}$$

である．

□

問 1.135 （点と直線の距離） これを示せ．

(証明その 1) 問 1.132 の証明より $t = t_{\min}$ のとき点と直線の距離であるから，(146) より明らか．

(証明その 2) 点 $A(\boldsymbol{a})$ の直線 $B(\boldsymbol{b})$ への正射影 $B(\boldsymbol{b})$ を考える．このとき

$$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{q} + ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e}, \quad \boldsymbol{e} = \frac{\boldsymbol{p}}{\|\boldsymbol{p}\|} \tag{151}$$

である．ここで $\boldsymbol{e}$ は直線の単位方向ベクトルであり $\|\boldsymbol{e}\|^2 = \boldsymbol{e}\cdot\boldsymbol{e} = 1$ となることに注意する．点 A, B との距離は

$$\begin{aligned}
\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}^2\| &= (\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b})\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{b}) && (152)\\
&= ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) - ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e})\cdot((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) - ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})\boldsymbol{e}) && (153)\\
&= (\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}) - 2((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})^2 + ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})^2\boldsymbol{e}\cdot\boldsymbol{e} && (154)\\
&= \|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - ((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{e})^2 && (155)\\
&= \|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - \frac{((\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q})\cdot\boldsymbol{p})^2}{\|\boldsymbol{p}\|^2} && (156)
\end{aligned}$$

より得られる．

□

例 1.136 （$\mathbb{R}^3$ 内の点と直線の距離） 点 $A(0,2,1)$ と直線 $\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix}1\\3\\-1\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}2\\-1\\1\end{bmatrix}$ との距離を考える．

$$\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 = 6 \tag{157}$$

であるから，距離は

$$\sqrt{\|\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}\|^2 - \frac{(\boldsymbol{p}\cdot(\boldsymbol{a}-\boldsymbol{q}))^2}{\|\boldsymbol{p}\|^2}} = \sqrt{6-\frac{1}{6}} = \sqrt{\frac{35}{6}} \tag{158}$$

である．

□

例 1.137 （$\mathbb{R}^3$ 内の点と直線の距離） 点 $A(0,2,1)$ と直線 $\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ -1 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$ との距離を考える．点 A から直線への正射影を $B(\boldsymbol{b})$ とする．

$$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{q} + \frac{\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|^2} \boldsymbol{p} \tag{159}$$

であるから，

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} 0 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ -1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a} - \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} -1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}, \tag{160}$$

$$\|\boldsymbol{p}\|^2 = 6\,, \quad \boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) = 1 \tag{161}$$

より，

$$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{q} + \frac{\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|^2} \boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ -1 \end{bmatrix} + \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 8 \\ 17 \\ -5 \end{bmatrix} \tag{162}$$

である．点 $A(0,2,1)$ と点 $B(8/6, 17/6, -5/6)$ との距離が点 A と直線の距離であるから，

$$\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 8 \\ 17 \\ -5 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 0 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{6} \begin{bmatrix} 8 \\ 5 \\ -11 \end{bmatrix} \tag{163}$$

より

$$\overline{AB} = \frac{\sqrt{8^2 + 5^2 + (-11)^2}}{6} = \frac{\sqrt{64 + 25 + 121}}{6} = \frac{\sqrt{210}}{6} = \sqrt{\frac{35}{6}} \tag{164}$$

である． □

§ 1.26 $\mathbb{R}^3$ における点と直線との距離

定理 1.138 （点と直線の距離） $\mathbb{R}^3$ 空間内の点 $A(\boldsymbol{a})$ と直線 $\boldsymbol{x}(t) = \boldsymbol{q} + t\boldsymbol{p}$ との距離は

$$\frac{\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|}{\|\boldsymbol{p}\|} \tag{165}$$

である．

□

問 1.139 （$\mathbb{R}^3$ 内の点と直線の距離） これを示せ．

（証明その 1）距離 $\overline{AB}$ は

$$\overline{AB}^2 = \|\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}\|^2 - \left(\frac{\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{p}\|}\right)^2 = (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) - \frac{(\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{p}))^2}{\boldsymbol{p} \cdot \boldsymbol{p}} \tag{166}$$

$$= \frac{(\boldsymbol{p} \cdot \boldsymbol{p})(\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) - (\boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{p}))((\boldsymbol{a} - \boldsymbol{p}) \cdot \boldsymbol{p})}{\boldsymbol{p} \cdot \boldsymbol{p}} \tag{167}$$

となる．ここで

$$(\boldsymbol{a} \times \boldsymbol{b}) \cdot (\boldsymbol{c} \times \boldsymbol{d}) = (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{c})(\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{d}) - (\boldsymbol{a} \cdot \boldsymbol{d})(\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c}) \tag{168}$$

を用いると

$$\overline{AB}^2 = \frac{(\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})) \cdot (\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}))}{\boldsymbol{p} \cdot \boldsymbol{p}} = \frac{\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|^2}{\|\boldsymbol{p}\|^2} \tag{169}$$

となり定理を得る．

（証明その 2）3 点 $X(\boldsymbol{x}), Q(\boldsymbol{q}), A(\boldsymbol{a})$ からなる三角形 AQX を考える．三角形の面積は外積の定義より

$$S = \frac{1}{2}\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\| \tag{170}$$

と表される．また点 A と直線の距離を h とする．このとき h は三角形 AQX の高さを意味する．よって

$$S = \frac{1}{2}h\|\boldsymbol{p}\| \tag{171}$$

が成り立つ．以上より

$$h = \frac{\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|}{\|\boldsymbol{p}\|} \tag{172}$$

を得る．

□

例 1.140 （点と直線の距離） 点 $A(1,0,2),\ B(0,2,3),\ C(1,2,-1) \in \mathbb{R}^3$ において，点 C と直線 AB を考える．三角形 $\triangle ABC$ の面積は

$$S = \frac{1}{2}\|\overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC}\|$$

である．また，点 C と直線 AB の距離を h とすると

$$S = \frac{1}{2}h\|\overrightarrow{AB}\|$$

とも表される．よって距離は

$$h = \frac{\|\overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC}\|}{\|\overrightarrow{AB}\|}$$

により定まる．よって，

$$\overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC} = \begin{bmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix} \times \begin{bmatrix} 0 \\ 2 \\ -3 \end{bmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & 2 \\ 1 & -3 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 + \begin{vmatrix} 1 & -3 \\ -1 & 0 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_2 + \begin{vmatrix} -1 & 0 \\ 2 & 2 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} -8 \\ -3 \\ -2 \end{bmatrix},$$
$$\|\overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC}\| = \sqrt{77}, \qquad \|\overrightarrow{AB}\| = \sqrt{6}$$

より，距離は

$$h = \sqrt{\frac{77}{6}}$$

より求まる． □

例 1.141 （$\mathbb{R}^3$ 内の点と直線の距離） 点 $A(0,2,1)$ と直線 $\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ -1 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$ との距離を考える．

$$\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) = \begin{bmatrix} -1 \\ -5 \\ -3 \end{bmatrix}, \quad \|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|^2 = 35 \tag{173}$$

より，距離は

$$\frac{\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|}{\|\boldsymbol{p}\|} = \sqrt{\frac{35}{6}} \tag{174}$$

である． □

§ 1.27 $\mathbb{R}^2$ における点と直線との距離

定理 1.142 ($\mathbb{R}^2$ 内の点と直線の距離) $\mathbb{R}^2$ 空間内の点 $A(x_0, y_0)$ と直線 $ax + by + c = 0$ との距離は

$$\frac{|ax_0 + by_0 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}} \tag{175}$$

である．

□

問 1.143 ($\mathbb{R}^2$ 内の点と直線の距離) これを示せ．

(証明) $\mathbb{R}^2$ 空間を $\mathbb{R}^3$ 空間内の部分空間として考える．このとき，点 $A(\boldsymbol{a})$ と直線 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{q} + t\boldsymbol{p}$ を考える．

$$\boldsymbol{a} = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} 0 \\ -c/b \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{p} = \begin{bmatrix} b \\ -a \\ 0 \end{bmatrix} \tag{176}$$

とおくと

$$\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q}) = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \begin{vmatrix} b & x_0 \\ -a & y_0 + c/b \end{vmatrix} \end{bmatrix}, \tag{177}$$

$$\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|^2 = \begin{vmatrix} b & x_0 \\ -a & y_0 + c/b \end{vmatrix}^2 = (ax_0 + by_0 + c)^2, \tag{178}$$

$$\|\boldsymbol{p}\|^2 = a^2 + b^2 \tag{179}$$

である．よって距離は

$$\frac{\|\boldsymbol{p} \times (\boldsymbol{a} - \boldsymbol{q})\|}{\|\boldsymbol{p}\|} = \sqrt{\frac{(ax_0 + by_0 + c)^2}{a^2 + b^2}} = \frac{|ax_0 + by_0 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}} \tag{180}$$

である．

□

問 1.144 ($\mathbb{R}^2$ 内の点と直線の距離) 点 $A(2, 1)$ と直線 $x - 3y - 2 = 0$ との距離は

$$\frac{|ax_0 + by_0 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}} = \frac{|1 \cdot 2 - 3 \cdot 1 - 2|}{\sqrt{1^2 + (-3)^2}} = \frac{3}{\sqrt{10}} \tag{181}$$

である．

□

§ 1.28 演習問題 ~ 単位ベクトル，正射影，点と直線の距離

問 1.145 （正規化） 次のベクトルを正規化し単位ベクトルにせよ．

(1) $\begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 2 \\ 1 \\ 3 \end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix} -1 \\ 0 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix}$ □

問 1.146 （正射影） 点 A から直線 BC への正射影 D を求めよ．また距離 AD を求めよ．

(1) $A(1,1)$, $B(0,0)$, $C(3,2)$ (2) $A(1,1)$, $B(2,-1)$, $C(3,2)$
(3) $A(-2,3)$, $B(1,0)$, $C(0,1)$ (4) $A(0,-2)$, $B(3,-1)$, $C(4,2)$
(5) $A(1,1,1)$, $B(0,0,0)$, $C(2,-1,3)$ (6) $A(1,1,1)$, $B(3,1,2)$, $C(2,-1,3)$
(7) $A(-1,0,2)$, $B(1,0,-1)$, $C(0,1,0)$ (8) $A(5,-2,3)$, $B(1,-2,3)$, $C(2,1,-3)$ □

問 1.147 （正射影） 点 A と直線 ℓ の距離を求めよ．

(1) $\ell : x+2y=1$, $A(-1,2)$ (2) $\ell : y=-3x+2$, $A(5,-3)$
(3) $\ell : -3x+y-5=0$, $A(3,4)$ (4) $\ell : 2x+y+1=0$, $A(1,1)$
(5) $\ell : \dfrac{x-3}{2}=\dfrac{y+1}{3}=\dfrac{z}{-1}$, $A(1,-2,2)$ (6) $\ell : x=3,\ \dfrac{y-2}{2}=\dfrac{z+1}{3}$, $A(5,3,2)$
(7) $\ell : \dfrac{x+2}{3}=\dfrac{y}{-1}=z-2$, $A(0,1,3)$ (8) $\ell : y=-2,\ \dfrac{x}{3}=\dfrac{z-2}{-1}$, $A(1,-4,2)$ □

問 1.148 （点と直線の距離） 点 A と直線 BC の距離を求めよ．

(1) $A(2,3)$, $B(1,-1)$, $C(-1,2)$ (2) $A(-1,0)$, $B(0,1)$, $C(2,1)$
(3) $A(1,-1)$, $B(2,3)$, $C(1,1)$ (4) $A(0,1)$, $B(2,-1)$, $C(2,1)$
(5) $A(1,-2,1)$, $B(3,1,0)$, $C(2,3,-1)$ (6) $A(2,0,-1)$, $B(-1,2,1)$, $C(3,0,1)$
(7) $A(0,1,0)$, $B(1,1,0)$, $C(0,1,1)$ (8) $A(0,1,-1)$, $B(2,3,1)$, $C(1,0,2)$ □

§ 1.29 平面の方程式

定義 1.149 （平面） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 X の位置ベクトルが

$$\boldsymbol{x}(t,s) = \boldsymbol{q} + t\,\boldsymbol{u} + s\,\boldsymbol{v}\,, \quad \boldsymbol{x},\boldsymbol{q},\boldsymbol{u},\boldsymbol{v} \in \mathbb{R}^n\,, \quad \forall t, \forall s \in \mathbb{R} \tag{182}$$

と表されるとき，点 X の軌跡を平面（**plane**）という．$\boldsymbol{u}$, $\boldsymbol{v}$ を方向ベクトル（**tangent vector**）という．

□

定義 1.150 （超平面） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 X の位置ベクトルが $n-1$ 個の方向ベクトル $\boldsymbol{u}_1$, $\boldsymbol{u}_2$, $\cdots$, $\boldsymbol{u}_n$ を用いて

$$\boldsymbol{x}(t_1,t_2,\cdots,t_n) = \boldsymbol{x}_0 + t_1\,\boldsymbol{u}_1 + t_2\,\boldsymbol{u}_2 + \cdots + t_n\,\boldsymbol{u}_n \tag{183}$$

$$\boldsymbol{x},\boldsymbol{x}_0,\boldsymbol{u}_1,\boldsymbol{u}_2,\cdots,\boldsymbol{u}_n \in \mathbb{R}^n\,, \quad \forall t_1,t_2,\cdots,t_n \in \mathbb{R} \tag{184}$$

と表されるとき，点 X の軌跡を超平面（**hyper plane**）という．

□

例 1.151 （平面の具体例）

$$\boldsymbol{e}_1 = \begin{bmatrix}1\\0\end{bmatrix}\,, \quad \boldsymbol{e}_2 = \begin{bmatrix}0\\1\end{bmatrix} \tag{185}$$

とおく．このとき平面

$$\boldsymbol{x}(t,s) = t\boldsymbol{e}_1 + s\boldsymbol{e}_2 = \begin{bmatrix}t\\s\end{bmatrix} \tag{186}$$

を考える．位置ベクトル $\boldsymbol{x}(t,s)$ は点 (t,s) を表す．t, s は任意の実数なので点の軌跡は $\mathbb{R}^2$ 空間全体をなす．よって $\mathbb{R}^2$ は平面である．

□

例 1.152 （$\mathbb{R}^3$ の平面の具体例） 点 $A(1,2,3)$, $B(2,0,-1)$, $C(-1,1,2) \in \mathbb{R}^3$ を通る平面を考える．点 $\boldsymbol{q} = \overrightarrow{OA}$ を通り方向ベクトルが $\boldsymbol{u} = \overrightarrow{AB}$, $\boldsymbol{v} = \overrightarrow{AC}$ の平面と考える．

$$\boldsymbol{q} = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix}1\\2\\3\end{bmatrix}\,, \quad \boldsymbol{u} = \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix}2\\0\\-1\end{bmatrix} - \begin{bmatrix}1\\2\\3\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}1\\-2\\-4\end{bmatrix}\,, \tag{187}$$

$$\boldsymbol{v} = \overrightarrow{AC} = \overrightarrow{OC} - \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix}-1\\1\\2\end{bmatrix} - \begin{bmatrix}1\\2\\3\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}-2\\-1\\-1\end{bmatrix} \tag{188}$$

とする．平面の方程式のパラメータ表示は

$$\boldsymbol{x}(t,s) = \boldsymbol{q} + t\boldsymbol{u} + s\boldsymbol{v} = \begin{bmatrix}1\\2\\3\end{bmatrix} + t\begin{bmatrix}1\\-2\\-4\end{bmatrix} + s\begin{bmatrix}-2\\-1\\-1\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}t-2s+1\\-2t-s+2\\-4t-s+3\end{bmatrix} \tag{189}$$

である．

□

§ 1.30 平面の方程式と法線ベクトル

定理 1.153 （平面の方程式） $\mathbb{R}^n$ 空間内の超平面上の点 X の位置ベクトルは

$$\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x}_0)=0\,,\qquad \boldsymbol{x},\boldsymbol{x}_0,\boldsymbol{n}\in\mathbb{R}^n \tag{190}$$

と表される．ただし，$\boldsymbol{n}$ は方向ベクトル $\boldsymbol{u}_1,\cdots,\boldsymbol{u}_n$ と直交するベクトルである．$\boldsymbol{n}$ を法線ベクトル（normal vector）という．

（証明）任意の実数 $t_1,\cdots,t_n$ に対して

$$\begin{aligned}
&\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x_0})=0\\
&\quad\Leftrightarrow\quad \boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x}_0)=\boldsymbol{n}\cdot(t_1\boldsymbol{u}_1+\cdots+t_n\boldsymbol{u}_n)=t_1\,\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{u}_1+\cdots+t_n\,\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{u}_n=0\\
&\quad\Leftrightarrow\quad \boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{u}_1=0,\quad\cdots,\quad\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{u}_n=0\\
&\quad\Leftrightarrow\quad \boldsymbol{n}\perp\boldsymbol{u}_1,\quad\cdots,\quad\boldsymbol{n}\perp\boldsymbol{u}_n
\end{aligned}$$

が成り立つ． □

注意 1.154 （$\mathbb{R}^3$ の平面の方程式） $\mathbb{R}^3$ 内の平面の方程式は次のように表される．まず，基本は

$$ax+by+cz+d=0 \tag{191}$$

である．このとき，法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=\begin{bmatrix}a\\b\\c\end{bmatrix}$ である．また，この式を変形して

$$a(x-x_0)+b(y-y_0)+c(z-z_0)=0 \tag{192}$$

と表す．このとき，法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=\begin{bmatrix}a\\b\\c\end{bmatrix}$ であり，平面は点 (x_0,y_0,z_0) を通る．さらに変形して，

$$\frac{x}{a}+\frac{y}{b}+\frac{z}{c}=1 \tag{193}$$

とする．このとき平面と x 軸，y 軸，z 軸との交点はそれぞれ $x=a$, $y=b$, $z=c$ となる． □

例 1.155 （$\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の具体例） $\mathbb{R}^3$ 内の平面の方程式

$$x-2y+3z+4=0 \tag{194}$$

を考える．法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=\begin{bmatrix}1\\-2\\3\end{bmatrix}$ である．また，方程式を変形して

$$\frac{x}{-4}+\frac{y}{2}+\frac{z}{-\frac{4}{3}}=1 \tag{195}$$

を得る．平面は点 $(-4,0,0)$, $(0,2,0)$, $(0,0,-4/3)$ を通る． □

§ 1.31 外積を用いて平面の法線ベクトルを導出

注意 1.156 （$\mathbb{R}^3$ の平面の方程式） $\mathbb{R}^3$ 空間内の平面の方程式を考える．まず，

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{u} = \begin{bmatrix} u_1 \\ u_2 \\ u_3 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{v} = \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \end{bmatrix} \tag{196}$$

とおく．すると方程式

$$x = x_0 + t\,u_1 + s\,v_1\,, \qquad y = y_0 + t\,u_2 + s\,v_2\,, \qquad z = z_0 + t\,u_3 + s\,v_3 \tag{197}$$

が成り立つ．t, s は任意のパラメータであるから消去して方程式とする．第一式と第二式の s を消去し t についてまとめると

$$\begin{vmatrix} u_2 & v_2 \\ u_3 & v_3 \end{vmatrix} (x - x_0) + \begin{vmatrix} u_3 & v_3 \\ u_1 & v_1 \end{vmatrix} (y - y_0) + \begin{vmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{vmatrix} (z - z_0) = 0 \tag{198}$$

が得られる．他の組合せでも同じ方程式を得る．この方程式は

$$\boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} a & b & c \end{bmatrix}^T = \begin{bmatrix} \begin{vmatrix} u_2 & v_2 \\ u_3 & v_3 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} u_3 & v_3 \\ u_1 & v_1 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{vmatrix} \end{bmatrix}^T \tag{199}$$

とおくと $\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x} - \boldsymbol{q}) = 0$ が成り立つ．また，

$$a(x - x_0) + b(y - y_0) + c(z - z_0) = 0 \tag{200}$$

と表される．さらには $d = -ax_0 - by_0 - cz_0$ とおいて変形すれば

$$ax + by + cz + d = 0 \tag{201}$$

である．これらは $\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の成分表示である．ベクトル $\boldsymbol{n}$ は

$$\boldsymbol{u} \cdot \boldsymbol{n} = u_1 \begin{vmatrix} u_2 & v_2 \\ u_3 & v_3 \end{vmatrix} + u_2 \begin{vmatrix} u_3 & v_3 \\ u_1 & v_1 \end{vmatrix} + u_3 \begin{vmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} u_1 & u_1 & v_1 \\ u_2 & u_2 & v_2 \\ u_3 & u_3 & v_3 \end{vmatrix} = 0\,, \tag{202}$$

$$\boldsymbol{v} \cdot \boldsymbol{n} = v_1 \begin{vmatrix} u_2 & v_2 \\ u_3 & v_3 \end{vmatrix} + v_2 \begin{vmatrix} u_3 & v_3 \\ u_1 & v_1 \end{vmatrix} + v_3 \begin{vmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} v_1 & u_1 & v_1 \\ v_2 & u_2 & v_2 \\ v_3 & u_3 & v_3 \end{vmatrix} = 0 \tag{203}$$

より，方向ベクトル $\boldsymbol{u}$, $\boldsymbol{v}$ とそれぞれ直交する．$\boldsymbol{n}$ は法線ベクトルである．また，ベクトル $\boldsymbol{n}$ は $\boldsymbol{n} = \boldsymbol{u} \times \boldsymbol{v}$ により与えられることに注意する． □

例 1.157 （$\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の具体例） 点 $A(1,2,3)$, $B(2,0,-1)$, $C(-1,1,2) \in \mathbb{R}^3$ を通る平面を考える．点 $\boldsymbol{q} = \overrightarrow{OA}$ を通り方向ベクトルが $\boldsymbol{u} = \overrightarrow{AB}$, $\boldsymbol{v} = \overrightarrow{AC}$ の平面と考える．

$$\boldsymbol{q} = \overrightarrow{OA} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{u} = \overrightarrow{AB} = \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \\ -4 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{v} = \overrightarrow{AC} = \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ -1 \end{bmatrix} \tag{204}$$

とする．このとき法線ベクトルは

$$\boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix} = \boldsymbol{u} \times \boldsymbol{v} = \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \\ -4 \end{bmatrix} \times \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ -1 \end{bmatrix} = \begin{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 & \boldsymbol{e}_2 & \boldsymbol{e}_3 \\ 1 & -2 & -4 \\ -2 & -1 & -1 \end{vmatrix} \tag{205}$$

$$= \begin{vmatrix} -2 & -4 \\ -1 & -1 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 - \begin{vmatrix} 1 & -4 \\ -2 & -1 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_2 + \begin{vmatrix} 1 & -2 \\ -2 & -1 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_3 = -2\boldsymbol{e}_1 + 9\boldsymbol{e}_2 - 5\boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} -2 \\ 9 \\ -5 \end{bmatrix} \tag{206}$$

である．平面の方程式の成分表示は

$$\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x} - \boldsymbol{q}) = 0 \tag{207}$$

より

$$a(x - x_0) + b(y - y_0) + c(z - z_0) = 0 \tag{208}$$

であるから

$$-2(x-1) + 9(y-2) - 5(z-3) = 0 \tag{209}$$

を得る．また変形して

$$2x - 9y + 5z + 1 = 0 \tag{210}$$

を得る． □

例 1.158 （$\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の具体例） 3 点 $A(1,1,-2)$, $B(3,0,1)$, $C(2,1,-1)$ を通る xyz 空間内の平面を考える．法線ベクトルは

$$\boldsymbol{n} = \overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{bmatrix} \times \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{vmatrix} -1 & 0 \\ 3 & 1 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_1 + \begin{vmatrix} 3 & 1 \\ p2 & 1 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_2 + \begin{vmatrix} 2 & 1 \\ -1 & 0 \end{vmatrix} \boldsymbol{e}_3 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

であり，点 $A(1,1,-2)$ を通るので，$\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x} - \overrightarrow{OA}) = 0$ より平面の方程式

$$-(x-1) + (y-1) + (z+2) = 0$$

を得る．一般形で書けば

$$x - y - z - 2 = 0$$

となる．さらに変形して

$$\frac{x}{2} + \frac{x}{-2} + \frac{x}{-2} = 1$$

とする．平面と x 軸，y 軸，z 軸の交点はそれぞれ $x = 2$, $y = -2$, $z = -2$ である． □

§ 1.32 連立方程式を解いて平面の方程式を導出

例 1.159 ($\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の具体例) 点 $A(1,2,3)$, $B(2,0,-1)$, $C(-1,1,2) \in \mathbb{R}^3$ を通る平面を考える．平面の方程式は

$$ax + by + cz = 1 \tag{211}$$

な形となると仮定する．点 A, B, C は平面上にあるので

$$a + 2b + 3c = 1, \qquad 2a - c = 1, \qquad -a + b + 2c = 1 \tag{212}$$

が成り立つ．この a, b, c に関する連立方程式を求める． □

例 1.160 ($\mathbb{R}^3$ の平面の方程式の具体例) 3 点 $A(1,1,-2)$, $B(3,0,1)$, $C(2,1,-1)$ を通る xyz 空間内の平面を考える．平面の方程式の一般形は

$$ax + by + cz + 1 = 0$$

であるから，これに各点の座標を代入すると連立方程式

$$a + b - 2c + 1 = 0, \quad 3a + c + 1 = 0, \quad 2a + b - c + 1 = 0$$

を得る．この方程式の解は

$$(a, b, c) = \left(-\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right)$$

である．よって平面の方程式は $x - y - z - 2 = 0$ となる． □

注意 1.161 ($\mathbb{R}^3$ の平面の方程式と連立方程式) 平面は 3 点から一意に定まる．これは 3 元の連立方程式は 3 本の方程式により解が一意に定まることと等価である． □

注意 1.162 (図形，次元，点，連立方程式)

点： 0 次元． 1 点で一意に定まる． つまり 1 元 1 連立方程式の解は一意に定まる．
直線： 1 次元． 2 点で一意に定まる． つまり 2 元 2 連立方程式の解は一意に定まる．
平面： 2 次元． 3 点で一意に定まる． つまり 3 元 3 連立方程式の解は一意に定まる．

□

§ 1.33 平面と直線の交点

注意 1.163 （平面と直線の交点） $\mathbb{R}^n$ 空間内の平面

$$\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{q})=0 \tag{213}$$

と直線

$$\boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}(t)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{p} \tag{214}$$

との交点を考える．これを平面の方程式に代入すると

$$\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{p}-\boldsymbol{q})=0 \tag{215}$$

であるから，t についてまとめると

$$t=t^*=-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{p}} \tag{216}$$

を得る．よって直線の方程式に代入すると

$$\boldsymbol{x}(t^*)=\boldsymbol{x}_1=\boldsymbol{x}_0-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{p}}\boldsymbol{p} \tag{217}$$

となる．平面と直線の交点の位置ベクトルは $\boldsymbol{x}_1$ である． □

例 1.164 （平面と直線の交点の具体例） 平面

$$x-y+3z+1=0 \tag{218}$$

と直線

$$\frac{x-2}{3}=\frac{y+1}{-2}=\frac{z-3}{4} \tag{219}$$

との交点を考える．直線の方程式のパラメータ表示は

$$x=3t+2\,,\quad y=-2t-1\,,\quad z=4t+3 \tag{220}$$

である．これを平面の方程式に代入すると

$$(3t+2)-(-2t-1)+3(4t+3)+1=0 \tag{221}$$

より

$$t=-\frac{13}{17} \tag{222}$$

を得る．直線の方程式のパラメータ表示に代入すると

$$x=-\frac{5}{17}\,,\quad y=\frac{9}{17}\,,\quad z=-\frac{13}{17} \tag{223}$$

となり，交点は $(-5/17,9/17,-13/17)$ である． □

§ 1.34 点の平面への正射影

定義 1.165 （点の平面への正射影） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 A と平面を考える．点 A から平面へ垂線を下ろしたときの足 B を正射影という．点 A から点 B への変換を射影変換という． □

注意 1.166 （点の平面への正射影） 点 $A(\boldsymbol{x}_0)$ から平面

$$\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{q})=0 \tag{224}$$

への正射影 $B(\boldsymbol{x}_1)$ を考える．点 A から平面への垂線は平面と直交する．よって垂線の方向ベクトルと平面の法線ベクトル $\boldsymbol{n}$ は等しい．垂線は点 $A(\boldsymbol{x}_0)$ を通り方向ベクトルが $\boldsymbol{n}$ であるので，垂線の方程式は

$$\boldsymbol{x}(t)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{n} \tag{225}$$

と表される．垂線と平面の交点が正射影 $B(\boldsymbol{x}_1)$ である．交点 $\boldsymbol{x}_1$ を求める．垂線の方程式を平面の方程式に代入すると

$$\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{n}-\boldsymbol{q})=0 \tag{226}$$

であり，t についてまとめると

$$t=t^*=-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{n}}=-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{n}\|^2} \tag{227}$$

が成り立つ．これを垂線の方程式に代入し，交点

$$\boldsymbol{x}_1=\boldsymbol{x}(t^*)=\boldsymbol{x}_0-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{n}\|^2}\boldsymbol{n} \tag{228}$$

を得る． □

例 1.167 （点の平面への正射影） 点 $A(1,-2,4)$ の平面 $2x+3y-z+1=0$ への正射影 B を考える．平面の法線ベクトルは $\boldsymbol{n}=\begin{bmatrix}2\\3\\-1\end{bmatrix}$ であるから，点 A を通り平面に垂直な直線の方程式は

$$\frac{x-1}{2}=\frac{y+2}{3}=\frac{z-4}{-1}=t \tag{229}$$

となる．パラメータ表示すると

$$x=2t+1\,,\quad y=3t-2\,,\quad z=-t+4 \tag{230}$$

である．これを平面の方程式に代入すると

$$2(2t+1)+3(3t-2)-(-t+4)+1=0 \tag{231}$$

より $t=1/2$ を得る．これを垂線の方程式に代入すると

$$x=2\frac{1}{2}+1=2\,,\quad y=3\frac{1}{2}-2=-\frac{1}{2}\,,\quad z=-\frac{1}{2}+4=\frac{7}{2} \tag{232}$$

であり，正射影 $B(2,-1/2,7/2)$ を得る． □

§ 1.35 点と平面との距離

定義 1.168 （点と平面との距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 A と平面を考える．点 A と平面上の点 B との距離が最小となるとき，その距離を点と平面との距離という． □

定理 1.169 （点と平面との距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 A と平面を考える．点 A と平面上の点 B との距離が最小となるのは直線 AB と平面が直交するときである． □

例 1.170 （点と平面との距離） 点 $A(1,-2,4)$ の平面 $2x+3y-z+1=0$ への正射影は $B(2,-1/2,7/2)$ である．直線 AB は平面に直交する．距離 $\overline{AB}$ が点と平面との距離である．よって距離は

$$\sqrt{(2-1)^2+\left(-\frac{1}{2}+2\right)^2+\left(\frac{7}{2}-4\right)^2}=\sqrt{\frac{7}{2}} \tag{233}$$

である． □

定理 1.171 （点と平面との距離） $\mathbb{R}^n$ 空間内の点 $A(\boldsymbol{x}_0)$ と超平面 $\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{q})=0$ を考える．点 A と平面との距離は

$$\frac{|\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})|}{\|\boldsymbol{n}\|} \tag{234}$$

である． □

問 1.172 （点と平面との距離） これを示せ．

（証明）点 $A(\boldsymbol{x}_0)$ から平面 $\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{q})=0$ への正射影を $B(\boldsymbol{x}_1)$ とする．距離 $\overline{AB}=\|\boldsymbol{x}_1-\boldsymbol{x}_0\|$ が点と平面の距離である．正射影 $B(\boldsymbol{x}_1)$ は

$$\boldsymbol{x}_1=\boldsymbol{x}_0-\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{n}\|^2}\boldsymbol{n} \tag{235}$$

であるから，

$$(\boldsymbol{x}_1-\boldsymbol{x}_0)\cdot(\boldsymbol{x}_1-\boldsymbol{x}_0)=\left(\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{n}\|^2}\right)^2\boldsymbol{n}\cdot\boldsymbol{n}=\left(\frac{\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})}{\|\boldsymbol{n}\|}\right)^2 \tag{236}$$

より，

$$\|\boldsymbol{x}_1-\boldsymbol{x}_0\|=\frac{|\boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}_0-\boldsymbol{q})|}{\|\boldsymbol{n}\|} \tag{237}$$

を得る． □

§ 1.36 $\mathbb{R}^3$ における点と平面との距離

定理 1.173 ($\mathbb{R}^3$ の点と平面との距離) $\mathbb{R}^3$ 空間内の点 $A(x_0, y_0, z_0)$ と平面 $ax+by+cz+d=0$ を考える．点 A と平面との距離は

$$\frac{|ax_0 + by_0 + cz_0 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \tag{238}$$

である．

□

問 1.174 ($\mathbb{R}^3$ の点と平面との距離) これを示せ．

(証明) 点 $A(\boldsymbol{x}_0)$ と平面 $\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x} - \boldsymbol{q}) = 0$ とし，

$$\boldsymbol{x}_0 = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{n} = \begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ -c/d \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{x}_0 - \boldsymbol{q} = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 + c/d \end{bmatrix} \tag{239}$$

とおく．

$$\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x}_0 - \boldsymbol{q}) = ax_0 + by_0 + cz_0 + d\,, \quad \|\boldsymbol{n}\| = \sqrt{a^2 + b^2 + c^2} \tag{240}$$

より，

$$\frac{|\boldsymbol{n} \cdot (\boldsymbol{x}_0 - \boldsymbol{q})|}{\|\boldsymbol{n}\|} = \frac{|ax_0 + by_0 + cz_0 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \tag{241}$$

を得る．

□

例 1.175 ($\mathbb{R}^3$ の点と平面との距離) 点 $A(1, -2, 4)$ の平面 $2x + 3y - z + 1 = 0$ との距離は

$$\frac{|2 \cdot 1 + 3 \cdot (-2) - 4 + 1|}{\sqrt{2^2 + 3^2 + (-1)^2}} = \frac{|-7|}{\sqrt{14}} = \frac{7}{\sqrt{14}} = \sqrt{\frac{7}{2}} \tag{242}$$

である．

□

例 1.176 ($\mathbb{R}^3$ の点と平面との距離) 点 $A(1, -2, 4)$ の平面 $2x + 3y - z + 1 = 0$ への正射影は $B(2, -1/2, 7/2)$ であるから点 A と平面との距離は点 A, B の距離に等しい．すなわち，

$$\overline{AB} = \sqrt{(1-2)^2 + \left(-2 + \frac{1}{2}\right)^2 + \left(4 - \frac{7}{2}\right)^2} = \sqrt{1 + \frac{9}{4} + \frac{1}{4}} = \sqrt{\frac{14}{4}} = \sqrt{\frac{7}{2}} \tag{243}$$

である．

□

§ 1.37 平面と平面の交線

注意 1.177 （平面と平面の共通集合は直線） x, y, z に関する非同次 1 次方程式の一般形は

$$ax + by + cz + d = 0$$

である．この方程式は xyz 空間内の法線ベクトルが $\begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix}$ で点 $(0, 0, -d/c)$ を通る平面を表す．

非同次 1 次方程式を 2 本の方程式で連立すると

$$a_1x + b_1y + c_1z + d_1 = 0, \quad a_2x + b_2y + c_2z + d_2 = 0$$

である．方程式のそれぞれは法線ベクトルが $\begin{bmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} a_2 \\ b_2 \\ c_2 \end{bmatrix}$ の平面を表す．よって，この連立方程式の解集合は，2 つの平面の共有点の集合である直線

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c} \tag{244}$$

となる．ただし，交線をもつのは法線ベクトル $\begin{bmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{bmatrix}$ とが同じ向きではないときに限られる． □

例 1.178 （平面と平面の交線） 二つの平面

$$x - y - z = -1, \qquad 2x + y + 4z = 1 \tag{245}$$

の交線を求める．第一式を -2 倍し第二式の加えると

$$x - y - z = -1, \qquad 3y + 6z = 3 \tag{246}$$

となる．第二式を 3 で割ると

$$x - y - z = -1, \qquad y + 2z = 1 \tag{247}$$

となる．第二式を第一式に加えると

$$x + z = 0, \qquad y + 2z = 1 \tag{248}$$

となる．$z = t$ とおくと

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -t \\ -2t + 1 \\ t \end{bmatrix} = t \begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ 1 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{249}$$

を得る．交線は点 $(0, 1, 0)$ を通る方向ベクトル $\begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ 1 \end{bmatrix}$ の直線である． □

例 1.179 （平面と平面の交線） 連立方程式

$$x-y-z-2=0, \quad 2x+y-z-5=0$$

で定まる直線を考える．この直線は 2 つの平面の共有点である．第 2 式から第 1 式を引いて z を消去すると

$$x+2y-3=0$$

であり，第 1 式と第 2 式を足して y を消去すると

$$3x-2z-7=0$$

となる．これらより

$$x=\frac{y-\frac{3}{2}}{-\frac{1}{2}}=\frac{z+\frac{7}{2}}{\frac{3}{2}} \quad \Rightarrow \quad \frac{x}{2}=\frac{y-\frac{3}{2}}{-1}=\frac{z+\frac{7}{2}}{3}$$

を得る．直線は点 $(0,\frac{3}{2},-\frac{7}{2})$ を通り，方向ベクトル $\begin{bmatrix}2\\-1\\3\end{bmatrix}$ の直線である．また，パラメータ表示すると

$$x=2t, \quad y=-t+\frac{3}{2}, \quad z=3t-\frac{7}{2}$$

である．t は任意であるから，t を $t+\frac{1}{2}$ と置き換えると，

$$x=2t+1, \quad y=-t+1, \quad z=3t-2$$

となり，式が簡単となる．このとき平面の方程式は

$$\frac{x-1}{2}=\frac{y-1}{-1}=\frac{z+2}{3}$$

となる．直線は点 $(1,1,-2)$ も通る． □

§ 1.38 ちょっとまとめ

まとめ 1.180 （直線，平面） 同じ記号が同じ形である．

$\mathbb{R}^2$ において，

点：$(*)\quad \boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}_0 \quad\Leftrightarrow\quad (\circ\ )(x_0,y_0)$

直線：$(**)\quad \boldsymbol{x}(t)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{p} \quad\Leftrightarrow\quad (\square\ )\quad ax+by+c=0$

$\mathbb{R}^3$ において，

点：$(*)\quad \boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}_0 \quad\Leftrightarrow\quad (\circ\ )(x_0,y_0,z_0)$

直線:$(**)\quad \boldsymbol{x}(t)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{p} \quad\Leftrightarrow\quad (\triangle\ )\quad \frac{x-x_0}{a}=\frac{y-y_0}{b}=\frac{z-z_0}{c} \quad\Leftrightarrow\quad (\circledcirc\ )\quad \begin{cases} a_1x+b_1y+c_1z+d_1=0 \\ a_2x+b_2y+c_2z+d_2=0 \end{cases}$

平面：$(***)\quad \boldsymbol{x}(t,s)=\boldsymbol{x}_0+t\boldsymbol{u}+s\boldsymbol{v} \quad\Leftrightarrow\quad \boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x}_0)=0 \quad\Leftrightarrow\quad (\square\ )\quad ax+by+cz+d=0$

$\mathbb{R}^4$ において，

点： $(x_0,y_0,z_0,w_0)\quad (\circ\ )$ $\qquad \boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}_0\quad (*)$

直線：
$$\begin{cases} a_1x+b_1y+c_1z+d_1w+e_1=0 \\ a_2x+b_2y+c_2z+d_2w+e_2=0 \\ a_3x+b_3y+c_3z+d_3w+e_3=0 \end{cases} \quad (\circledcirc\ ) \qquad \boldsymbol{x}(t_1)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{u}_1 \quad (**)$$

$$\Leftrightarrow \quad \frac{x-x_0}{a}=\frac{y-y_0}{b}=\frac{z-z_0}{c}=\frac{w-w_0}{d} \quad (\triangle\ )$$

平面：
$$\begin{cases} a_1x+b_1y+c_1z+d_1w+e_1=0 \\ a_2x+b_2y+c_2z+d_2w+e_2=0 \end{cases} \quad (\circledcirc\ ) \qquad \boldsymbol{x}(t_1,t_2)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{u}_1+t_2\boldsymbol{u}_2 \quad (***)$$

超平面： $ax+by+cz+dw+e=0\quad (\square\ )$ $\qquad \boldsymbol{x}(t_1,t_2,t_3)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{u}_1+t_2\boldsymbol{u}_2+t_3\boldsymbol{u}_3 \quad (****)$

$$\Leftrightarrow \quad \boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x}_0)=0$$

$\mathbb{R}^5$ において，

点： $(x_0,y_0,z_0,w_0,u_0)\quad (\circ\ )$ $\qquad \boldsymbol{x}=\boldsymbol{x}_0\quad (*)$

直線：
$$\begin{cases} a_1x+b_1y+c_1z+d_1w+e_1u+f_1=0 \\ a_2x+b_2y+c_2z+d_2w+e_2u+f_2=0 \\ a_3x+b_3y+c_3z+d_3w+e_3u+f_3=0 \\ a_4x+b_4y+c_4z+d_4w+e_4u+f_4=0 \end{cases} \quad (\circledcirc\ ) \qquad \boldsymbol{x}(t_1)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{v}_1 \quad (**)$$

$$\Leftrightarrow \quad \frac{x-x_0}{a}=\frac{y-y_0}{b}=\frac{z-z_0}{c}=\frac{w-w_0}{d}=\frac{u-u_0}{d} \quad (\triangle\ )$$

平面：
$$\begin{cases} a_1x+b_1y+c_1z+d_1w+e_1u+f_1=0 \\ a_2x+b_2y+c_2z+d_2w+e_2u+f_2=0 \\ a_3x+b_3y+c_3z+d_3w+e_3u+f_3=0 \end{cases} \quad (\circledcirc\ ) \qquad \boldsymbol{x}(t_1,t_2)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{v}_1+t_2\boldsymbol{v}_2 \quad (***)$$

超平面： $ax+by+cz+dw+eu+f=0\quad (\square\ )$ $\qquad \boldsymbol{x}(t_1,t_2,t_3,t_4)=\boldsymbol{x}_0+t_1\boldsymbol{v}_1+t_2\boldsymbol{v}_2+t_3\boldsymbol{v}_3+t_4\boldsymbol{v}_4$

$$\Leftrightarrow \quad \boldsymbol{n}\cdot(\boldsymbol{x}-\boldsymbol{x}_0)=0$$

□

§ 1.39 演習問題 ~ 平面

問 1.181 （平面） 次の $\mathbb{R}^3$ の平面の法線ベクトルと x 軸，y 軸，z 軸との交点を求めよ．

(1) $2x-y+3z+4=0$ (2) $x+3y-2z=3$ (3) $2y-z+3=0$ (4) $x-z=2$

(5) $-2x+3z-1=0$ (6) $x=1$ (7) $y=-3$ (8) $z+5=0$ □

問 1.182 （平面） 次の $\mathbb{R}^3$ の 3 点を通る平面の方程式を求めよ．

(1) 点 $(1,2,-1)$, $(0,2,1)$, $(0,2,1)$ (2) 点 $(1,2,-1)$, $(0,1,2)$, $(3,-1,0)$

(3) 点 $(0,1,2)$, $(-1,2,-1)$, $(2,0,-3)$ (4) 点 $(4,0,2)$, $(2,-1,0)$, $(2,1,1)$

(5) 点 $(0,1,2)$, $(3,-1,0)$, $(2,4,0)$ □

問 1.183 （直線と平面の交点） 次の $\mathbb{R}^3$ の直線と平面の交点を求めよ．

(1) $\dfrac{x-1}{3}=\dfrac{y+1}{2}=\dfrac{y+2}{-2}$, $3x+2y+z=1$

(2) $\dfrac{x+2}{-2}=y-3=\dfrac{y-1}{-3}$, $2x-y+3z+2=0$ □

問 1.184 （直線と平面の交点） 平面 α は平面 π と平行で点 A を通るとする．平面 α の方程式を求めよ．また，平面 α と直線 L との交点を求めよ．

(1) $\pi: x+3y+2z+1=0$, $A(1,-1,-2)$, $L: \dfrac{x-2}{-2}=\dfrac{y}{2}=\dfrac{z+1}{1}$

(2) $\pi: 2x-y+z-1=0$, $A(1,0,4)$, $L: \dfrac{x-1}{2}=\dfrac{y+1}{-1}=\dfrac{z}{-2}$

□

問 1.185 （点の平面への正射影） 次の $\mathbb{R}^3$ の点から平面への正射影を求めよ．

(1) $(1,-1,2)$, $2x-y+3z=1$ (2) $(2,0,-1)$, $x+y-2z+3=0$ □

問 1.186 （点と平面の距離） 次の $\mathbb{R}^3$ の点と平面の距離を求めよ．

(1) $(0,3,1)$, $-3x-y+z+2=0$ (2) $(1,1,0)$, $y+z=1$ □

問 1.187 （平面の交線） 次の $\mathbb{R}^3$ の平面の交線の方向ベクトルを求めよ．

(1) $2x+3y=1$, $3y+4z=2$ (2) $2x+3y-z=1$, $x-2y+z=-1$

(3) $2x+3y+z+1=0$, $x-y+2z-1=0$ (4) $x-y+2z-2=0$, $3x+2y-z+5=0$ □

問 1.188 （平面と直線） 次の $\mathbb{R}^3$ の平面と直交し点 $(1,2,3)$ を通る直線の方程式を求めよ．また，その交点を求めよ．

(1) $2x+3y+1=0$ (2) $-x+2y-2=0$ (3) $3x-y+2=0$ (4) $-3x-2y+3=0$ □

問 1.189 （直線の平面への正射影） $\mathbb{R}^3$ の直線 $\dfrac{x-3}{2}=\dfrac{y+1}{-3}=\dfrac{z-2}{4}$ を平面 $3x+2y-y=5$ へ正射影した直線を求めよ． □

問 1.190 （総合） 3 次元空間内の点 $A(1,2,-1)$, $B(0,1,1)$, $C(3,0,-2)$, $P(1,1,0)$ を考える．点 C から直線 AB に垂線を下ろしたときの足を D とする．3 点 A, B, C を通る平面を H とする．点 P から平面 H への垂線を L とする．平面 H と 直線 L の交点を Q とする．このとき，$\overrightarrow{OA} = \boldsymbol{a}$, $\overrightarrow{AB} = \boldsymbol{b}$, $\overrightarrow{AC} = \boldsymbol{c}$, $\overrightarrow{AD} = \boldsymbol{d}$ とおく．次の問 (1)–(14) に答えよ． (1) ベクトル $\boldsymbol{b}$ と $\boldsymbol{c}$ のノルムをそれぞれ求めよ． (2) 内積 $\boldsymbol{b} \cdot \boldsymbol{c}$ を求めよ． (3) 角 $\theta = \angle BAC$ を示せ． (4) ベクトル $\boldsymbol{b}$ を正規化したベクトル $\boldsymbol{e}$ を示せ． (5) ベクトル $\boldsymbol{d}$ をベクトル $\boldsymbol{e}$ と $\boldsymbol{c}$ を用いて表せ． (6) 点 D の座標を求めよ． (7) 点 C と直線 AB との距離を求めよ． (8) 外積 $\boldsymbol{b} \times \boldsymbol{c}$ を求めよ． (9) 平面 H の法線ベクトル $\boldsymbol{n}$ を求めよ． (10) 平面 H 上の点 (x, y, z) が満たす方程式を示せ． (11) 直線 L 上の点の位置ベクトル $\boldsymbol{x}$ をパラメータ t を用いて表せ． (12) 直線 L 上の点 (x, y, z) が満たす方程式を示せ． (13) 点 Q の座標を求めよ． (14) 点 P と平面 H との距離を求めよ． □

問 1.191 （総合） xyz 空間内に点 $A(2,0,-1)$, $B(1,3,0)$, $C(0,1,-2)$, $P(-5,1,3)$ がある．次の問 (1)–(9) に答えよ． (1) 方向余弦 $\cos\angle CAB$, $\cos\angle ABC$, $\cos\angle BCA$ を求めよ． (2) 直線 AB の単位方向ベクトルを求めよ． (3) 直線 AB の方程式を成分表示で書け． (4) 点 C の直線 AB への正射影 D の座標を求めよ． (5) 点 C と直線 AB との距離を求めよ． (6) 点 A, B, C を通る平面 H の法線ベクトルを求めよ． (7) 平面 H の方程式を成分表示で書け．(8) 点 P の平面 H への正射影 Q の座標を求めよ． (9) 点 P と平面 H との距離を求めよ．

□

2 行列とベクトル

§ 2.1 行列

定義 2.1 $m \times n$ 個の数 a_{ij} $(i = 1, 2, \cdots, m; j = 1, 2, \cdots, n)$ を

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} \tag{250}$$

と並べたものを行列 (**matrix**) とよぶ . このとき行列 A は

- m 行 n 列の行列
- $m \times n$ 型の行列
- (m, n) 行列

という . 行列の i 行 j 列番目の数を $(\boldsymbol{i}, \boldsymbol{j})$ 成分 (**component**) または要素 (**element**) と呼ぶ . i 番目の行

$$\begin{bmatrix} a_{i1} & a_{i2} & a_{i3} & \cdots & a_{in} \end{bmatrix} \tag{251}$$

を第 $\boldsymbol{i}$ 行 (**the $\boldsymbol{i}$-th row**) という . j 番目の列

$$\begin{bmatrix} a_{1j} \\ a_{2j} \\ \vdots \\ a_{mj} \end{bmatrix} \tag{252}$$

を第 $\boldsymbol{j}$ 列 (**the $\boldsymbol{j}$-th column**) という . 行列 A を省略して書くときは

$$A = [a_{ij}] = [a_{ij}]_{m \times n} = \underset{m \times n}{[a_{ij}]} = [a_{ij}]_{\substack{i=1,2,\cdots,m \\ j=1,2,\cdots,n}} = [a_{ij}]_{\substack{1 \leq i \leq m \\ 1 \leq j \leq n}} \tag{253}$$

のようにする .

□

§ 2.2 行ベクトル，列ベクトル

定義 2.2 (行ベクトル) $1 \times n$ 行列

$$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \end{bmatrix} \tag{254}$$

を n 次の行ベクトル (**row vector**) と呼ぶ．□

例 2.3 (行ベクトルの具体例) 4 次の行ベクトル：

$$\begin{bmatrix} 0 & 2 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{255}$$

□

定義 2.4 (列ベクトル) $m \times 1$ 行列

$$\begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ \vdots \\ a_{m1} \end{bmatrix} \tag{256}$$

を m 次の列ベクトル (**column vector**) と呼ぶ．□

例 2.5 (列ベクトルの具体例) 3 次の列ベクトル：

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 5 \\ 3 \end{bmatrix} \tag{257}$$

□

注意 2.6 (ベクトルの呼び方と書き方) 行ベクトル，列ベクトルを総称してベクトル (**vector**) と呼ぶ．ベクトルを表わす変数は太文字で書き，$\boldsymbol{a}$, $\boldsymbol{b}$, $\boldsymbol{c}$, $\boldsymbol{x}$, $\boldsymbol{y}$ のように表記する．□

定義 2.7 (零ベクトル) 成分が全て 0 のベクトルを零ベクトルと呼び $\mathbf{0}$ と表わす．□

注意 2.8 (1×1 行列) 1×1 行列である $[a_{11}]$ は要素は一つしかないが，あくまでも行列であるので注意する．しかしまれに数として取り扱うこともあるので，更に注意が必要である．□

例 2.9 （行列の名称等） 行列

$$A = \begin{bmatrix} -1 & 2 & 6 & -4 & 5 \\ 3 & 0 & 12 & 0 & 4 \\ 1 & 4 & 0 & 7 & 1 \end{bmatrix} \tag{258}$$

を考える．

(1) 行列 A の型は 3×5 型である．

(2) $(2,1)$ 成分は $a_{21} = 3$ であり，$(3,4)$ 成分は $a_{34} = 7$ である．

(3) 第 2 行は

$$\begin{bmatrix} 3 & 0 & 12 & 0 & 4 \end{bmatrix} \tag{259}$$

であり，第 3 列は

$$\begin{bmatrix} 6 \\ 12 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{260}$$

である．

(4) 行列 A の転置行列 A^T は

$$A^T = \begin{bmatrix} -1 & 3 & 1 \\ 2 & 0 & 4 \\ 6 & 12 & 0 \\ -4 & 0 & 7 \\ 5 & 4 & 1 \end{bmatrix} \tag{261}$$

である． □

§ 2.3 行列のいろいろ ~ 零行列，正方行列，対角行列，単位行列

定義 2.10 （零行列） 成分が全て零の行列

$$O = O_{m,n} = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ & \cdots & & & 0 \\ 0 & \cdots & & & 0 \end{bmatrix} \tag{262}$$

を零行列（**zero matrix**）と呼ぶ．$O_{m,n}$ は $m \times n$ 型の零行列を意味する． □

定義 2.11 （正方行列） 行と列の数が等しい行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{bmatrix} \tag{263}$$

を正方行列（**square matrix**）と呼ぶ．行列の成分のうち左上から右下へ並んでいる成分 a_{11}, $a_{22}, \cdots, a_{nn}$ を対角成分（**diagonal components**）と呼ぶ． □

定義 2.12 （対角行列） 対角成分以外の成分が全て零の正方行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & & & & 0 \\ & a_{22} & & & \\ & & a_{33} & & \\ & & & \ddots & \\ 0 & & & & a_{nn} \end{bmatrix} \tag{264}$$

を対角行列（**diagonal matrix**）と呼ぶ． □

定義 2.13 （単位行列） 対角成分がすべて 1 の対角行列

$$E = E_n = I = I_n = \begin{bmatrix} 1 & & & 0 \\ & 1 & & \\ & & \ddots & \\ 0 & & & 1 \end{bmatrix} \tag{265}$$

を単位行列（**unit matrix**）と呼ぶ．$n \times n$ の単位行列を E_n と書き n 次の単位行列と呼ぶ．単位行列は後述するように行列の積において “1” の役割をはたす． □

§ 2.4 行列のいろいろ ~ スカラー行列，上三角行列，下三角行列

定義 2.14 （スカラー行列） 対角成分の値がすべて等しい対角行列をスカラー行列(**scalar matrix**) と呼ぶ．

□

例 2.15 （スカラー行列の具体例）

$$\begin{bmatrix} 2 & & 0 \\ & 2 & \\ 0 & & 2 \end{bmatrix}, \qquad \begin{bmatrix} -1 & & 0 \\ & -1 & \\ 0 & & -1 \end{bmatrix}, \qquad E, \qquad O. \tag{266}$$

□

定義 2.16 （上三角行列） 対角成分を除く左下半分がすべて 0 の正方行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \cdots & a_{1n} \\ 0 & a_{22} & a_{23} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & 0 & a_{33} & \cdots & a_{3n} \\ & & \ddots & \ddots & \vdots \\ 0 & & \cdots & 0 & a_{nn} \end{bmatrix} \tag{267}$$

を上三角行列 (**upper triangular matrix**) と呼ぶ．

□

定義 2.17 （下三角行列） 対角成分を除く右上半分がすべて 0 の正方行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & 0 & & & 0 \\ a_{21} & a_{22} & 0 & & \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & \ddots & \\ \vdots & & & \ddots & 0 \\ a_{n1} & a_{n2} & & \cdots & a_{nn} \end{bmatrix} \tag{268}$$

を下三角行列 (**lower triangular matrix**) と呼ぶ．

□

§ 2.5 転置行列

定義 2.18 （転置行列） 行と列の成分を入れ換えた行列

$$A^T = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{21} & a_{31} & \cdots & a_{m1} \\ a_{12} & a_{22} & a_{32} & \cdots & a_{m2} \\ \vdots & & & \ddots & \vdots \\ a_{1n} & a_{2n} & a_{3n} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} \tag{269}$$

を転置行列 (**transposed matrix**) と呼ぶ．行と列を入れ換える演算を転置 (**transpose**) をとるという．転置された行列を A^T と書く．また ${}^tA$ と書くこともある．

□

例 2.19 (転置の具体例)

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 3 & -2 \\ 4 & 5 & 2 \end{bmatrix}, \qquad A^T = \begin{bmatrix} 1 & 4 \\ 3 & 5 \\ -2 & 2 \end{bmatrix}. \tag{270}$$

□

問 2.20 $(A^T)^T = A$ を示せ．

(証明) $A = [a_{ij}]$, $A^T = [b_{ij}]$ とおく．行と列を入れ換えるので A^T は $A^T = [a_{ji}]$ とも書ける．つまり $b_{ij} = a_{ji}$ となる．転置をとる操作を成分でみると，行と列の添字を入れ換える操作に対応する．よって

$$(A^T)^T = ([a_{ij}]^T)^T = ([a_{ji}])^T = [a_{ij}] = A \tag{271}$$

となる．証明終了．

□

§ 2.6 行列のいろいろ ~ 対称行列，交代行列

定義 2.21 (対称行列) $A^T = A$ を満たす行列を対称行列 (**symmetric matrix**) と呼ぶ．

□

例 2.22 (対称行列の具体例)

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 4 & 6 \\ 4 & 2 & 5 \\ 6 & 5 & 3 \end{bmatrix} \tag{272}$$

□

問 2.23 (対称行列の一般的な表現) 対称行列は正方行列で一般に

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \cdots & a_{1n} \\ a_{12} & a_{22} & a_{23} & \cdots & a_{2n} \\ a_{13} & a_{23} & a_{33} & \cdots & a_{3n} \\ \vdots & \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{1n} & a_{2n} & a_{3n} & \cdots & a_{nn} \end{bmatrix} \tag{273}$$

と表わされる．これを示せ．

□

定義 2.24 (歪対称行列) $A = -A^T$ を満たす行列を歪対称行列 (**skew symmetric matrix**) または，交代行列 (**alternative matrix**) と呼ぶ．

□

例 2.25 （歪対称行列の具体例）

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & -3 \\ -1 & 0 & 2 \\ 3 & -2 & 0 \end{bmatrix} \tag{274}$$

□

問 2.26 （対称行列の一般的な表現） 歪対称行列は正方行列で一般に

$$A = \begin{bmatrix} 0 & a_{12} & a_{13} & \cdots & a_{1n} \\ -a_{12} & 0 & a_{23} & \cdots & a_{2n} \\ -a_{13} & -a_{23} & 0 & \cdots & a_{3n} \\ \vdots & \vdots & & \ddots & \vdots \\ -a_{1n} & -a_{2n} & -a_{3n} & \cdots & 0 \end{bmatrix} \tag{275}$$

と表わされる．これを示せ．

□

問 2.27 教科書（p.5）問題 1.1.

□

注意 2.28 （歪対称行列） 交代行列の対角成分はすべて 0 である．

□

§ 2.7 共役転置行列

定義 2.29 （共役行列） 全ての要素を複素共役をとした行列

$$\overline{A} = \begin{bmatrix} \overline{a}_{11} & \overline{a}_{12} & \cdots & \overline{a}_{1n} \\ \overline{a}_{21} & \overline{a}_{22} & \cdots & \overline{a}_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \overline{a}_{m1} & \overline{a}_{m2} & \cdots & \overline{a}_{mn} \end{bmatrix} \tag{276}$$

を共役行列??（???）という．

□

定義 2.30 （共役転置行列） 共役かつ転置な行列

$$A^* = (\overline{A})^T = \overline{(A^T)} = \begin{bmatrix} \overline{a}_{11} & \overline{a}_{21} & \cdots & \overline{a}_{n1} \\ \overline{a}_{12} & \overline{a}_{22} & \cdots & \overline{a}_{n2} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \overline{a}_{1m} & \overline{a}_{2m} & \cdots & \overline{a}_{nm} \end{bmatrix} \tag{277}$$

を共役転置行列（????）という．

□

§ 2.8 行列のいろいろ ~ エルミート行列，歪エルミート行列

定義 2.31 （エルミート行列） $A = A^*$ を満たす行列をエルミート行列 (**Hermite matrix**) という．

□

例 2.32 （エルミート行列の具体例）

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 1+i & -2-i \\ 1-i & 2 & 3+2i \\ -2+i & 3-2i & -3 \end{bmatrix}$$

□

問 2.33 （エルミート行列の成分） エルミート行列の対角成分は実数となることを示せ．

□

定義 2.34 （歪エルミート行列） $A = -A^*$ を満たす行列を歪エルミート行列 (**skew Hermite matrix**) という．

□

例 2.35 （歪エルミート行列の具体例）

$$A = \begin{bmatrix} i & 1+i & -2-i \\ -1+i & 2i & 3+2i \\ 2-i & -3+2i & -3i \end{bmatrix}$$

□

問 2.36 （歪エルミート行列の成分） 歪エルミート行列の対角成分は純虚数となることを示せ．

□

§ 2.9 行列のいろいろ ~ 直交行列，ユニタリー行列，逆行列

定義 2.37 （直交行列） $AA^T = E$ を満たす行列を直交行列 (**orthogonal matrix**) という．

□

定義 2.38 （ユニタリー行列） $AA^* = E$ を満たす行列をユニタリー行列 (**unitary matrix**) という．

□

定義 2.39 （逆行列） 行列 A に対して $AB = E$ を満たす行列 B を逆行列 (**inverse matrix**) といい，$B = A^{-1}$ と表記する．読み方は A inverse である．

□

§ 2.10 クロネッカーのデルタ

定義 2.40 （クロネッカーのデルタ） 記号 δ_{ij} を

$$\delta_{ij} = \begin{cases} 1 & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases} \tag{278}$$

と定義する．これをクロネッカーのデルタ（**Kronecker's delta**）と呼ぶ． □

例 2.41 （クロネッカーのデルタの具体例）

$$\delta_{11} = \delta_{22} = \delta_{33} = 1 \tag{279}$$

$$\delta_{12} = \delta_{13} = \delta_{21} = \delta_{23} = \delta_{31} = \delta_{32} = 0 \tag{280}$$

□

例 2.42 （クロネッカーのデルタの使用例） 単位行列は $E_n = [\delta_{ij}]_{n\times n}$ と表わされる．例えば

$$E_3 = \begin{bmatrix} \delta_{11} & \delta_{12} & \delta_{13} \\ \delta_{21} & \delta_{22} & \delta_{23} \\ \delta_{31} & \delta_{32} & \delta_{33} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{281}$$

となる． □

例 2.43 （クロネッカーのデルタの使用例） 行列 A が $A = [\delta_{i+1,j}]$ と与えられるとき，

$$A = \begin{bmatrix} \delta_{21} & \delta_{22} & \delta_{23} \\ \delta_{31} & \delta_{32} & \delta_{33} \\ \delta_{41} & \delta_{42} & \delta_{43} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{282}$$

となる． □

§ 2.11 行列の和と差

定義 2.44 （行列の和と差） 行列 A と行列 B の和を C とする．これを

$$A + B = C \tag{283}$$

と表記する．行列の和は型が

$$A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \qquad B = [b_{ij}]_{m\times n}\,, \qquad C = [c_{ij}]_{m\times n} \tag{284}$$

のとき定義される．各成分は

$$A + B = [a_{ij}] + [b_{ij}] = [c_{ij}]\,, \qquad c_{ij} = a_{ij} + b_{ij} \tag{285}$$

と定義される．行列の差は同様に

$$A - B = [a_{ij}] - [b_{ij}] = [c_{ij}]\,, \qquad c_{ij} = a_{ij} - b_{ij} \tag{286}$$

と定義される．

□

例 2.45 （行列の和の計算例）

$$\begin{bmatrix} 1 & -2 & 8 \\ 2 & 5 & 1 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -2 & 5 & 1 \\ 3 & -1 & 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1-2 & -2+5 & 8+1 \\ 2+3 & 5-1 & 1+2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1 & 3 & 9 \\ 5 & 4 & 3 \end{bmatrix}. \tag{287}$$

□

§ 2.12 行列のスカラー倍

定義 2.46 （行列のスカラー倍） α をスカラー（数）とする．行列 A のスカラー倍を

$$C = \alpha\, A \tag{288}$$

と表記する．行列のスカラー倍は型が

$$A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \qquad C = [c_{ij}]_{m\times n} \tag{289}$$

のとき定義される．各成分は

$$C = \alpha\, A = \alpha[a_{ij}] = [c_{ij}]\,, \qquad c_{ij} = \alpha\, a_{ij} \tag{290}$$

と定義される．

□

例 2.47 （スカラー倍の計算例）

$$3\begin{bmatrix} 1 & -2 & 8 \\ 2 & 5 & -1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3\times 1 & 3\times(-2) & 3\times 8 \\ 3\times 2 & 3\times 5 & 3\times(-1) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & -6 & 24 \\ 6 & 15 & -3 \end{bmatrix}. \tag{291}$$

□

例 2.48 （スカラー倍の計算例）

$$\alpha\begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 4 & 3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2\alpha & 1\alpha \\ 4\alpha & 3\alpha \end{bmatrix}. \tag{292}$$

□

§ 2.13 行列の積

定義 2.49 （行列の積） 行列 A と行列 B の積を C とする．このとき

$$A\,B = C \tag{293}$$

と表記する．行列の積は型が

$$A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \qquad B = [b_{ij}]_{n\times r}\,, \qquad C = [c_{ij}]_{m\times r} \tag{294}$$

のとき定義される．各成分は

$$AB = \left[\begin{array}{cccc} * & * & \cdots & * \\ \vdots & & & \vdots \\ \hline a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \\ \hline \vdots & & & \vdots \\ * & * & \cdots & * \\ * & * & \cdots & * \end{array}\right] \left[\begin{array}{ccc|c|c} * & * & \cdots & b_{1j} & \cdots\ * \\ * & * & \cdots & b_{2j} & \cdots\ * \\ * & * & \cdots & b_{3j} & \cdots\ * \\ \vdots & & & \vdots & \\ * & * & \cdots & b_{nj} & \cdots\ * \end{array}\right] = \left[\begin{array}{cccccc} * & * & \cdots & * & \cdots & * \\ \vdots & & & \vdots & & \vdots \\ * & * & \cdots & c_{ij} & \cdots & * \\ \vdots & & & \vdots & & \vdots \\ * & * & \cdots & * & \cdots & * \\ * & * & \cdots & * & \cdots & * \end{array}\right] = C\,, \tag{295}$$

$$c_{ij} = a_{i1}b_{1j} + a_{i2}b_{2j} + a_{i3}b_{3j} + \cdots + a_{in}b_{nj} = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}b_{kj} \tag{296}$$

と定義される．

□

例 2.50 （行列の積の計算例）

$$\underset{2\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 2 & 1 & -3 \\ 1 & -5 & 2 \end{bmatrix}} \underset{3\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 3 & 1 & 0 \\ 2 & 0 & -1 \\ -1 & 4 & 1 \end{bmatrix}} \tag{297}$$

$$= \begin{bmatrix} 2\times 3 + 1\times 2 + (-3)\times(-1) & 2\times 1 + 1\times 0 + (-3)\times 4 & 2\times 0 + 1\times(-1) + (-3)\times 1 \\ 1\times 3 + (-5)\times 2 + 2\times(-1) & 1\times 1 + (-5)\times 0 + 2\times 4 & 1\times 0 + (-5)\times(-1) + 2\times 1 \end{bmatrix} \tag{298}$$

$$= \underset{2\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 11 & -10 & -4 \\ -9 & 9 & 7 \end{bmatrix}}. \tag{299}$$

□

例 2.51 (行列の積の計算例)

$$A = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}, \qquad B = \begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \end{bmatrix} \tag{300}$$

とおく．

$$AB = \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}} \underset{1\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \end{bmatrix}} = \underset{3\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \\ -1 & -3 & -2 \\ 2 & 6 & 4 \end{bmatrix}}. \tag{301}$$

$$BA = \underset{1\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \end{bmatrix}} \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}} = \underset{1\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 2 \end{bmatrix}}. \qquad \leftarrow\text{スカラーではないので注意} \tag{302}$$

$AB \neq BA$ であることに注意．

□

例 2.52 (行列の積の具体例)

$$\underset{3\times 3\text{ 型}}{\begin{bmatrix} 1 & 4 & 5 \\ 9 & 2 & 6 \\ 8 & 7 & 3 \end{bmatrix}} \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix}} = \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ -3 \end{bmatrix}} \quad \Leftrightarrow \quad \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} x+4y+5z \\ 9x+2y+6z \\ 8x+7y+3z \end{bmatrix}} = \underset{3\times 1\text{ 型}}{\begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ -3 \end{bmatrix}} \tag{303}$$

$$\Leftrightarrow \quad \underset{\text{連立 1 次方程式}}{\begin{cases} x+4y+5z=-1 \\ 9x+2y+6z=-2 \\ 8x+7y+3z=-3 \end{cases}} \tag{304}$$

□

§ 2.14 行列の演算に関する緒性質

定理 2.53 （行列の演算の性質） 行列の演算に関して次の性質が成り立つ：

(1) $A+B=B+A$ （加法の交換則）

(2) $A+O=A$, $O+A=A$ （加法の零元）O は数の足し算の 0 と同様な振る舞い

(3) $(A+B)+C=A+(B+C)$ （加法の結合則）

(4) $AE=A$, $EA=A$ （乗法の単位元）E は数の掛け算の 1 と同様な振る舞い

(5) $AO=O$, $OA=O$ （乗法の零元）O は数の掛け算の 0 と同様な振る舞い

(6) $(AB)C=A(BC)$ （乗法の結合則）

(7) $A(B+C)=AB+AC$, $(A+B)C=AC+BC$ （分配則）

(8) $0A=O$, $1A=A$

(9) $(ab)A=a(bA)$, $(aA)B=a(AB)$

(10) $a(A+B)=aA+aB$, $(a+b)A=aA+bA$

(11) $(A+B)^T=A^T+B^T$

(12) $(AB)^T=B^TA^T$

(13) $(A+B)^*=A^*+B^*$

(14) $(AB)^*=B^*A^*$

(15) $(AB)^{-1}=B^{-1}A^{-1}$

ただし，A,B,C の型は互いに演算が定義されている型とする． □

問 2.54 （行列の演算の性質） 性質 (1)-(12) を示せ．

（証明）(1), (4), (11), (12) を示す．残りは自習．

(1) $A+B=B+A$ を示す．まず $A=[a_{ij}]_{m\times n}$, $B=[b_{ij}]_{m\times n}$ とおく．このとき $A+B$ は和の定義より

$$A+B=[a_{ij}+b_{ij}]_{m\times n} \tag{305}$$

となる．次に $B+A$ を求める．和の定義より

$$B+A=[b_{ij}+a_{ij}]_{m\times n} \tag{306}$$

となる．各要素 $b_{ij}+a_{ij}$ は単に数なので，和について可換である．よってすべての要素の和の順番を入れ換えて，

$$B+A=[a_{ij}+b_{ij}]_{m\times n} \tag{307}$$

となる．以上より $A+B=B+A$ が示された．

(4) $AE = A$ を示す．まず $A = [a_{ij}]_{m\times n}$, $E = [\delta_{ij}]_{n\times n}$ とおく．さらに $C = AE = [c_{ij}]_{m\times n}$ とおく．c_{ij} を計算する．積の定義とクロネッカーのデルタの定義に従って計算する．$[c_{ij}] = C = AE = [a_{ij}][\delta_{ij}]$ より

$$c_{ij} = \sum_{k}^{n} a_{ik}\delta_{kj} \tag{308}$$

$$= a_{i1}\delta_{1j} + a_{i2}\delta_{2j} + a_{i3}\delta_{3j} + \cdots + a_{ij}\delta_{jj} + \cdots + a_{in}\delta_{nj} \tag{309}$$

$$= a_{i1}\times 0 + a_{i2}\times 0 + a_{i3}\times 0 + \cdots + a_{ij}\times 1 + \cdots + a_{in}\times 0 \tag{310}$$

$$= a_{ij} \tag{311}$$

を得る．これより $c_{ij} = a_{ij}$ が成り立つ．よって $C = A$ を得る．以上より $AE = A$ が示された．$EA = A$ の場合も同様に示す．

(11) $(A+B)^T = A^T + B^T$ を示す．まず，$A = [a_{ij}]_{m\times n}$, $B = [b_{ij}]_{m\times n}$ とおく．和の定義より

$$A + B = [a_{ij}]_{m\times n} + [b_{ij}]_{m\times n} = [a_{ij} + b_{ij}]_{m\times n} \tag{312}$$

となる．転置の操作は行と列を入れ換えるので

$$(A+B)^T = ([a_{ij} + b_{ij}]_{m\times n})^T = [a_{ji} + b_{ji}]_{n\times m} \tag{313}$$

となる．右辺の行列を二つの行列の和に分解し，それぞれの行列の転置をとると

$$(A+B)^T = [a_{ji}]_{n\times m} + [b_{ji}]_{n\times m} = ([a_{ij}]_{m\times n})^T + ([b_{ij}]_{m\times n})^T = A^T + B^T \tag{314}$$

を得る．以上で示された．

(12) $(AB)^T = B^T A^T$ を示す．まず

$$A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \quad B = [b_{ij}]_{n\times r}\,, \quad A^T = [\tilde{a}_{ij}]_{n\times m}\,, \quad B^T = [\tilde{b}_{ij}]_{r\times n} \tag{315}$$

とおく．次に

$$C = AB = [c_{ij}]_{m\times r}\,, \quad C^T = (AB)^T = [\tilde{c}_{ij}]_{r\times m}\,, \quad D = B^T A^T = [d_{ij}]_{r\times m} \tag{316}$$

とおく．まず c_{ij}, d_{ij} を求める．積の定義より

$$c_{ij} = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}b_{kj}\,, \quad d_{ij} = \sum_{k=1}^{n} \tilde{b}_{ik}\tilde{a}_{kj} \tag{317}$$

となる．$\tilde{c}_{ij} = c_{ji}$, $\tilde{a}_{ij} = a_{ji}$, $\tilde{b}_{ij} = b_{ji}$ を用いれば

$$\tilde{c}_{ij} = c_{ji} = \sum_{k=1}^{n} a_{jk}b_{ki} = \sum_{k=1}^{n} b_{ki}a_{jk} = \sum_{k=1}^{n} \tilde{b}_{ik}\tilde{a}_{kj} = d_{ij} \tag{318}$$

を得る．以上より $(AB)^T = C^T = [\tilde{c}_{ij}]_{r\times m} = [d_{ij}]_{r\times n} = D = B^T A^T$ となる．証明終了． □

§ 2.15 行列の演算に関する注意

注意 2.55 （積の可換性） $AB = BA$ は常に成立するとは限らない．□

定義 2.56 （積の可換性） $AB = BA$ が成立するとき，A と B は可換（**commutative**）であるという．可換でない場合は非可換（**non-commutative**）であるという．□

問 2.57 （積の可換性） 可換となりうる行列は正方行列のみである．これを示せ．□

例 2.58 （非可換な場合の具体例） 行列 A, B が

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, \qquad B = \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix} \tag{319}$$

で与えられたとする．このとき

$$AB = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}, \qquad BA = \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 1 \end{bmatrix} \tag{320}$$

となる．よって $AB \neq BA$ となり，A と B とは非可換である．□

例 2.59 （可換な場合の具体例） 行列 A, B が

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}, \qquad B = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 4 \end{bmatrix} \tag{321}$$

で与えられたとする．このとき

$$AB = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 8 \end{bmatrix}, \quad BA = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 8 \end{bmatrix} \tag{322}$$

となる．よって $AB = BA$ となり，A と B とは可換である．□

問 2.60 （対角行列の可換性） 対角行列どうしの積は可換である．これを示せ．

（証明）対角行列は $A = [a_{ij}\delta_{ij}]$, $B = [b_{ij}\delta_{ij}]$ と表わされる．これを用いて示す．□

注意 2.61 (行列の方程式)　$AB = O$ のとき $A = O$ または $B = O$ が成立するとは限らない．数の場合は $ab = 0$ のとき $a = 0$ または $b = 0$ である．　□

例 2.62 (行列の方程式の具体例)　行列 A, B を

$$A = \begin{bmatrix} 1 & -1 \\ 1 & -1 \end{bmatrix}, \qquad B = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{bmatrix} \tag{323}$$

とする．このとき

$$AB = \begin{bmatrix} 1 & -1 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} = O \tag{324}$$

となる．$AB = O$ ではあるが $A \neq O, B \neq O$ である．　□

定義 2.63 (行列の巾乗)　A が正方行列のとき，A を m 回掛け合わせた行列を

$$A^m = \overbrace{AA \cdots A}^{m} \tag{325}$$

と表記し，これを A の巾乗と呼ぶ．　□

定義 2.64 (巾零行列)　$A^m = O$ $(2 \leq m \in \mathbb{N})$ を満たす行列 A を巾零行列と呼ぶ．　□

例 2.65 (巾零行列の具体例)

$$(1) \qquad A = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad A^2 = AA = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} = O. \tag{326}$$

$$(2) \qquad A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad A^2 = AA = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \neq O, \quad A^3 = AA^2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} = O. \tag{327}$$

□

問 2.66　教科書 (p.10) 問題 1.2.　□

§ 2.16 行列の分割

$m \times n$ 型行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} \tag{328}$$

の n 個の列を t 個の領域に分割し，m 個の列を s 個の領域に分割する．縦横で分割された部分領域はそれぞれまた行列となっている．この部分行列をブロック行列 (**block matrix**) と呼び，A_{ij} と表す．A_{ij} を用いて行列 A を書き直すと

$$A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1t} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2t} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{s1} & A_{s2} & \cdots & A_{st} \end{bmatrix}, \tag{329}$$

$$A_{ij} = [a_{kl}]_{m_i \times n_j}, \tag{330}$$

$$\sum_{p=1}^{i-1} m_p + 1 \leq k \leq \sum_{p=1}^{i} m_p, \tag{331}$$

$$\sum_{p=1}^{j-1} n_p + 1 \leq l \leq \sum_{p=1}^{j} n_p, \tag{332}$$

$$m_1 + m_2 + \cdots + m_s = m, \quad m_i \geq 1, \tag{333}$$

$$n_1 + n_2 + \cdots + n_t = n, \quad n_j \geq 1, \tag{334}$$

$$i = 1, 2, \cdots, s, \tag{335}$$

$$j = 1, 2, \cdots, t \tag{336}$$

と表される．このような表現を A の分割 (**partition**) という．$(m_1, m_2, \cdots, m_s; n_1, n_2, \cdots, n_t)$ を分割の型 (**partition type**) という．

例 2.67 (行列の分割の具体例)

$$A = \left[\begin{array}{cc|c} 2 & 3 & 0 \\ 1 & -2 & 0 \\ \hline 5 & 3 & -9 \end{array}\right] = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} \\ A_{21} & A_{22} \end{bmatrix} \tag{337}$$

$$A_{11} = \begin{bmatrix} 2 & 3 \\ 1 & -2 \end{bmatrix}, \qquad A_{12} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \qquad A_{21} = \begin{bmatrix} 5 & 3 \end{bmatrix}, \qquad A_{22} = \begin{bmatrix} -9 \end{bmatrix} \tag{338}$$

□

§ 2.17 分割された行列の積

定理 2.68 （分割された行列の積） 行列 $A=[a_{ij}]_{m\times n}$, $B=[b_{ij}]_{n\times r}$ を分割し，

$$A=\begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1t} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2t} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{s1} & A_{s2} & \cdots & A_{st} \end{bmatrix}, \quad B=\begin{bmatrix} B_{11} & B_{12} & \cdots & B_{1u} \\ B_{21} & B_{22} & \cdots & B_{2u} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ B_{t1} & B_{t2} & \cdots & B_{tu} \end{bmatrix}, \tag{339}$$

$$A_{ij}=[a_{kl}]_{m_i\times n_j} \quad (i=1,2,\cdots,s;\ j=1,2,\cdots,t), \tag{340}$$

$$B_{ij}=[b_{kl}]_{n_i\times r_j} \quad (i=1,2,\cdots,t;\ j=1,2,\cdots,u), \tag{341}$$

$$m_1+m_2+\cdots+m_s=m, \quad m_i\geq 1, \tag{342}$$

$$n_1+n_2+\cdots+n_t=n, \quad n_j\geq 1, \tag{343}$$

$$r_1+r_2+\cdots+r_u=r, \quad r_j\geq 1 \tag{344}$$

と表したとき，行列の積 AB は

$$AB=\begin{bmatrix} C_{11} & C_{12} & \cdots & C_{1u} \\ C_{21} & C_{22} & \cdots & C_{2u} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ C_{s1} & C_{s2} & \cdots & C_{su} \end{bmatrix}, \tag{345}$$

$$C_{ij}=A_{i1}B_{1j}+A_{i2}B_{2j}+\cdots+A_{it}B_{tj}=\sum_{k=1}^{t}A_{ik}B_{kj} \tag{346}$$

と与えられる． □

問 2.69 これを示せ． □

例 2.70 （分割された行列の積の具体例） 行列

$$A = \left[\begin{array}{cc|c|cc} 1 & 2 & 4 & 5 & 1 \\ \hline 0 & 2 & 1 & 1 & 3 \\ 3 & 0 & 2 & 0 & 1 \end{array}\right], \qquad B = \left[\begin{array}{cc} -1 & 2 \\ 0 & 3 \\ \hline 1 & -2 \\ \hline -1 & 1 \\ 2 & -3 \end{array}\right] \tag{347}$$

の積 $AB = C$ を考える．このとき行列を分割し

$$A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & A_{13} \\ A_{21} & A_{22} & A_{23} \end{bmatrix}, \quad B = \begin{bmatrix} B_{11} \\ B_{21} \\ B_{31} \end{bmatrix}, \quad C = \begin{bmatrix} C_{11} \\ C_{21} \end{bmatrix} \tag{348}$$

とする．C の部分行列は

$$C_{11} = A_{11}B_{11} + A_{12}B_{21} + A_{13}B_{31} \tag{349}$$

$$= \begin{bmatrix} 1 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & 2 \\ 0 & 3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & -2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 5 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & 1 \\ 2 & -3 \end{bmatrix} \tag{350}$$

$$= \begin{bmatrix} -1 & 8 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 4 & -8 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -3 & 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 2 \end{bmatrix} \tag{351}$$

$$C_{21} = A_{21}B_{11} + A_{22}B_{21} + A_{23}B_{31} \tag{352}$$

$$= \begin{bmatrix} 0 & 2 \\ 3 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & 2 \\ 0 & 3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & -2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 & 3 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & 1 \\ 2 & -3 \end{bmatrix} \tag{353}$$

$$= \begin{bmatrix} 0 & 6 \\ -3 & 6 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 & -2 \\ 2 & -4 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 5 & -8 \\ 2 & -3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 6 & -4 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} \tag{354}$$

となるので，結局積として

$$C = \begin{bmatrix} C_{11} \\ C_{21} \end{bmatrix} = \left[\begin{array}{c} \begin{bmatrix} 0 & 2 \end{bmatrix} \\ \hline \begin{bmatrix} 6 & -4 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} \end{array}\right] = \begin{bmatrix} 0 & 2 \\ 6 & -4 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} \tag{355}$$

を得る．

□

例 2.71 （分割された行列の積の計算例）

$$\begin{bmatrix} A_1 & O \\ O & A_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} B_1 & O \\ O & B_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A_1B_1 & O \\ O & A_2B_2 \end{bmatrix}. \tag{356}$$

（証明）

$$（左辺）= \begin{bmatrix} A_1B_1 + OO & A_1O + OB_2 \\ OB_2 + A_2O & OO + A_2B_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A_1B_1 & O \\ O & A_2B_2 \end{bmatrix} =（右辺）. \tag{357}$$

□

例 2.72 （分割された行列の積の計算例） 行列の積

$$\left[\begin{array}{cc|cc} 2 & 1 & 1 & 0 \\ 4 & 3 & 0 & 1 \\ \hline 0 & 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{array}\right] \left[\begin{array}{cc|cc} 1 & 1 & 1 & 0 \\ 3 & 2 & 0 & 1 \\ \hline 0 & 0 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{array}\right] \tag{358}$$

を考える．これは

$$\left[\begin{array}{c|c} A & E \\ \hline O & B \end{array}\right] \left[\begin{array}{c|c} C & E \\ \hline O & D \end{array}\right] \tag{359}$$

という形をしている．よって積は

$$\left[\begin{array}{c|c} AC & A+D \\ \hline O & BD \end{array}\right] = \left[\begin{array}{c|c} \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 4 & 3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 3 & 2 \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 4 & 3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix} \\ \hline O & \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix} \end{array}\right] \tag{360}$$

$$= \begin{bmatrix} 5 & 4 & 4 & 2 \\ 7 & 7 & 5 & 3 \\ 0 & 0 & 4 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \tag{361}$$

と求まる．

□

§ 2.18 行列のベクトルへの分割

例 2.73 （行列を列ベクトル，行ベクトルへ分割） 行列を分割し列ベクトルと行ベクトルでそれぞれ表す．行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 3 & 4 & 4 \\ 2 & 1 & 0 & -1 \\ 1 & 0 & 5 & 0 \end{bmatrix} \tag{362}$$

を考える．行列を一列ずつ縦に分割し，

$$A = \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 & \boldsymbol{a}_2 & \boldsymbol{a}_3 & \boldsymbol{a}_4 \end{bmatrix} \tag{363}$$

と表わす．ただし，

$$\boldsymbol{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_2 = \begin{bmatrix} 3 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_3 = \begin{bmatrix} 4 \\ 0 \\ 5 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_4 = \begin{bmatrix} 4 \\ -1 \\ 0 \end{bmatrix} \quad : 3 \times 1 \text{ 型行列 (3 次の列ベクトル)} \tag{364}$$

とおく．行列を一行ずつ分割し，

$$A = \begin{bmatrix} \boldsymbol{b}_1 \\ \boldsymbol{b}_2 \\ \boldsymbol{b}_3 \end{bmatrix} \tag{365}$$

と表わす．ただし，

$$\boldsymbol{b}_1 = \begin{bmatrix} 1 & 3 & 4 & 4 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b}_2 = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 & -1 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{b}_3 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 5 & 0 \end{bmatrix} \tag{366}$$

$: 1 \times 4$ 型行列 (4 次の行ベクトル)

とおく． □

問 2.74 教科書 (p.14) 問題 1.3. □

例 2.75 （行列をベクトルに分割したときの積の表現） 行列の積をベクトルを用いて表現する．行列 A と行列 B の積 AB を考える．行列 A は

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 \\ \boldsymbol{a}_2 \\ \vdots \\ \boldsymbol{a}_m \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_i = \begin{bmatrix} a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \end{bmatrix} \text{：行ベクトル} \tag{367}$$

のように行ベクトルに分割する．行列 B は

$$B = \begin{bmatrix} b_{11} & \cdots & b_{1r} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ b_{n1} & \cdots & b_{nr} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{b}_r \end{bmatrix}, \qquad \boldsymbol{b}_j = \begin{bmatrix} b_{1j} \\ b_{2j} \\ \vdots \\ b_{nj} \end{bmatrix} \text{：列ベクトル} \tag{368}$$

のように列ベクトルに分割する．このとき積 AB は

$$AB = \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 \\ \boldsymbol{a}_2 \\ \vdots \\ \boldsymbol{a}_m \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{b}_r \end{bmatrix} \tag{369}$$

$$= \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1\boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{a}_1\boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{a}_1\boldsymbol{b}_r \\ \boldsymbol{a}_2\boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{a}_2\boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{a}_2\boldsymbol{b}_r \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \boldsymbol{a}_m\boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{a}_m\boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{a}_m\boldsymbol{b}_r \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} (\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{b}_1) & (\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{b}_2) & \cdots & (\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{b}_r) \\ (\boldsymbol{a}_2, \boldsymbol{b}_1) & (\boldsymbol{a}_2, \boldsymbol{b}_2) & \cdots & (\boldsymbol{a}_2, \boldsymbol{b}_r) \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ (\boldsymbol{a}_m, \boldsymbol{b}_1) & (\boldsymbol{a}_m, \boldsymbol{b}_2) & \cdots & (\boldsymbol{a}_m, \boldsymbol{b}_r) \end{bmatrix} \tag{370}$$

$$= \begin{bmatrix} A \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \boldsymbol{b}_1 & \boldsymbol{b}_2 & \cdots & \boldsymbol{b}_r \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A\boldsymbol{b}_1 & A\boldsymbol{b}_2 & \cdots & A\boldsymbol{b}_r \end{bmatrix} \tag{371}$$

$$= \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 \\ \boldsymbol{a}_2 \\ \vdots \\ \boldsymbol{a}_m \end{bmatrix} \begin{bmatrix} B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 B \\ \boldsymbol{a}_2 B \\ \vdots \\ \boldsymbol{a}_m B \end{bmatrix} \tag{372}$$

と表わされる．ここで

$$\boldsymbol{a}_i\boldsymbol{b}_j = (\boldsymbol{a}_i, \boldsymbol{b}_j) = \boldsymbol{a}_i \cdot \boldsymbol{b}_j = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}b_{kj} \tag{373}$$

となることに注意する． □

例 2.76 （行列の積の具体例）

$$\begin{cases} x+4y+5z=-1 \\ 9x+2y+6z=-2 \\ 8x+7y+3z=-3 \end{cases} \tag{374}$$

連立 1 次方程式

$$\Leftrightarrow \quad \left[\begin{array}{c|c|c} 1 & 4 & 5 \\ \hline 9 & 2 & 6 \\ \hline 8 & 7 & 3 \end{array}\right] \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ -3 \end{bmatrix} \quad \Leftrightarrow \quad \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 & \boldsymbol{a}_2 & \boldsymbol{a}_3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \boldsymbol{b} \tag{375}$$

ブロック 1×3 型　3×1 型　　3×1 型

$$\Leftrightarrow \quad x \begin{bmatrix} 1 \\ 9 \\ 8 \end{bmatrix} + y \begin{bmatrix} 4 \\ 2 \\ 7 \end{bmatrix} + z \begin{bmatrix} 5 \\ 6 \\ 3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ -3 \end{bmatrix} \quad \Leftrightarrow \quad x\,\boldsymbol{a}_1 + y\,\boldsymbol{a}_2 + z\,\boldsymbol{a}_3 = \boldsymbol{b} \tag{376}$$

□

§ 2.19 演習問題 ~ 行列の演算

問 2.77 （行列） 次の成分で与えられる行列 $[\ a_{i,j}\ ]_{5\times 5}$ を具体的に書き下せ．

(1) $a_{i,j}=i$ (2) $a_{i,j}=j$ (3) $a_{i,j}=i+j$ (4) $a_{i,j}=i-j$ (5) $a_{i,j}=\dfrac{1}{i+j}$

(6) $a_{i,j}=(b_j)^{i-1}$ (7) $a_{i,j}=b_{i+j-2}$ (8) $a_{i,j}=b_{i-j}$ (9) $a_{i,j}=\delta_{i,j}$ (10) $a_{i,j}=\delta_{i-1,j}$

(11) $a_{i,j}=\delta_{i,j-1}$ (12) $a_{i,j}=\delta_{i,j}+\alpha\delta_{i-1,j}+\beta\delta_{i,j-1}$ □

問 2.78 （行列のいろいろ） 次の行列のうち零行列，正方行列，対角行列，単位行列，スカラー行列，上三角行列，下三角行列，対称行列，交代行列（歪対称行列），エルミート行列，歪エルミート行列，直交行列，ユニタリー行列に当てはまる行列をすべてあげよ．

(1) $\begin{bmatrix}0&0&0&0\\0&0&0&0\\0&0&0&0\\0&0&0&0\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}1&0&0&0\\0&2&0&0\\0&0&-3&0\\0&0&0&3\end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix}1&0&0&0\\0&1&0&0\\0&0&1&0\\0&0&0&1\end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix}3&0&0&0\\0&3&0&0\\0&0&3&0\\0&0&0&3\end{bmatrix}$ (5) $\begin{bmatrix}1&7&4&5\\0&-1&2&9\\0&0&3&-3\\0&0&0&3\end{bmatrix}$

(6) $\begin{bmatrix}2&0&0&0\\3&-2&0&0\\-1&7&4&0\\2&6&3&5\end{bmatrix}$ (7) $\begin{bmatrix}2&-4&7&1\\-4&-2&-3&2\\7&-3&3&9\\1&2&9&5\end{bmatrix}$ (8) $\begin{bmatrix}0&1&-2&3\\-1&0&-5&4\\2&5&0&-1\\-3&-4&1&0\end{bmatrix}$ (9) $\begin{bmatrix}\frac{1}{\sqrt{2}}&\frac{1}{\sqrt{2}}\\\frac{1}{\sqrt{2}}&\frac{-1}{\sqrt{2}}\end{bmatrix}$

(10) $\begin{bmatrix}1&1+i&-3+2i&5i\\1-i&2&7&-3i\\-3-2i&7&-1&8i\\-5i&3i&-8i&3\end{bmatrix}$ (11) $\begin{bmatrix}5i&1+i&-3+2i&5i\\-1+i&-3i&-7&-3i\\3+2i&7&2i&-8\\5i&-3i&8&i\end{bmatrix}$ (12) $\begin{bmatrix}\frac{i}{\sqrt{2}}&\frac{1}{\sqrt{2}}\\\frac{1}{\sqrt{2}}&\frac{i}{\sqrt{2}}\end{bmatrix}$ □

問 2.79 （行列の演算） 次の関係式を証明せよ．ただし，A,B,C,O,E はそれぞれにおいて演算が定義可能な型の行列とする．O は零行列，E は単位行列，a, b はスカラーとする．

(1) $A+B=B+A$ (2) $A+O=A$, $O+A=A$ (3) $(A+B)+C=A+(B+C)$

(4) $AE=A$, $EA=A$ (5) $AO=O$, $OA=O$ (6) $(AB)C=A(BC)$

(7) $A(B+C)=AB+AC$, $(A+B)C=AC+BC$ (8) $0A=O$, $1A=A$

(9) $(ab)A=a(bA)$, $(aA)B=a(AB)$ (10) $a(A+B)=aA+aB$, $(a+b)A=aA+bA$

(11) $(A+B)^T=A^T+B^T$ (12) $(AB)^T=B^TA^T$ (13) $(A+B)^*=A^*+B^*$

(14) $(AB)^*=B^*A^*$ □

問 2.80 （行列の演算） $A=\begin{bmatrix}2&-5&1\\3&0&-4\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}1&-2&-3\\0&-1&5\end{bmatrix}$, $C=\begin{bmatrix}0&1&-2\\1&-1&-1\end{bmatrix}$ に対して，$3A+4B-2C$ を求めよ． □

問 2.81 （行列の演算） $A=\begin{bmatrix}1&-2\\-3&4\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}5&3\\2&-1\end{bmatrix}$, $C=\begin{bmatrix}6&4\\3&5\end{bmatrix}$ に対して，次を求めよ．

(1) $(A+B+C)+(A-B+C)$ (2) $3(A+B)-2(3A-5B)$ □

問 2.82 （行列の演算） $A=\begin{bmatrix}1&0\\2&1\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}2&1\\-1&2\end{bmatrix}$ に対して，次を計算せよ．

(1) $(A+B)^2$　(2) $A^2+2AB+B^2$　(3) A^2-B^2　(4) $(A-B)(A+B)$　(5) $(A+B)(A-B)$

□

問 2.83　(行列の演算)　$A=\begin{bmatrix}1 & 2\\ 4 & -3\end{bmatrix}$ に対して，A^2，A^3，$2A^3-4A+E$ を求めよ．　□

問 2.84　(行列の演算)　行列 A, B, C, D に対して，次の演算が可能ならば計算をせよ．

$$A=\begin{bmatrix}1 & 2\\ 0 & 1\\ 1 & 0\end{bmatrix},\quad B=\begin{bmatrix}0 & 0 & 1\\ 1 & 0 & 1\\ 1 & 0 & 0\end{bmatrix},\quad C=\begin{bmatrix}1\\ 3\\ 0\end{bmatrix},\quad D=\begin{bmatrix}0 & 1 & 0\end{bmatrix}$$

(1) AB　(2) BA　(3) DC　(4) $CD+B$　(5) $2A+B$　(6) $BC-4C$　(7) DA
(8) A^2　(9) B^2　(10) B^3

□

問 2.85　(行列の演算)　行列 $A=\begin{bmatrix}1 & 2 & 0\\ 3 & -1 & 4\end{bmatrix}$ のとき AA^T, A^TA を求めよ．　□

問 2.86　(行列の演算)　行列 A, B, C, D に対して，次の演算が可能ならば計算をせよ．

$$A=\begin{bmatrix}1 & -1 & 2\\ 0 & 3 & 4\end{bmatrix},\quad B=\begin{bmatrix}4 & 0 & -3\\ -1 & -2 & 3\end{bmatrix},\quad C=\begin{bmatrix}2 & -3 & 0 & 1\\ 5 & -1 & -4 & 2\\ -1 & 0 & 0 & 3\end{bmatrix},\quad D=\begin{bmatrix}2\\ -1\\ 3\end{bmatrix}$$

(1) $A+B$　(2) $A+C$　(3) $3A-4B$　(4) AB　(5) AC　(6) AD　(7) BC
(8) BD　(9) CD　(10) A^T　(11) A^TC　(12) D^TA^T　(13) B^TA　(14) D^TD　□

問 2.87　(行列の演算)　次の計算をせよ．

(1) $3\begin{bmatrix}2\\ -7\\ 1\end{bmatrix}-5\begin{bmatrix}-1\\ 4\\ -2\end{bmatrix}$　(2) $\begin{bmatrix}2 & 3\\ -1 & 4\end{bmatrix}\begin{bmatrix}3\\ 1\end{bmatrix}$　(3) $\begin{bmatrix}2 & -1\\ 7 & 6\end{bmatrix}\begin{bmatrix}3\\ -5\end{bmatrix}$　(4) $\begin{bmatrix}2 & 3\\ -1 & 4\end{bmatrix}\begin{bmatrix}-3 & 4\\ 1 & 1\end{bmatrix}$

(5) $\begin{bmatrix}2 & -3\\ 1 & 4\end{bmatrix}\begin{bmatrix}-1 & 0\\ 2 & 5\end{bmatrix}$　(6) $\begin{bmatrix}2 & 1\\ 1 & 3\\ 1 & -1\end{bmatrix}\begin{bmatrix}1 & -1 & 2\\ 1 & 2 & 3\end{bmatrix}$　(7) $\begin{bmatrix}4 & -1 & 5\\ 0 & 1 & 2\\ 2 & -1 & 0\end{bmatrix}\begin{bmatrix}2\\ 1\\ -1\end{bmatrix}$

(8) $\begin{bmatrix}1 & 2 & -3\\ 2 & -3 & 1\\ 8 & 1 & -5\end{bmatrix}\begin{bmatrix}1\\ 2\\ 3\end{bmatrix}$　(9) $\begin{bmatrix}-1 & 2 & 1\\ 3 & 2 & 1\end{bmatrix}\begin{bmatrix}4 & -1 & 1\\ 2 & 2 & -3\\ 1 & 1 & 0\end{bmatrix}$　(10) $\begin{bmatrix}1 & -1 & 2\end{bmatrix}\begin{bmatrix}3 & 0 & 1\\ 2 & 4 & -1\\ 1 & -1 & 4\end{bmatrix}$

(11) $\begin{bmatrix}1 & 3\\ -2 & 1\\ 5 & -4\\ -3 & 1\end{bmatrix}\begin{bmatrix}1 & -1 & 4\\ -2 & 1 & -1\end{bmatrix}$　(12) $\begin{bmatrix}2 & i\\ -i & 3\end{bmatrix}\begin{bmatrix}2-i & i\\ 0 & 1+i\end{bmatrix}$　□

問 2.88　(巾行列)　次の巾行列を求めよ．ただし，$n=2,3,4\cdots$ とする．

(1) $\begin{bmatrix}a & b\\ c & -a\end{bmatrix}^2$　(2) $\begin{bmatrix}0 & -1\\ 1 & 0\end{bmatrix}^2$　(3) $\begin{bmatrix}1 & 1 & -1\\ 2 & -1 & 0\\ 1 & -2 & 1\end{bmatrix}^3$　(4) $\begin{bmatrix}1 & 2\\ 0 & 1\end{bmatrix}^n$　(5) $\begin{bmatrix}1 & 1 & 0\\ 0 & 1 & 1\\ 0 & 0 & 1\end{bmatrix}^n$　(6) $\begin{bmatrix}0 & 0 & -1 & 0\\ 0 & 0 & 0 & -1\\ 1 & 0 & 0 & 0\\ 0 & 1 & 0 & 0\end{bmatrix}^n$

□

問 2.89 （行列の演算） 次の関係式をみたす行列 X を求めよ．

(1) $A=\begin{bmatrix}2 & -3\\ 4 & 5\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}-5 & 2\\ 3 & 7\end{bmatrix}$, $3X+2A=5B$

(2) $A=\begin{bmatrix}1 & 2\\ 3 & 4\\ 5 & 0\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}-3 & -2\\ 1 & -5\\ 4 & 3\end{bmatrix}$, $2A+B-5X=0$

(3) $A=\begin{bmatrix}-1 & 1 & 1\\ 2 & 0 & 3\end{bmatrix}$, $B=\begin{bmatrix}5 & 3 & 5\\ 4 & 4 & 9\end{bmatrix}$, $3A=B-2X$ □

問 2.90 （行列の演算） $3\begin{bmatrix}x & y\\ z & w\end{bmatrix}=\begin{bmatrix}x & 6\\ -1 & 2w\end{bmatrix}+\begin{bmatrix}4 & x+y\\ z+w & 3\end{bmatrix}$ をみたす x, y, z, w を求めよ．

□

問 2.91 （行列の演算） $\begin{bmatrix}0 & c & b\\ c & 0 & a\\ b & a & 0\end{bmatrix}^2=\begin{bmatrix}b^2+c^2 & ab & ca\\ ab & c^2+a^2 & bc\\ ca & bc & a^2+b^2\end{bmatrix}$ を証明せよ． □

問 2.92 （行列の演算） $A=\begin{bmatrix}a_1 & a_2 & a_3\\ 0 & a_4 & a_5\\ 0 & 0 & a_6\end{bmatrix}$ について $AA^T=\begin{bmatrix}14 & 1 & 6\\ 1 & 5 & 2\\ 6 & 2 & 4\end{bmatrix}$ となる A を求めよ．

□

問 2.93 （乗算の可換性） $X=\begin{bmatrix}0 & 1\\ -1 & 0\end{bmatrix}$ とおく．$AX=XA$, $BX=XB$ をみたすならば，$AB=BA$ であることを示せ． □

問 2.94 （乗算の可換性） $AB=A$, $BA=B$ をみたすとき，$A^2=A$, $B^2=B$ となることを示せ． □

問 2.95 （乗算の可換性） 次の行列と可換な正方行列をすべて求めよ．

(1) $\begin{bmatrix}0 & 1\\ -1 & 0\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}1 & 1 & 0\\ 0 & 1 & 1\\ 0 & 0 & 1\end{bmatrix}$ □

問 2.96 （行列の分割） 次の条件式をみたす行列 A を求めよ．また，その転置行列 A^T を求めよ．ただし，$a\neq 0, b\neq 0, c\neq 0$ とする．

(1) $\begin{bmatrix}2a & 3a+2 & -b & 3c\\ -a & 2a-1 & 0 & c\\ a & -a+1 & b & -c\\ 0 & a & 2b & 2c\end{bmatrix}=A\begin{bmatrix}a & 1 & 0 & 0\\ 0 & a & 0 & 0\\ 0 & 0 & b & 0\\ 0 & 0 & 0 & c\end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix}-a & b & 2b+1 & c\\ a & 3b & b+3 & -c\\ 2a & -b & b-1 & 0\\ 0 & 2b & -b+2 & 2c\end{bmatrix}=A\begin{bmatrix}a & 0 & 0 & 0\\ 0 & b & 1 & 0\\ 0 & 0 & b & 0\\ 0 & 0 & 0 & c\end{bmatrix}$ □

3 連立 1 次方程式

§ 3.1 連立 1 次方程式の行列表現

連立 1 次方程式

$$\begin{cases} 2x + 3y = 7 \\ x - 4y = 9 \end{cases} \tag{377}$$

を考える．行列を用いて書き直すと等価な方程式として

$$\begin{bmatrix} 2 & 3 \\ 1 & -4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 7 \\ 9 \end{bmatrix} \tag{378}$$

を得る．一般に変数 n 個，方程式 m 本の連立 1 次方程式は

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{m1}x_1 + a_{m2}x_2 + \cdots + a_{mn}x_n = b_m \end{cases} \tag{379}$$

と表される．これを連立 n 元 **1** 次方程式 (**simultaneous linear equations**) という．行列で書き直すと，

$$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_m \end{bmatrix} \tag{380}$$

となる．行列をそれぞれ文字で置き換えて

$$A\,\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}\,, \qquad A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \qquad \boldsymbol{x} = [x_j]_{n\times 1}\,, \qquad \boldsymbol{b} = [b_i]_{m\times 1} \tag{381}$$

と表される．行列により表現された方程式と元の連立 1 次方程式は等価な方程式である．

$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{0}$ のとき同次連立 **1** 次方程式または単に同次形 (**homogeneous equations???**) という．$\boldsymbol{b} \neq \boldsymbol{0}$ のとき非同次連立 **1** 次方程式または非同次形 (**inhomogeneous equations???**) という．

定義 3.1 （係数行列） 連立 1 次方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ の係数をまとめた行列

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{bmatrix} \tag{382}$$

を係数行列（**coefficient matrix**）と呼ぶ．行列 A と $\boldsymbol{b}$ を部分行列としてまとめた行列

$$[A|\boldsymbol{b}] = \left[\begin{array}{cccc|c} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} & b_1 \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} & b_2 \\ \vdots & & \ddots & \vdots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} & b_m \end{array}\right] \tag{383}$$

のことを拡大係数行列（**enlarged coefficient matrix**）と呼ぶ． □

例 3.2 （連立 **1** 次方程式の行列表現の具体例） 連立 1 次方程式

$$\begin{cases} 3x_1 & -2x_2 & +x_3 & +x_4 & = 7 \\ x_1 & & -3x_3 & +x_4 & = 5 \\ 2x_1 & -x_2 & +9x_3 & & = 0 \end{cases} \tag{384}$$

の係数行列と拡大係数行列は

$$A = \begin{bmatrix} 3 & -2 & 1 & 4 \\ 1 & 0 & -3 & 1 \\ 2 & -1 & 9 & 0 \end{bmatrix}, \qquad [A|\boldsymbol{b}] = \begin{bmatrix} 3 & -2 & 1 & 4 & 7 \\ 1 & 0 & -3 & 1 & 5 \\ 2 & -1 & 9 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{385}$$

である．行列を用いて方程式を書き直すと

$$\begin{bmatrix} 3 & -2 & 1 & 4 \\ 1 & 0 & -3 & 1 \\ 2 & -1 & 9 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 7 \\ 5 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{386}$$

と表される． □

問 3.3 教科書（p.18）問題 1.4 1.–2. □

§ 3.2 ベクトルの 1 次結合と連立 1 次方程式

定義 3.4 （ベクトルの 1 次結合） m 個のベクトル $\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{a}_2, \cdots, \boldsymbol{a}_m$ が与えられたとき，ベクトル

$$c_1\boldsymbol{a}_1 + c_2\boldsymbol{a}_2 + \cdots + c_m\boldsymbol{a}_m \tag{387}$$

を $\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{a}_2, \cdots, \boldsymbol{a}_m$ の **1 次結合 (linear combination)** と呼ぶ．□

例 3.5 （ベクトルの 1 次結合の具体例） 2 次の列ベクトル $\begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix}$ を $\begin{bmatrix}1\\0\end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix}0\\1\end{bmatrix}$ の 1 次結合で表すと

$$\begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix} = 2\begin{bmatrix}1\\0\end{bmatrix} + 3\begin{bmatrix}0\\1\end{bmatrix} \tag{388}$$

となる．□

連立 1 次方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ の係数行列 A を列ベクトルで分割し $A = [\boldsymbol{a}_1, \cdots, \boldsymbol{a}_n]$ と書き直すと，方程式は

$$A\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix}\boldsymbol{a}_1 & \cdots & \boldsymbol{a}_m\end{bmatrix}\begin{bmatrix}x_1\\ \vdots \\ x_n\end{bmatrix} = x_1\boldsymbol{a}_1 + \cdots + c_m\boldsymbol{a}_m = \boldsymbol{b} \tag{389}$$

となる．すなわち $\boldsymbol{b} = x_1\boldsymbol{a}_1 + \cdots + c_m\boldsymbol{a}_m$ となる．これはベクトル $\boldsymbol{b}$ を $\boldsymbol{a}_1, \cdots, \boldsymbol{a}_n$ の 1 次結合で表したものに他ならない．連立 1 次方程式は 1 次結合の係数 $x_1, x_2, \cdots, x_n$ を求める問題と等価である．

例 3.6 （ベクトルの 1 次結合と連立 1 次方程式の関係の具体例） $\begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix}$ を $\begin{bmatrix}3\\5\end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix}1\\3\end{bmatrix}$ の 1 次結合で表す．すなわち

$$\begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix} = x_1\begin{bmatrix}3\\5\end{bmatrix} + x_2\begin{bmatrix}1\\3\end{bmatrix} \tag{390}$$

を満たす係数 x_1, x_2 を求める．これを書き直すと

$$\begin{bmatrix}3 & 1\\5 & 3\end{bmatrix}\begin{bmatrix}x_1\\x_2\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix} \tag{391}$$

となる．結局，連立 1 次方程式を求める問題に帰着する．これを解くと $x_1 = 3/4$, $x_2 = -1/4$ となる．よって

$$\begin{bmatrix}2\\3\end{bmatrix} = \frac{3}{4}\begin{bmatrix}3\\5\end{bmatrix} - \frac{1}{4}\begin{bmatrix}1\\3\end{bmatrix} \tag{392}$$

を得る．□

問 3.7 教科書 (p.18) 問題 1.4 3.–6. □

§ 3.3 連立 1 次方程式の基本変形

定義 3.8 （連立 1 次方程式の基本変形） 連立 1 次方程式に対する次のの操作を連立 1 次方程式の基本変形と呼ぶ．

(1) 一つの式を $\alpha\,(\neq 0)$ 倍する．

(2) 二つの式を入れ替える．

(3) 一つの式を α 倍して別の行に加える．

□

連立 1 次方程式に基本変形をして得られた方程式と元の方程式とは等価な方程式である．すなわち両者は同じ解をもつ．

連立 1 次方程式とその行列表現は，方程式としては等価なものである．連立 1 次方程式の基本変形は，行列表現では次の行列の行の基本変形となる．

定義 3.9 （行列の行の基本変形） 行列に対する次の操作を行列の行の基本変形（**matrix elementary row transformation**）と呼ぶ．

(1) 一つの行を $\alpha\,(\neq 0)$ 倍する．

(2) 二つの行を入れ替える．

(3) 一つの行を α 倍して別の行に加える．

□

定理 3.10 （掃き出し法） 拡大係数行列 $[A|\boldsymbol{b}]$ に基本変形を繰り返し行ない，

$$[A|\boldsymbol{b}] \to \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & & & 0 & \tilde{b}_1 \\ & 1 & & & \tilde{b}_2 \\ & & \ddots & & \vdots \\ 0 & & & 1 & \tilde{b}_m \end{array}\right] \tag{393}$$

の形に変形ができたとする．このとき解は

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} \tilde{b}_1 \\ \tilde{b}_2 \\ \vdots \\ \tilde{b}_m \end{bmatrix} \tag{394}$$

と得られる．この解法を掃き出し法（**sweeping-out method**）またはガウスの消去法（**Gaussian elimination**）と呼ぶ．

□

例 3.11 （掃き出し法による計算例） 連立 1 次方程式

$$\begin{cases} 2x & + & 3y & = 8 \\ x & + & 2y & = 5 \end{cases} \tag{395}$$

を考える．基本変形を繰り返し行なう．連立方程式とその拡大係数行列

$$\begin{cases} 2x & + & 3y & = 8 \\ x & + & 2y & = 5 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 2 & 3 & 8 \\ 1 & 2 & 5 \end{array}\right] \tag{396}$$

に基本変形をほどこす．第二式を -2 倍し第一式に加えると

$$\begin{cases} & & -y & = -2 \\ x & + & 2y & = 5 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 0 & -1 & -2 \\ 1 & 2 & 5 \end{array}\right] \tag{397}$$

を得る．第一式と第二式を入れ換えて

$$\begin{cases} x & + & 2y & = 5 \\ & & -y & = -2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 2 & 5 \\ 0 & -1 & -2 \end{array}\right] \tag{398}$$

となる．第二式を 2 倍し第一式に加えると

$$\begin{cases} x & & & = 1 \\ & & -y & = -2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & -2 \end{array}\right] \tag{399}$$

となる．第二式を -1 倍すると

$$\begin{cases} x & & = 1 \\ & y & = 2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{400}$$

を得る．結局拡大係数行列は

$$\left[\begin{array}{cc|c} 2 & 3 & 8 \\ 1 & 2 & 5 \end{array}\right] \to \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{401}$$

と変形された．以上より，解は $(x, y) = (1, 2)$ と求まる． □

例 3.12 （掃き出し法による計算例） 連立 1 次方程式

$$\begin{cases} 2x + 3y - z = -3 \\ -x + 2y + 2z = 1 \\ x + y - z = -2 \end{cases} \tag{402}$$

を考える．拡大係数行列に基本変形を繰り返し行なう．連立 1 次方程式とその拡大係数行列

$$\begin{cases} 2x + 3y - z = -3 \\ -x + 2y + 2z = 1 \\ x + y - z = -2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 2 & 3 & -1 & -3 \\ -1 & 2 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & -1 & -2 \end{array}\right] \tag{403}$$

に基本変形をほどこす．第三行を -2 倍して第一式に足すと

$$\begin{cases} y + z = 1 \\ -x + 2y + 2z = 1 \\ x + y - z = -2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 0 & 1 & 1 & 1 \\ -1 & 2 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & -1 & -2 \end{array}\right] \tag{404}$$

となる．第三行を第一式に足すと

$$\begin{cases} y + z = 1 \\ 3y + z = -1 \\ x + y - z = -2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 3 & 1 & -1 \\ 1 & 1 & -1 & -2 \end{array}\right] \tag{405}$$

となる．第一式と第三行を入れ替えると

$$\begin{cases} x + y - z = -2 \\ 3y + z = -1 \\ y + z = 1 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 1 & -1 & -2 \\ 0 & 3 & 1 & -1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \end{array}\right] \tag{406}$$

となる．第三式を -1 倍して第一行に加えると

$$\begin{cases} x - 2z = -3 \\ 3y + z = -1 \\ y + z = 1 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & -2 & -3 \\ 0 & 3 & 1 & -1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \end{array}\right] \tag{407}$$

となる．第三式を -3 倍して第二行に加えると

$$\begin{cases} x - 2z = -3 \\ -2z = -4 \\ y + z = 1 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & -2 & -3 \\ 0 & 0 & -2 & -4 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \end{array}\right] \tag{408}$$

となる．第二式と第三式を入れ替えると

$$\begin{cases} x - 2z = -3 \\ y + z = 1 \\ -2z = -4 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & -2 & -3 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & -2 & -4 \end{array}\right] \tag{409}$$

となる．第三式を $-\dfrac{1}{2}$ 倍すると

$$\begin{cases} x & & - & 2z & = -3 \\ & y & + & z & = 1 \\ & & & z & = 2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & -2 & -3 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{410}$$

となる．第三式を 2 倍して第一式に足すと

$$\begin{cases} x & & & & = 1 \\ & y & + & z & = 1 \\ & & & z & = 2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{411}$$

となる．第三式を -1 倍して第二式に足すと

$$\begin{cases} x & & & & = 1 \\ & y & & & = -1 \\ & & & z & = 2 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{412}$$

となる．よって

$$\left[\begin{array}{ccc|c} 2 & 3 & -1 & -3 \\ -1 & 2 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & -1 & -2 \end{array}\right] \to \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{413}$$

を得る．以上より，解は $(x, y, z) = (1, -1, 2)$ と求まる． □

例 3.13 （掃き出し法による計算例） 連立 1 次方程式

$$\begin{cases} x + y - z = 1 \\ 2x + y + 3z = 4 \\ -x + 2y - 4z = -2 \end{cases} \tag{414}$$

を考える．拡大係数行列に基本変形を繰り返し行ない，

$$\left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 1 & -1 & 1 \\ 2 & 1 & 3 & 4 \\ -1 & 2 & -4 & -2 \end{array}\right] \to \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 1/2 \\ 0 & 0 & 1 & 1/2 \end{array}\right] \tag{415}$$

を得る．以上より，解は $(x, y, z) = (1, 1/2, 1/2)$ と求まる． □

問 3.14 教科書 (p.22) 問題 2.1 ． □

§ 3.4 演習問題 ~ 連立 1 次方程式，掃き出し法

問 3.15 （連立 1 次方程式） 次の連立 1 次方程式を行列を用いて表せ．また連立 1 次方程式の係数行列，拡大係数行列を求めよ．

(1) $\begin{cases} 2x_1 + 3x_2 = -1 \\ x_1 - x_2 = 2 \end{cases}$ (2) $\begin{cases} x_1 + 2x_2 - x_3 = 2 \\ -x_1 + 3x_3 = 8 \\ x_2 - 2x_3 = -4 \end{cases}$ (3) $\begin{cases} 3x_1 - 2x_2 + x_3 + 4x_4 = 7 \\ x_1 - 3x_3 + x_4 = 5 \\ 2x_1 - x_2 + 9x_3 = 0 \end{cases}$

□

問 3.16 （掃き出し法） 次の連立 1 次方程式の解を求めよ．ただし，a は実数とする．

(1) $\begin{cases} 2x_1 + 3x_2 = -1 \\ x_1 - x_2 = 2 \end{cases}$ (2) $\begin{cases} 3x_1 + 2x_2 = 0 \\ x_1 - 2x_2 = 8 \end{cases}$ (3) $\begin{cases} x - y + 2z = 8 \\ 2x + 3y + z = 5 \\ -x + 4y + 4z = 1 \end{cases}$

(4) $\begin{cases} 2x + y - z = -1 \\ 4x + y - 3z = -7 \\ -2x - 2y + 5z = 6 \end{cases}$ (5) $\begin{cases} x_1 + 2x_2 - x_3 = 2 \\ -x_1 + 3x_3 = 8 \\ x_2 - 2x_3 = -4 \end{cases}$ (6) $\begin{cases} x_1 + x_2 - x_3 = 1 \\ 2x_1 + x_2 + 3x_3 = 4 \\ -x_1 + 2x_2 - 4x_3 = -2 \end{cases}$

(7) $\begin{cases} 2x + y + z = 2 \\ 4x + 2y + 3z = 1 \\ -2x - 2y = -1 \end{cases}$ (8) $\begin{cases} 2x + y + z = 2 \\ 4x + y + 3z = 2 \\ x - y + 7z = 3 \end{cases}$ (9) $\begin{cases} 2x + 3y - z = -3 \\ -x + 2y + 2z = 1 \\ x + y - z = -2 \end{cases}$

(10) $\begin{cases} 2x - y + 3z = 2 \\ x - y - 2z = 3 \\ -2x + 2y + z = -3 \end{cases}$ (11) $\begin{cases} x + 2y - 3z = -6 \\ 2x - 3y + z = 16 \\ 8x + y - 5z = 24 \end{cases}$ (12) $\begin{cases} -x + 3y - z = -5 \\ x - y + 5z = 7 \\ 2x - 3y + z = -1 \end{cases}$

(13) $\begin{cases} 2x - y + z - w = 4 \\ x - y - z + w = 5 \\ -2x + 2y + z + 2w = -4 \\ -x + y - z + 3w = 3 \end{cases}$ (14) $\begin{cases} -3x - y + z + w = 4 \\ 2x + y - w = -2 \\ -5x - y + z + 4w = 5 \\ x + y + z + w = -2 \end{cases}$ (15) $\begin{cases} 2x + y - z = 0 \\ 4x + y - 3z = 0 \\ -2x - 2y + 5z = 0 \end{cases}$

(16) $\begin{cases} 2x + y + z = 2 \\ 4x + 2y + 3z = 5 \\ 2x + 2z = 4 \end{cases}$ (17) $\begin{cases} -x + 2y - 3z = -4 \\ 2x - 4y + z = 13 \\ 3x - 3y + 6z = 9 \end{cases}$ (18) $\begin{cases} -y + 2z = 4 \\ -2x - y - 2z = -5 \\ 3x + 2y + 4z = 6 \end{cases}$

(19) $\begin{cases} x + 2y - z = 2 \\ 2x + 4y - 6z = -8 \\ 3x + 5y + -7z = -8 \end{cases}$ (20) $\begin{cases} x + 2y - z + w = 1 \\ 2x + 4y - z + 4w = 3 \\ -2x - 4y + 3z + w = -1 \\ 3x + 7y - z + 7w = 5 \end{cases}$

(21) $\begin{cases} x - y + 2z - 4w = -3 \\ 2x - 2y + 3z - 6w = -4 \\ -x + 2y - 3z + 6w = 6 \\ -3x + 3y - 4z + 7w = 4 \end{cases}$ (22) $\begin{cases} x - y - 3z - 2w = -2 \\ y + 2z + w = 1 \\ 2x + y - aw = -1 \\ x + 2y + 3z + w = a^2 \end{cases}$

□

§ 3.5 連立方程式の解の集合

注意 3.17 （連立方程式の解の集合） 連立方程式

$$\begin{cases} a_{11}x + a_{12}y &= b_1 \\ a_{21}x + a_{22}y &= b_2 \end{cases} \tag{416}$$

を考える．第 1 式，第 2 式をみたす点 (x, y) の集合はそれぞれ $\mathbb{R}^2$ 内の直線を表す．連立方程式の解はこの 2 つの式を同時にみたす点の集合であるらか，2 つの直線の交点が連立方程式の解となる．交点をもつ条件は次の 3 つに分けられる．

(i) 1 点で交わる場合．このとき解は一意な解と呼ぶ．

(ii) 2 つの直線が重なり 1 つの直線となる場合．このとき交点は直線上のすべての点である．解は一意には表すことができず，任意定数を用いて表す．この解を任意定数を含む解と呼ぶことにする．

(iii) 2 つの直線が平行であり，交わらない場合．このとき解なしとなる．

□

注意 3.18 （連立方程式の解の集合） 上の 3 つ場合となるための $a_{11}, a_{12}, a_{21}, a_{22}, b_1, b_2$ に関する条件を求めよ．

□

注意 3.19 （連立方程式の解の集合） 連立 1 次方程式

$$x + y = 1 \tag{417}$$

を考える．この方程式の解は直線上のすべての点であるから，解が一意には定まらない．解を具体的に書き下す．方程式を変形すると

$$y = 1 - x \tag{418}$$

である．この式の右辺の x は任意の値をとることが可能である．左辺の y は与えられた x の値に応じて値が一つ定まる．このとき解は

$$\begin{cases} x = c \\ y = 1 - c \end{cases} \tag{419}$$

と表される．ただし c は任意の定数とする．また解は

$$\begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c \\ 1-c \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} + c \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix} = \boldsymbol{q} + c\,\boldsymbol{p} \tag{420}$$

と書ける．よって解全体がなす集合は点 $\boldsymbol{q}$ を通り方向ベクトル $\boldsymbol{p}$ の直線となる．また，拡大係数行列は

$$[A \,|\, \boldsymbol{b}] = \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 1 & 1 \end{array}\right] \tag{421}$$

であり，掃き出し法の形には当てはまらない．

□

注意 3.20 （連立方程式の解の集合） 連立方程式

$$\begin{cases} a_{11}x + a_{12}y + a_{13}z &= b_1 \\ a_{21}x + a_{22}y + a_{23}z &= b_2 \\ a_{31}x + a_{32}y + a_{33}z &= b_3 \end{cases} \tag{422}$$

を考える．第 1 式，第 2 式，第 3 式をみたす点 (x, y, z) の集合はそれぞれ $\mathbb{R}^3$ 内の平面を表す．平面の交点をもつ条件は次の 4 つに分けられる．(i) 1 点で交わる場合．(ii) 直線となる場合．(iii) 平面となる場合．(iv) 交点がない場合．

□

注意 3.21 （連立方程式の解の集合） 連立 1 次方程式

$$\begin{cases} x \quad + \quad 2z &= 1 \\ y \quad + \quad z &= 2 \end{cases} \tag{423}$$

を考える．方程式の解を書き下す．方程式を書き直すと

$$\begin{cases} x &= 1 \quad -2z \\ y &= 2 \quad -z \end{cases} \tag{424}$$

となる．左辺には x, y があり，右辺は z のみである．右辺の z にある値が 1 つ与えらると，その z に応じて左辺の x, y の値がそれぞれ定まる．よって c を任意の値として $z = c$ とおくと，解は

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 - 2c \\ 2 - c \\ c \end{bmatrix} = c \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 0 \end{bmatrix} = c\,\boldsymbol{p} + \boldsymbol{q} \tag{425}$$

と表される．解全体の集合は 3 次元空間 $\mathbb{R}^3$ 内の点 $\boldsymbol{q}$ を通り方向ベクトル $\boldsymbol{p}$ の直線である．また，拡大係数行列は

$$[A \,|\, \boldsymbol{b}] = \left[\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 2 \end{array}\right] \tag{426}$$

であり，掃き出し法の形には当てはまらない．

□

§ 3.6 行列の簡約化

定義 3.22 （階段行列） 行列が

$$\left[\begin{array}{cccccccc} 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 & ** \\ & & 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** \\ & & & & 1 & ** & 0 & ** \\ \multicolumn{2}{c}{\multirow{2}{*}{0}} & & & & & 1 & ** \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 \\ \vdots & & & & & & & \vdots \\ 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 \end{array}\right] \tag{427}$$

という形をしているとき，この行列を簡約な行列または階段行列と呼ぶ．また，各行の一番左の 0 ではない成分を主成分と呼ぶ．

□

例 3.23 （簡約な行列の具体例） 次の行列は簡約な行列である：

$$\begin{bmatrix} 0 & 1 & 3 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 1 & 0 & 1 & 4 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 7 & -4 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 3 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 & 2 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \tag{428}$$

$$\begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 & 6 & 0 & 3 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 2 & 8 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}. \tag{429}$$

□

定義 3.24 （簡約化） 行列 A に基本変形を繰り返し，簡約な行列 B を得ることを簡約化と呼ぶ．

□

例 3.25 （簡約化の計算例） 簡約化の具体的な計算例を示す：

(1)

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 2 & 1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{430}$$

（第一行目を $1/2$ 倍する .)

$$\to \begin{bmatrix} 0 & 1 & 1/2 & 0 & 1/2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} = B \tag{431}$$

(2)

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 1/3 & 1/2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 1/3 & 2/3 \end{bmatrix} \tag{432}$$

(第二行目と第三行目を入れ替える .)

$$\to \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 1/3 & 1/2 \\ 0 & 0 & 1 & 1/3 & 2/3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} = B \tag{433}$$

(3)

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 3 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{434}$$

(第二行目を -3 倍し第一行目に加える .)

$$\to \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & -5 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{435}$$

(第三行目を -2 倍し第一行目に加える .)

$$\to \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & -5 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} = B \tag{436}$$

(4)

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & -2 \\ 1 & 3 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \tag{437}$$

(第一行目を第三行目を入れ替える .)

$$\to \begin{bmatrix} 1 & 3 & 0 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & -2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \end{bmatrix} = B \tag{438}$$

□

定理 3.26 (簡約化の一意性)　任意の行列は基本変形により一意に簡約化できる .　□

§ 3.7 行列の階数

定義 3.27 （行列の階数） 行列 A を簡約化した行列を B とする．このとき行列 A に対する行列の階数（**rank**）を

$$\mathrm{rank}\,(A) = B \text{ の零ベクトルではない行の個数} \tag{439}$$

と定義する．

□

例 3.28 （階数の具体例）

$$A \overset{\text{簡約化}}{\longrightarrow} B = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 0 & 0 & 4 \\ 0 & 0 & 1 & 3 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \qquad \mathrm{rank}\,(A) = 2\,. \tag{440}$$

□

例 3.29 （階数の具体例） 例 3.25 の行列の階数：

$$(1) \quad \mathrm{rank}\,(A) = 2 \qquad (2) \quad \mathrm{rank}\,(A) = 2 \tag{441}$$

$$(3) \quad \mathrm{rank}\,(A) = 3 \qquad (4) \quad \mathrm{rank}\,(A) = 3 \tag{442}$$

□

定理 3.30 （階数に関する定理） 行列 A が $m \times n$ 型のとき，

$$\mathrm{rank}\,(A) \leq m\,, \qquad \mathrm{rank}\,(A) \leq n \tag{443}$$

が成り立つ．

□

問 3.31 これを示せ．

□

問 3.32 教科書（p.27）問題 2.2．

□

§ 3.8 任意定数を含む解をもつ連立 1 次方程式

例 3.33 （任意定数を含む解の具体例） 方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 \\ 1 & -2 & 1 & 2 & 1 \\ 2 & -4 & 1 & 5 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ 2 \\ 5 \end{bmatrix} \tag{444}$$

を考える．拡大係数行列の簡約化を行なうと，

$$\left[\begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 1 & -2 & 1 & 2 & 1 & 2 \\ 2 & -4 & 1 & 5 & 2 & 5 \end{array}\right] \to \left[\begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \end{array}\right] \tag{445}$$

を得る．ここで

$$\operatorname{rank}(A) = 3\,, \quad \operatorname{rank}([A \,|\, \boldsymbol{b}]) = 3 \tag{446}$$

が成立することに注意する．簡約化された拡大係数行列より方程式を復元すると，

$$\begin{cases} x_1 & -2x_2 & & +3x_4 & & = 2 \\ & & x_3 & -x_4 & & = -1 \\ & & & & x_5 & = 1 \end{cases} \tag{447}$$

である．主成分の列と同じ位置にある変数を左辺に残し，他の項を右辺に移項すると

$$\begin{cases} x_1 &= 2 + 2x_2 - 3x_4 \\ x_3 &= -1 + x_4 \\ x_5 &= 1 \end{cases} \tag{448}$$

となる．右辺にある変数 $x_2,\, x_4$ は独立に任意の値をとる．よって $x_2 = c_1,\, x_4 = c_2$ とおけば，解として

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 + 2c_1 - 3c_2 \\ c_1 \\ -1 + c_2 \\ c_2 \\ 1 \end{bmatrix} \qquad (c_1, c_2 \text{ ：任意定数}) \tag{449}$$

$$= \begin{bmatrix} 2 \\ 0 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} + c_1 \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} + c_2 \begin{bmatrix} -3 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{450}$$

を得る．解は 5 次元平面 $\mathbb{R}^5$ 内のある 2 次元平面となる． □

§ 3.9 解が存在しない連立 1 次方程式

例 3.34 （解が存在しない具体例） 方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 \\ -1 & 0 & 1 & 1 & 1 \\ 2 & 1 & -1 & 0 & -3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \\ 3 \\ 1 \end{bmatrix} \tag{451}$$

を考える．拡大係数行列の簡約化を行なうと，

$$[A|\boldsymbol{b}] = \left[\begin{array}{ccccc|c} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & -2 \\ -1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 3 \\ 2 & 1 & -1 & 0 & -3 & 1 \end{array}\right] \to \left[\begin{array}{ccccc|c} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 & 0 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -1 & 0 \\ \hline 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{array}\right] \tag{452}$$

を得る．方程式に書き戻すと

$$\begin{cases} x_1 & & -x_3 & & -2x_5 & = 0 \\ & x_2 & +x_3 & & +x_5 & = 0 \\ & & & x_4 & -x_5 & = 0 \\ 0 & +0 & +0 & +0 & +0 & = 1 \end{cases} \tag{453}$$

となる．最後の行は $0 = 1$ となるから，どのような $\boldsymbol{x}$ をとっても成立することはない．よってこの連立方程式の解は存在しない．ここで

$$\operatorname{rank}(A) = 3 < \operatorname{rank}([A \,|\, \boldsymbol{b}]) = 4 \tag{454}$$

が成り立つことに注意する．このとき解をもたない． □

§ 3.10 解をもつための連立 1 次方程式の条件

連立 1 次方程式

$$A\,\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}\,, \qquad A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \quad \boldsymbol{b} = [b_i]_{m\times 1}\,, \quad \boldsymbol{x} = [x_j]_{n\times 1} \tag{455}$$

を考える．以後この方程式に対して議論する．

方程式 $A\,\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ の解を求めるにはまず，拡大係数行列 $[A|\boldsymbol{b}]$ の簡約化を行なう．このとき得られた行列が

$$[A|\boldsymbol{b}] \overset{\text{簡約化}}{\longrightarrow} \left[\begin{array}{cccccccc|c} 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 \\ & & 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 \\ & & & & 1 & ** & 0 & ** & 0 \\ \multicolumn{2}{c}{\multirow{2}{*}{\Large 0}} & & & & & 1 & ** & 0 \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 1 \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 0 \\ 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 0 \end{array}\right] \tag{456}$$

と得られたとしよう．このとき零ベクトルではない一番下の行に着目すると

$$0\times x_1 + 0\times x_2 + 0\times x_3 + \cdots + 0\times x_n = 1 \tag{457}$$

となる．$0 = 1$ となり矛盾する．よってこのとき，方程式 $A\,\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ は解をもたない．各係数行列のランクに着目すると，

$$A \overset{\text{簡約化}}{\longrightarrow} \left[\begin{array}{cccccccc} 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 & ** \\ & & 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** \\ & & & & 1 & ** & 0 & ** \\ \multicolumn{2}{c}{\multirow{2}{*}{\Large 0}} & & & & & 1 & ** \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 \end{array}\right] \tag{458}$$

であるから，

$$\mathrm{rank}\,(A) < \mathrm{rank}\,([A\,|\,\boldsymbol{b}]) \tag{459}$$

が成り立つ．この条件のもとでは解をもたない．次に簡約化の結果として

$$[A|\boldsymbol{b}] \text{ の簡約化行列} = \left[\begin{array}{cccccccc|c} 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & 0 & ** & * \\ & & 1 & ** & 0 & ** & 0 & ** & * \\ & & & & 1 & ** & 0 & ** & * \\ \multicolumn{2}{c}{\multirow{2}{*}{\Large 0}} & & & & & 1 & ** & * \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 0 \\ \hline 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 0 \\ 0 & \cdots & & & & & \cdots & 0 & 0 \end{array}\right] \tag{460}$$

を得たとする．こときは解をもつ．係数行列のランクは $\mathrm{rank}\,(A) = \mathrm{rank}\,([A|\boldsymbol{b}])$ が成り立つ．以上をまとめると次の定理が成り立つ．

定理 3.35 （連立 1 次方程式の可解条件） 方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ が解をもつための必要十分条件は

$$\mathrm{rank}\,([A|\boldsymbol{b}]) = \mathrm{rank}\,(A) \tag{461}$$

である．

□

解に任意定数を含まないのは，簡約行列のすべての列に主成分が現れるときである．つまり係数行列のランクと変数の個数が一致するときである．これをまとめると以下の定理を得る．

定理 3.36 （一意な解をもつ条件） 方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ が唯一つの解をもつための必用十分条件は

$$\mathrm{rank}\,(A) = \mathrm{rank}\,([A|\boldsymbol{b}]) = n \tag{462}$$

である．

□

定理 3.37 （任意定数を含む解をもつ条件） 方程式

$$A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}\,, \quad A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \quad \boldsymbol{x} = [x_j]_{n\times 1}\,, \quad \boldsymbol{b} = [b_i]_{m\times 1} \tag{463}$$

は

$$\mathrm{rank}\,(A) = \mathrm{rank}\,[A|\boldsymbol{b}] < n \tag{464}$$

のとき任意定数を含む解をもつ．このとき任意定数の個数は

$$n - \mathrm{rank}\,(A) \tag{465}$$

である．

□

§ 3.11 同次形の解

定義 3.38 （同次形方程式） $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{b}$ において $\boldsymbol{b}=0$ が成り立つとき，方程式 $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ は同次形（**homogeneous**）と呼ぶ．$\boldsymbol{b}\neq\boldsymbol{0}$ とき非同次形（**inhomogeneous**）と呼ぶ． □

定理 3.39 （同次形の解の存在） 同次方程式は $\mathrm{rank}\,(A)=\mathrm{rank}\,[A|\boldsymbol{0}]$ が常になり立つので，常に解 $\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ をもつ． □

定義 3.40 （同次形の自明解） 同次方程式 $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ の解 $\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ を自明な解と呼ぶ． □

定理 3.41 （同次方程式の解） 同次方程式 $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ について次の条件が成り立つ：

(1) 自明な解 $\boldsymbol{x}=\boldsymbol{0}$ のみをもつための必用十分条件は

$$\mathrm{rank}\,(A)=n \tag{466}$$

である．

(2) $m<n$ のとき，方程式は自明でない解（任意定数を含む解）をもつ．

（証明）(1) 前述の定理より唯一つの解をもつための必要十分条件は

$$\mathrm{rank}\,(A)=\mathrm{rank}\,([A|\boldsymbol{0}])=n \tag{467}$$

である．拡大係数行列の一番右の列の $\boldsymbol{0}$ はランクに影響を与えない．よって定理の条件を得る．
(2) $\mathrm{rank}\,(A)\leq m$, $\mathrm{rank}\,(A)\leq n$ と条件 $m<n$ より

$$\mathrm{rank}\,(A)\leq m<n \tag{468}$$

を得る．(1) の定理より自明でない解をもつ．証明終了． □

例 3.42 (同次形方程式の解)　方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & -2 & 0 & 3 \\ 1 & -1 & 1 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{469}$$

を考える．係数行列を簡約化して

$$\begin{bmatrix} 1 & -2 & 0 & 3 \\ 1 & -1 & 1 & 2 \end{bmatrix} \to \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & -1 \end{bmatrix} \tag{470}$$

を得る．よって解は

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} -2c_1 - c_2 \\ -c_1 + c_2 \\ c_1 \\ c_2 \end{bmatrix} = c_1 \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} + c_2 \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \qquad (\forall c_1, \forall c_2 \in \mathbb{R}) \tag{471}$$

となる．解は原点を通る 2 次元平面である．

□

例 3.43 (同次形方程式の解)　方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{472}$$

を考える．係数行列を簡約化して

$$\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix} \to \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{473}$$

を得る．$\mathrm{rank}\,(A) = 3$ であり，任意定数の個数は $n - \mathrm{rank}\,(A) = 3 - 3 = 0$ となるから，解は一意な解となる．以上より解は自明な解 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0}$ のみである．

□

例 3.44 (同次形方程式の解)　方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix} \tag{474}$$

を考える．行の個数と列の個数をみると $m = 2 < n = 3$ であるから，必ず $\mathrm{rank}\,(A) \geq 2$ となり，任意定数の個数は $n - \mathrm{rank}\,(A) \leq 3 - 2 = 1$ となる．必ず 1 個以上の任意定数を含むから，解は非自明な解となる．

□

§ 3.12 ちょっとまとめ

？ 3.45 （任意定数を含む解って何？） 方程式 $x_1 + x_2 = 0$ の解を考えよう．この方程式の解はどのように表現したらよいだろうか．まずは具体的にいくつか解を書き下してみよう．解は方程式に代入して成り立てばよいから，

$$x_1 = 1\,, \quad x_2 = -1\,, \tag{475}$$
$$x_1 = 2\,, \quad x_2 = -2\,, \tag{476}$$
$$x_1 = 3\,, \quad x_2 = -3\,, \tag{477}$$
$$x_1 = 4\,, \quad x_2 = -4\,, \tag{478}$$
$$\vdots \tag{479}$$

は解となるのがすぐ分かる．この解から予想できることとして x_1 は任意の値で良さそうである．これを c としよう．$x_1 = c$ とおけば $x_2 = -c$ である．よって解として

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c \\ -c \end{bmatrix} \qquad (\forall c \in \mathbb{R}) \tag{480}$$

を得る．確にこれが解となっているかは，方程式 $x_1 + x_2 = 0$ に代入すればよい．この解は任意定数を含む解である．変数の個数は 2 個であり，方程式の本数が 1 本であるので，任意定数の個数は $2 - 1 = 1$ 個となる．

次に方程式

$$\begin{cases} x_1 + x_2 = 0 \\ x_3 + x_4 = 0 \end{cases} \tag{481}$$

を考えよう．第一式は先ほどの方程式と同じである．であるから第一式を満たす解として $(x_1, x_2) = (c, -c)$ を得る．第二式も第一式と同じ形をしており，変数名が違うだけである．よって解は $(x_3, x_4) = (c, -c)$ である．しかし第一式と第二式とは独立しているので，任意定数も独立してとり得る．これを $x_1 = c_1$, $x_3 = c_2$ としよう．よって解として

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c_1 \\ -c_1 \\ c_2 \\ -c_2 \end{bmatrix} \qquad (\forall c_1, \forall c_2 \in \mathbb{R}) \tag{482}$$

を得る．変数が 4 個，方程式が 2 本，任意定数が $4 - 2 = 2$ 個である．

以上より，任意定数の個数は変数の個数から方程式の（本質的な）本数を引いたものである．

□

? 3.46 （簡約化って何？） 方程式

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & +x_3 & +x_4 & = 0 \\ & & x_3 & +x_4 & = 0 \end{cases} \tag{483}$$

を考えよう．第一式から第二式を引くと，

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & & & = 0 \\ & & x_3 & +x_4 & = 0 \end{cases} \tag{484}$$

を得る．第一式から変数が 2 個減っている．このとき係数行列は

$$\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \end{bmatrix} \quad \rightarrow \quad \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \end{bmatrix} \tag{485}$$

のように変形される．右の行列は簡約な行列となっている．

次に方程式

$$\begin{cases} 3x_1 & +4x_2 & = 2 \\ x_1 & +2x_2 & = 3 \end{cases} \tag{486}$$

を考えよう．方程式と係数行列の変化をみよう：

$$\begin{cases} 3x_1 & +4x_2 & = 2 \\ x_1 & +2x_2 & = 3 \end{cases} \qquad \left[\begin{array}{cc|c} 3 & 4 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{array}\right] \tag{487}$$

$$\rightarrow \begin{cases} 0 & -2x_2 & = -7 \\ x_1 & +2x_2 & = 3 \end{cases} \qquad \rightarrow \left[\begin{array}{cc|c} 0 & -2 & -7 \\ 1 & 2 & 3 \end{array}\right] \tag{488}$$

$$\rightarrow \begin{cases} x_1 & +2x_2 & = 3 \\ & -2x_2 & = -7 \end{cases} \qquad \rightarrow \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 2 & 3 \\ 0 & -2 & -7 \end{array}\right] \tag{489}$$

$$\rightarrow \begin{cases} x_1 & 0 & = -4 \\ & -2x_2 & = -7 \end{cases} \qquad \rightarrow \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & -4 \\ 0 & -2 & -7 \end{array}\right] \tag{490}$$

$$\rightarrow \begin{cases} x_1 & = -4 \\ & x_2 & = 7/2 \end{cases} \qquad \rightarrow \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & -4 \\ 0 & 1 & 7/2 \end{array}\right] \tag{491}$$

このように基本変形により変数が減って行く．この手順によりうまく変数を減らすことができる．ある行列が与えられたとき，その行列に対して簡約な行列は一意に定まる．つまり，与えられた方程式に対して常にうまい変数の減らし方が存在することを意味する． □

? 3.47 （ランクっ何？） 方程式

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & +x_3 & +x_4 & =0 \\ & & x_3 & +x_4 & =0 \\ 2x_1 & +2x_2 & +3x_3 & +3x_4 & =0 \end{cases} \tag{492}$$

を考えよう．変数が 4 個，方程式が 3 本であるから任意定数は $4-3=1$ 個であろう．しかし本当にそうであろうか．まずは方程式に基本変形をほどこしてみよう：

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & & & =0 \\ & & x_3 & +x_4 & =0 \\ 2x_1 & +2x_2 & +3x_3 & +3x_4 & =0 \end{cases} \tag{493}$$

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & & & =0 \\ & & x_3 & +x_4 & =0 \\ 0 & +0 & +0 & +0 & =0 \end{cases} \tag{494}$$

$$\begin{cases} x_1 & +x_2 & & & =0 \\ & & x_3 & +x_4 & =0 \end{cases} \tag{495}$$

このように方程式は本質的に 2 本である．よって変数が 2 個，方程式が 2 本，任意定数が $4-2=2$ 個となる．これを係数行列でみてみよう：

$$\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 2 & 2 & 3 & 3 \end{bmatrix} \to \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 2 & 2 & 3 & 3 \end{bmatrix} \to \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{496}$$

最後の簡約化された行列に着目する．行列のランクは 2 である．つまり，係数行列のランクは方程式の本質的な本数を示している． □

まとめ 3.48 （連立 **1** 次方程式についてのまとめ） 連立 1 次方程式

$$A\,\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}\,, \qquad A = [a_{ij}]_{m\times n}\,, \quad \boldsymbol{b} = [b_i]_{m\times 1}\,, \quad \boldsymbol{x} = [x_j]_{n\times 1} \tag{497}$$

について次の関係が成り立つ：
(I) 非同次形（$\boldsymbol{b} \neq \boldsymbol{0}$）のとき

$$\begin{aligned}
&\operatorname{rank}(A) \neq \operatorname{rank}([A|\boldsymbol{b}]) && \Leftrightarrow && \text{解なし}\\
&\operatorname{rank}(A) = \operatorname{rank}([A|\boldsymbol{b}]) = n && \Leftrightarrow && \text{一意な解をもつ}\\
&\operatorname{rank}(A) = \operatorname{rank}([A|\boldsymbol{b}]) < n && \Leftrightarrow && \text{任意定数を含む解をもつ}\\
& && && \text{任意定数の個数} = n - \operatorname{rank}(A)
\end{aligned}$$

(II) 同次形（$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{0}$）のとき

$$\begin{aligned}
\text{常に}\quad &\operatorname{rank}(A) = \operatorname{rank}([A|\boldsymbol{0}]) && \text{が成り立つので} && \text{解を常にもつ}\\
&\operatorname{rank}(A) = n && \Leftrightarrow && \text{自明な解（}\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0}\text{）をもつ}\\
m < n \Rightarrow\ &\operatorname{rank}(A) < n && \Leftrightarrow && \text{任意定数を含む解をもつ}\\
& && && \text{任意定数の個数} = n - \operatorname{rank}(A)
\end{aligned}$$

□

§ 3.13 演習問題 ~ 行列の簡約化，階数

問 3.49 （階数） 次の行列の階数を求めよ．ただし，a は実数とする．

(1) $\begin{bmatrix} 2 & -1 \\ -4 & 2 \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 1 & 4 & 3 \\ 2 & 8 & 6 \end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix} 1 & 3 \\ 0 & -2 \\ 5 & -1 \\ -2 & 3 \end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 3 & -7 \\ -6 & 1 \\ 5 & -8 \end{bmatrix}$ (5) $\begin{bmatrix} -1 & 3 & 0 \\ 2 & 1 & -3 \\ 4 & -5 & -3 \end{bmatrix}$

(6) $\begin{bmatrix} 0 & 2 & 3 \\ 0 & 4 & 6 \\ 0 & 6 & 9 \end{bmatrix}$ (7) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 1 & 3 \\ 3 & 2 & 1 \end{bmatrix}$ (8) $\begin{bmatrix} 1 & 3 & 4 \\ 8 & 1 & 9 \\ 4 & 2 & 6 \end{bmatrix}$ (9) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 3 \\ -1 & 1 & 4 \end{bmatrix}$ (10) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & -1 \\ 2 & -1 & 3 \\ 4 & 3 & 1 \end{bmatrix}$

(11) $\begin{bmatrix} 2 & -1 & 1 \\ 4 & -2 & 2 \\ -6 & 3 & -3 \end{bmatrix}$ (12) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 4 & 5 & 5 \\ 5 & 8 & 1 \\ -1 & -2 & 2 \end{bmatrix}$ (13) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & -3 \\ 2 & 1 & 0 \\ -2 & -1 & 3 \\ -1 & 4 & -2 \end{bmatrix}$ (14) $\begin{bmatrix} 0 & 1 & 1 & 3 \\ 1 & 2 & 3 & 2 \\ 2 & 3 & 5 & 1 \end{bmatrix}$

(15) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 1 & 2 & 4 & 5 \\ 2 & 4 & 5 & 7 \end{bmatrix}$ (16) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 5 & 9 \\ 1 & 1 & 2 & 5 \\ 3 & 2 & 3 & 11 \end{bmatrix}$ (17) $\begin{bmatrix} 2 & 2 & 4 & 0 \\ 4 & 5 & 11 & 1 \\ -7 & -9 & -20 & 2 \end{bmatrix}$ (18) $\begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 1 \\ -1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 0 & 1 \\ -1 & 0 & -1 & 0 \end{bmatrix}$

(19) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & -2 & 1 & 3 \\ 2 & -1 & 2 & 2 & 6 \\ 3 & 2 & -4 & -3 & -9 \end{bmatrix}$ (20) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & -1 & 1 & 1 \\ -3 & -1 & 1 & -1 & 0 \\ 11 & 5 & -5 & a & a+2 \end{bmatrix}$ (21) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 2 & -3 & 4 \\ 0 & 2 & 4 & -6 & 6 \\ 1 & 3 & 4 & -5 & 8 \\ 1 & 3 & 5 & -7 & 9 \end{bmatrix}$

(22) $\begin{bmatrix} 1 & 3 & 1 & -2 & -3 \\ 1 & 4 & 3 & -1 & -4 \\ 2 & 3 & -4 & -7 & -3 \\ 3 & 8 & 1 & -7 & -8 \end{bmatrix}$ (23) $\begin{bmatrix} 1 & 3 & -2 & 5 & 4 \\ 1 & 4 & 1 & 3 & 5 \\ 1 & 4 & 2 & 4 & 3 \\ 2 & 7 & -3 & 6 & 13 \end{bmatrix}$ (24) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & -3 & -2 & -3 \\ 1 & 3 & -2 & 0 & -4 \\ 3 & 8 & -7 & -2 & -11 \\ 2 & 1 & -9 & -10 & -3 \end{bmatrix}$

(25) $\begin{bmatrix} 1 & 3 & 1 & -3 & 2 \\ 1 & 3 & -3 & 3 & 2 \\ 1 & 1 & 2 & -1 & 3 \\ 2 & 4 & -2 & 1 & 3 \\ 1 & 2 & 2 & -3 & 2 \end{bmatrix}$ (26) $\begin{bmatrix} 1 & 4 & -2 & 4 & -5 & 4 & 1 \\ 2 & 6 & 1 & -4 & 1 & 7 & 2 \\ 1 & 0 & 8 & -11 & 7 & 5 & 6 \\ 0 & -2 & 5 & -3 & 1 & 2 & 5 \\ 3 & 10 & -1 & -9 & 6 & 8 & -2 \end{bmatrix}$ □

問 3.50 （連立 1 次方程式） 次の連立 1 次方程式の解を求めよ．また，係数行列と拡大係数行列の階数を求めよ．

(1) $3x + 2y = 0$ (2) $\begin{cases} 2x + 3y = 0 \\ 4x - y = 0 \end{cases}$ (3) $\begin{cases} 2x + 3y = 0 \\ 6x + 9y = 0 \end{cases}$ (4) $\begin{cases} y + 2z = 0 \\ x + 2y + z = 0 \end{cases}$

(5) $\begin{cases} 4x - 3y = 0 \\ 20x - 15y = 0 \end{cases}$ (6) $\begin{cases} x + y + z = 0 \\ 2x - 4y - z = 0 \end{cases}$ (7) $\begin{cases} x - 2y + 3z = 4 \\ x + y + 2z = 5 \end{cases}$

(8) $\begin{cases} x + 2y + 3z - 4w = 0 \\ 2x + 3y - z + 2w = 0 \end{cases}$ (9) $\begin{cases} x_1 + 3x_2 - x_3 = 1 \\ 2x_1 + 6x_2 - 2x_3 = 4 \end{cases}$ (10) $\begin{cases} x_1 + x_2 - x_3 = 3 \\ 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 1 \end{cases}$

(11) $\begin{cases} x + 2y + z + w = 0 \\ -2x + y + 3z - 7w = 0 \\ x - y - z - w = 0 \end{cases}$ (12) $\begin{cases} x + y + z + w = 0 \\ x + 3y + 2z + 4w = 0 \\ 2x + z - w = 0 \end{cases}$ (13) $\begin{cases} x + 2y + z = 0 \\ 2x + 3y + 3z = 0 \\ -x + y + 4z = 0 \end{cases}$

(14) $\begin{cases} x+3y+z=2 \\ 2x+7y-z=-3 \\ -x+2y+3z=1 \end{cases}$ (15) $\begin{cases} x+2y-4z=1 \\ x-4y+3z+w=1 \\ 3x-5z+w=2 \end{cases}$ (16) $\begin{cases} 3x-2y+z=7 \\ x+2y-2z=2 \\ 4x+3y-2z=7 \end{cases}$

(17) $\begin{cases} x+2y=1 \\ 2x+3y=1 \\ 3x+y=1 \end{cases}$ (18) $\begin{cases} x+2y-z=0 \\ 2x-y+3z=0 \\ 4x+3y+z=0 \end{cases}$ (19) $\begin{cases} 2x-y+z=0 \\ 4x-2y+2z=0 \\ -6x+3y-3z=0 \end{cases}$

(20) $\begin{cases} x+2y-z=2 \\ 2x-y+3z=9 \\ 4x+3y+z=13 \end{cases}$ (21) $\begin{cases} 2x-y+z=0 \\ 4x-2y+z=0 \\ -2x+y+3z=0 \end{cases}$ (22) $\begin{cases} 2x-y+z=-1 \\ 4x-2y+2z=7 \\ -6x+3y-3z=3 \end{cases}$

(23) $\begin{cases} x_1+3x_2+2x_3=0 \\ 2x_1+8x_2+5x_3+x_4=0 \\ -x_1-x_2-x_3+x_4=0 \end{cases}$ (24) $\begin{cases} x_1+2x_2-x_3=0 \\ x_1+x_2+3x_4=0 \\ 3x_1+5x_2-2x_3+3x_4=0 \\ x_1+3x_2-2x_3-3x_4=0 \end{cases}$

(25) $\begin{cases} 2x_1-4x_2-2x_3-2x_4+4x_5=0 \\ -x_1+2x_2+x_3+x_4=0 \\ x_1-2x_2-2x_3-4x_4+3x_5=0 \\ 3x_1-6x_2-x_3+3x_4+7x_5=0 \end{cases}$ (26) $\begin{cases} x+y+z+w=0 \\ 3x+3y+3z+2w=0 \\ x+2y+3z+4w=0 \\ 3x+2y+z=0 \\ 2x+3y+4z+4w=0 \end{cases}$

(27) $\begin{cases} 2x+y+z=0 \\ 4x+2y+3z=0 \\ 2x+2z=0 \end{cases}$ (28) $\begin{cases} -x+2y-3z=0 \\ 2x-4y+z=0 \\ 3x-3y+6z=0 \end{cases}$ (29) $\begin{cases} -y+2z=0 \\ -2x-y-2z=0 \\ 3x+2y+4z=0 \end{cases}$

(30) $\begin{cases} x+2y-z=0 \\ 2x+4y-6z=0 \\ 3x+5y-7z=0 \end{cases}$ (31) $\begin{cases} -2x+3y-z=0 \\ 6x-9y+3z=0 \\ -4x+6y-2z=0 \end{cases}$ (32) $\begin{cases} 2x+y+z=0 \\ 4x+2y+3z=0 \\ 2x+y+2z=0 \end{cases}$

(33) $\begin{cases} 3x-y-2z=0 \\ -2x+3y-z=0 \\ -x-2y+3z=0 \end{cases}$ (34) $\begin{cases} -x-2y+z=0 \\ 3x-y-2z=0 \\ x-5y=0 \end{cases}$ (35) $\begin{cases} x_1+x_2+x_3+2x_4=0 \\ x_1+2x_2-x_3+3x_4=0 \\ 3x_1+4x_2+x_3+7x_4=0 \end{cases}$

(36) $\begin{cases} 2x_1+x_2-2x_3=0 \\ x_1+x_2-3x_3+x_4=0 \\ 3x_1+x_2-6x_3+x_4=0 \end{cases}$ (37) $\begin{cases} x_1+x_2+3x_3=0 \\ x_1+2x_2+4x_3=0 \\ x_1-x_2+x_3=0 \\ x_1+4x_2+6x_3=0 \end{cases}$ (38) $\begin{cases} 2x_1+3x_2-x_3=0 \\ x_1-x_2+2x_3=0 \\ x_1+3x_2+2x_3=0 \\ 2x_1+4x_2-x_3=0 \end{cases}$

(39) $\begin{cases} x_1+2x_2-x_3+x_4=0 \\ 2x_1+4x_2-x_3+4x_4=0 \\ -2x_1-4x_2+3x_3=0 \\ 3x_1+6x_2-x_3+7x_4=0 \end{cases}$ (40) $\begin{cases} x_1-2x_2-x_3+x_4=0 \\ -2x_1+4x_2+3x_3=0 \\ 3x_1-6x_2+2x_3+13x_4=0 \\ 2x_1-4x_2+x_3+9x_4=0 \end{cases}$

(41) $\begin{cases} x_1+2x_2-x_3=0 \\ 2x_1+2x_3+x_4=0 \\ x_1-2x_2+3x_3+x_4=0 \\ 3x_1-2x_2+5x_3+2x_4=0 \end{cases}$ (42) $\begin{cases} x_1-2x_2+2x_3+7x_4+x_5=0 \\ -3x_1+6x_2-2x_3-13x_4-x_5=0 \\ 5x_1-10x_2-x_3+13x_4+x_5=0 \\ 2x_1-4x_2+x_3+8x_4+x_5=0 \end{cases}$

(43) $\begin{cases} 2x-y+z=2 \\ 4x-2y+z=3 \\ -2x+y+3z=2 \end{cases}$ (44) $\begin{cases} 2x_1-4x_2-2x_3-2x_4+4x_5=-6 \\ -x_1+2x_2+x_3+x_4=1 \\ x_1-2x_2-2x_3-4x_4+3x_5=-7 \\ 3x_1-6x_2-x_3+3x_4+7x_5=-4 \end{cases}$

(45) $\begin{cases} 2x-y+z=2 \\ 4x-2y+z=3 \\ -2x+y+3z=1 \end{cases}$ (46) $\begin{cases} 2x_1-4x_2-2x_3-2x_4+4x_5=-6 \\ -x_1+2x_2+x_3+x_4=-1 \\ x_1-2x_2-2x_3-4x_4+3x_5=-7 \\ 3x_1-6x_2-x_3+3x_4+7x_5=-4 \end{cases}$

(47) $\begin{cases} -2x+3y-z=-1 \\ 6x-9y+3z=3 \\ -4x+6y-2z=-2 \end{cases}$ (48) $\begin{cases} 2x+y+z=2 \\ 4x+2y+3z=5 \\ 2x+y+2z=3 \end{cases}$ (49) $\begin{cases} 3x-y-2z=-5 \\ -2x+3y-z=1 \\ -x-2y+3z=3 \end{cases}$

(50) $\begin{cases} -x-2y+z=-2 \\ 3x-y-2z=0 \\ x-5y=-4 \end{cases}$ (51) $\begin{cases} x_1+x_2+x_3+2x_4=-1 \\ x_1+2x_2-x_3+3x_4=2 \\ 3x_1+4x_2+x_3+7x_4=1 \end{cases}$ (52) $\begin{cases} x_1+x_2+3x_3=5 \\ x_1+2x_2+4x_3=7 \\ x_1-x_2+x_3=1 \\ x_1+4x_2+6x_3=11 \end{cases}$

(53) $\begin{cases} 2x_1+x_2-2x_3=3 \\ x_1+x_2-3x_3+x_4=2 \\ 3x_1+x_2-6x_3+x_4=4 \end{cases}$ (54) $\begin{cases} 2x_1+3x_2-x_3=-3 \\ x_1-x_2+2x_3=6 \\ x_1+3x_2+2x_3=2 \\ 2x_1+4x_2-x_3=-1 \end{cases}$

(55) $\begin{cases} x_1+2x_2-x_3+x_4=-3 \\ 2x_1+4x_2-x_3+4x_4=-1 \\ -2x_1-4x_2+3x_3=11 \\ 3x_1+6x_2-x_3+7x_4=1 \end{cases}$ (56) $\begin{cases} x_1-2x_2-x_3+x_4=-3 \\ -2x_1+4x_2+3x_3=8 \\ 3x_1-6x_2+2x_3+13x_4=-10 \\ 2x_1-4x_2+x_3+9x_4=-7 \end{cases}$

(57) $\begin{cases} x_1+2x_2-x_3=-1 \\ 2x_1+2x_3+x_4=2 \\ x_1-2x_2+3x_3+x_4=3 \\ 3x_1-2x_2+5x_3+2x_4=5 \end{cases}$ (58) $\begin{cases} x_1-2x_2+2x_3+7x_4+x_5=-2 \\ -3x_1+6x_2-2x_3-13x_4-x_5=-2 \\ 5x_1-10x_2-x_3+13x_4+x_5=15 \\ 2x_1-4x_2+x_3+8x_4+x_5=3 \end{cases}$ □

§ 3.14 基本変形の行列表現

定理 3.51 （行列の積による行列の行の基本変形） 行列 $A = [a_{ij}]_{m\times n}$ が与えられたとき，次に定義される行列 $P^{(\nu)}$ $(\nu = 1, 2, 3)$ を左から掛けて，積 $P^{(\nu)}A$ を考える．このとき積 $P^{(\nu)}A$ は行列の行の第 ν 基本変形を A にほどこした行列と等しい．

(1) 第 k 行を α 倍する．

$$P_k^{(1)}(\alpha) = \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c|c|c} \begin{matrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{matrix} & & \\ \hline & \alpha & \\ \hline & & \begin{matrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{matrix} \end{array}\right] \begin{matrix} \\ \\ k \\ \\ \\ \end{matrix} \\ \begin{matrix} \\ \\ k \\ \\ \\ \end{matrix} \end{array} \tag{498}$$

(2) 第 k 行と第 l 行を入れ替える．

$$P_{k,l}^{(2)} = \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c|c|c|c|c} \begin{matrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{matrix} & & & & \\ \hline & 0 & & 1 & \\ \hline & & \begin{matrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{matrix} & & \\ \hline & 1 & & 0 & \\ \hline & & & & \begin{matrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{matrix} \end{array}\right] \\ \begin{matrix} \\ k \\ \\ l \\ \\ \end{matrix} \end{array} \tag{499}$$

(3) 第 l 行を α 倍して第 k 行に加える．

$$P^{(3)}_{k,l}(\alpha) = \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c|c|c|c|c} 1 & & & & \\ & \ddots & & & \\ & & 1 & & \\ \hline & 1 & & \alpha & \\ \hline & & 1 & & \\ & & & \ddots & \\ & & & & 1 \\ \hline & & & 1 & \\ \hline & & & & 1 \\ & & & & & \ddots \\ & & & & & & 1 \end{array}\right] \\ \begin{array}{ccccc} & & k & & l \end{array} \end{array} \qquad (k < l) \tag{500}$$

$$P^{(3)}_{k,l}(\alpha) = \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c|c|c|c|c} 1 & & & & \\ & \ddots & & & \\ & & 1 & & \\ \hline & 1 & & & \\ \hline & & 1 & & \\ & & & \ddots & \\ & & & & 1 \\ \hline & \alpha & & 1 & \\ \hline & & & & 1 \\ & & & & & \ddots \\ & & & & & & 1 \end{array}\right] \\ \begin{array}{ccccc} & & l & & k \end{array} \end{array} \qquad (l < k) \tag{501}$$

□

問 3.52 これを示せ．

□

例 3.53 （行列の行の基本変形の具体例） 行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} \tag{502}$$

を考える．このとき A にいろいろな基本変形を行なうと次のようになる．

$$P_1^{(1)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha & 2\alpha & 3\alpha \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 1 \text{ 行を } \alpha \text{ 倍} \tag{503}$$

$$P_2^{(1)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & \alpha & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4\alpha & 5\alpha & 6\alpha \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 2 \text{ 行を } \alpha \text{ 倍} \tag{504}$$

$$P_3^{(1)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & \alpha \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7\alpha & 8\alpha & 9\alpha \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 3 \text{ 行を } \alpha \text{ 倍} \tag{505}$$

$$P_{1,2}^{(2)}A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 4 & 5 & 6 \\ 1 & 2 & 3 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 1 \text{ 行と第 } 2 \text{ 行を入れ換え} \tag{506}$$

$$P_{1,3}^{(2)}A = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 7 & 8 & 9 \\ 4 & 5 & 6 \\ 1 & 2 & 3 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 1 \text{ 行と第 } 3 \text{ 行を入れ換え} \tag{507}$$

$$P_{2,3}^{(2)}A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 7 & 8 & 9 \\ 4 & 5 & 6 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \text{第 } 2 \text{ 行と第 } 3 \text{ 行を入れ換え} \tag{508}$$

$$P_{1,2}^{(3)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} 1 & \alpha & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1+4\alpha & 2+5\alpha & 3+6\alpha \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix}. \tag{509}$$

$\leftarrow$ 第 2 行を α 倍し第 1 に加える

$$P_{3,2}^{(3)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & \alpha & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7+4\alpha & 8+5\alpha & 9+6\alpha \end{bmatrix}. \tag{510}$$

$\leftarrow$ 第 2 行を α 倍し第 3 に加える

$$P_{2,1}^{(3)}(\alpha)A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ \alpha & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4+\alpha & 5+2\alpha & 6+3\alpha \\ 7 & 8 & 9 \end{bmatrix}. \tag{511}$$

$\leftarrow$ 第 1 行を α 倍し第 2 に加える

□

例 3.54 （簡約化の行列表現） 行列 A を簡約化し B とする．このとき

$$A \overset{\text{簡約化}}{\longrightarrow} B = PA \tag{512}$$

を満たす行列 P を求める．簡約化を次のように行う：

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ -1 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \tag{513}$$

（第一行目を第二行目に加える．）

$$\xrightarrow{P_1} A_1 = P_1 A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ -1 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 2 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \tag{514}$$

（第三行目を -2 倍し第二行目に加える．）

$$\xrightarrow{P_2} A_2 = P_2 A_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 2 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \tag{515}$$

（第二行目と第三行目を入れ替える．）

$$\xrightarrow{P_3} A_3 = P_3 A_2 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \tag{516}$$

（第三行目を -1 倍し第一目に加える．）

$$\xrightarrow{P_4} A_4 = P_4 A_3 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \tag{517}$$

（第三行目を $1/2$ 倍する．）

$$\xrightarrow{P_5} A_5 = P_5 A_4 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1/2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} = E = B\,. \tag{518}$$

簡約化された行列 B はここでは単位行列 E となる．この結果を書き直すと

$$B = E = A_5 = P_5 A_4 = P_5 P_4 A_3 = P_5 P_4 P_3 A_2 = P_5 P_4 P_3 P_2 A_1 = P_5 P_4 P_3 P_2 P_1 A \tag{519}$$

$$= (P_5 P_4 P_3 P_2 P_1) A = PA \tag{520}$$

と書ける．ここで

$$P = P_5 P_4 P_3 P_2 P_1 \tag{521}$$

とおいた．よって $B = PA$ を満たす P が得られる．行列 P を具体的に求める．P は P_1 から

P_5 の積で

$$P = P_5P_4P_3P_2P_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1/2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{522}$$

と表されるので，これを計算すれば良い．しかしながらこれは面倒である．積の順番を

$$P = P_5P_4P_3P_2P_1 = P_5P_4P_3P_2P_1E = P_5(P_4(P_3(P_2(P_1E)))) \tag{523}$$

として計算する．これはすなわち，単位行列 E に対して A に行った基本変形と同じ操作を同じ順番で行うことを意味する．よって

$$E = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{524}$$

(第一行目を第二行目に加える .)

$$\xrightarrow{P_1} P_1E = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{525}$$

(第三行目を -2 倍し第二行目に加える .)

$$\xrightarrow{P_2} P_2P_1E = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{526}$$

(第二行目と第三行目を入れ替える .)

$$\xrightarrow{P_3} P_3P_2P_1E = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{bmatrix} \tag{527}$$

(第三行目を -1 倍し第一目に加える .)

$$\xrightarrow{P_4} P_4P_3P_2P_1E = \begin{bmatrix} 0 & -1 & 2 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{bmatrix} \tag{528}$$

(第三行目を $1/2$ 倍する .)

$$\xrightarrow{P_5} P_5P_4P_3P_2P_1E = \begin{bmatrix} 0 & -1 & 2 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1/2 & 1/2 & -1 \end{bmatrix} = P \tag{529}$$

を得る．以上より $B = E = PA$ を満たす

$$P = \begin{bmatrix} 0 & -1 & 2 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1/2 & 1/2 & -1 \end{bmatrix} \tag{530}$$

を求めた．

□

注意 3.55 （変換の行列表現） 行列 A から行列 B への変換を f とする．すなわち

$$B = f(A) \tag{531}$$

とする．関数 f は入力が行列で出力も行列である．いま簡約化を表す関数 f を考える．このとき

$$B = f(A) = PA \tag{532}$$

と表される．関数 f は入力行列 A に対して左から P を掛ける操作を意味する．簡約化という操作は行列 P と対応する．行列の変換においては入力，出力，操作ともに全て行列で表される．

□

§ 3.15 演習問題 ~ 基本変形の行列表現

問 3.56 （行の基本変形） 次の関係式をみたす行列 P を求めよ．

(1) $\begin{bmatrix} 2 & 3 & -1 \\ 2 & 0 & -8 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 2 & 3 & -1 \\ -1 & 0 & 4 \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 3 & 0 & -1 \\ -6 & 3 & -9 \\ -4 & 5 & 0 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 3 & 0 & -1 \\ 2 & -1 & 3 \\ -4 & 5 & 0 \end{bmatrix}$

(3) $\begin{bmatrix} 0 & 3 \\ -2 & 3 \\ 2 & 1 \\ 4 & -1 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 0 & 3 \\ 4 & -1 \\ 2 & 1 \\ -2 & 3 \end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix} 6 & 1 & 0 \\ 2 & -1 & 2 \\ -3 & 0 & 4 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 6 & 1 & 0 \\ -3 & 0 & 4 \\ 2 & -1 & 2 \end{bmatrix}$

(5) $\begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \\ 0 & 4 & -1 \\ 1 & -4 & 0 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 1 & 3 & 2 \\ 0 & 4 & -1 \\ 3 & 2 & 4 \end{bmatrix}$ (6) $\begin{bmatrix} 1 & -4 & 5 \\ 2 & 3 & -1 \\ 1 & -3 & 3 \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} 0 & -1 & 2 \\ 2 & 3 & -1 \\ 1 & -3 & 3 \end{bmatrix}$ □

問 3.57 （列の基本変形） 次の関係式をみたす行列 P を求めよ．

(1) $\begin{bmatrix} 2 & 2 & 0 \\ 3 & 0 & 1 \\ -4 & -4 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 & -1 & 0 \\ 3 & 0 & 1 \\ -4 & 2 & 1 \end{bmatrix} P$ (2) $\begin{bmatrix} 2 & 3 & -1 & 0 \\ -1 & 0 & -2 & 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 & 0 & -1 & 3 \\ -1 & 4 & -2 & 0 \end{bmatrix} P$

(3) $\begin{bmatrix} 0 & 3 & -1 \\ -3 & 4 & 2 \\ 6 & 1 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & -1 & 3 \\ -3 & 2 & 4 \\ 6 & 0 & 1 \end{bmatrix} P$ (4) $\begin{bmatrix} 1 & -2 & 2 \\ 2 & 3 & 5 \\ -4 & -1 & -5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & -2 & 0 \\ 2 & 3 & 1 \\ -4 & -1 & 3 \end{bmatrix} P$

□

問 3.58 （簡約化の行列表現） 行列 A を簡約化し B とする．このとき $B = PA$ をみたす行列 P を求めよ．

(1) $A = \begin{bmatrix} 1 & 4 & 3 \\ 2 & 8 & 6 \end{bmatrix}$ (2) $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \end{bmatrix}$ (3) $A = \begin{bmatrix} 2 & -2 & 0 & 3 \\ 1 & -1 & 1 & 2 \end{bmatrix}$ (4) $A = \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 3 & -7 \\ -6 & 1 \\ 5 & -8 \end{bmatrix}$

(5) $A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ -1 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$ (6) $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 3 \\ -1 & 1 & 4 \end{bmatrix}$ (7) $A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 & 1 \\ 2 & 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 & 0 \end{bmatrix}$ (8) $A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & 2 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 3 \end{bmatrix}$

□

§ 3.16 逆行列

定義 3.59 (逆行列)　行列 A に対して

$$AB = BA = E \tag{533}$$

を満たす行列 B が存在するとき , 行列 B を行列 A の逆行列 (**inverse matrix**) と呼ぶ . A の逆行列は A^{-1} と表記する .

□

問 3.60 (逆行列の性質)　逆行列をもつのは正方行列のみである . これを示せ .

(証明) $AB = BA$ を満たす行列は可換な行列である . 可換な行列は正方行列のみである .

□

定理 3.61 (逆行列の一意性)　行列 A が逆行列をもつとき , 逆行列は一意に定まる .

(証明) B と C が A の逆行列であると仮定する . このとき $AB = BA = E$, $AC = CA = E$ が成り立つ . これを用いて

$$B = BE = B(AC) = (BA)C = EC = C \tag{534}$$

となる . よって $B = C$ であり B と C とは一致する .

□

定義 3.62 (行列の正則性)　正方行列 A が逆行列をもつとき , A は正則 (**regular**) であるという . 正則な行列を正則行列 (**regular matrix**) と呼ぶ .

□

定理 3.63 (逆行列をもつ十分条件)　正方行列 A, B が $AB = E$ または $BA = E$ のどちらか一方だけを満たすときでも B は A の逆行列となる .

(証明) 証明はずっとあとに行なう .

□

定理 3.64 （逆行列の計算法） 行列 $[A|E]$ を簡約化して $[E|B]$ の形に変形できたとする．このとき B は A の逆行列 A^{-1} となる．

（証明）行列 A に基本変形 $P^{(*)}$ を繰り返し行ない単位行列 E に変換されたとする．このとき

$$A \overset{\text{簡約化}}{\longrightarrow} E\,, \quad E = (P^{(*)}P^{(*)}\cdots P^{(*)})A \tag{535}$$

と書ける．A の左にかかっている行列をまとめて B と書くと，

$$B = P^{(*)}P^{(*)}\cdots P^{(*)} \tag{536}$$

となる．B を用いれば $BA = E$ が成り立つ．前述の定理より $BA = E$ のとき B は A の逆行列 $B = A^{-1}$ となる．よって行列 B を求めればよい．B は

$$B = P^{(*)}P^{(*)}\cdots P^{(*)}E \tag{537}$$

と書ける．これはすなわち A に行なった基本変形と同じ操作を E に対して同じ順で行なうことを意味する．これらの操作を同時に行なうには，行列 $[A|E]$ に対して簡約化を行い $[E|B]$ の形にすればよい．この一連の操作により $BA = E$ を得る． □

例 3.65 (逆行列の計算例)　行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix} \tag{538}$$

を考える . この行列の逆行列を求める . 行列 $[A \,|\, E]$ に基本変形を次のように繰り返し行なう :

$$[A \,|\, E] = \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 2 & 3 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 2 & 0 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 一行目を } -1 \text{ 倍して三行目に加える .}) \tag{539}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 2 & 3 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 一行目を } -2 \text{ 倍して二行目に加える .}) \tag{540}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & -1 & -2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 二行目を } 2 \text{ 倍して一行目に加える .}) \tag{541}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & -1 & -3 & 2 & 0 \\ 0 & -1 & -1 & -2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 三行目を一行目に加える .}) \tag{542}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & 0 & -4 & 2 & 1 \\ 0 & -1 & -1 & -2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 三行目を二行目に加える .}) \tag{543}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & 0 & -4 & 2 & 1 \\ 0 & -1 & 0 & -3 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad (\text{ 二行目を } -1 \text{ 倍する .}) \tag{544}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & 0 & -4 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 3 & -1 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 1 \end{array}\right] = [E \,|\, A^{-1}] \,. \tag{545}$$

よって , A の逆行列

$$A^{-1} = \begin{bmatrix} -4 & 2 & 1 \\ 3 & -1 & -1 \\ -1 & 0 & 1 \end{bmatrix} \tag{546}$$

を得る .

□

定理 3.66 （行列の正則性と緒性質） 正方行列 A に対して次の (1)-(5) は同値である：

(1) $\mathrm{rank}\,(A) = n$.

(2) A の簡約化は E である．

(3) 任意の $\boldsymbol{b}$ に対して $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ は一意な解をもつ．

(4) $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0}$ は自明な解 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0}$ のみをもつ．

(5) A は正則である．

（証明）(1) $\Rightarrow$ (2) $\Leftrightarrow$ (3) $\Rightarrow$ (4) $\Rightarrow$ (1)，(3) $\Leftrightarrow$ (5) を示す．
(1) $\Rightarrow$ (2) を示す．A は $n \times n$ 型でフルランクであるから，簡約化は明らかに E となる．
(2) $\Rightarrow$ (3) を示す．簡約化により $[A\,|\,\boldsymbol{b}] \to [E\,|\,\tilde{\boldsymbol{b}}]$ となるので，方程式は $E\boldsymbol{x} = \tilde{\boldsymbol{b}}$ となる．よって解として一意な解 $\boldsymbol{x} = \tilde{\boldsymbol{b}}$ をもつ．
(3) $\Rightarrow$ (4) を示す．$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{0}$ のとき $\tilde{\boldsymbol{b}} = \boldsymbol{0}$ であるから，解として $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0}$ のみをもつ．
(4) $\Rightarrow$ (1) を示す．定理 3.41 より，同次形方程式が自明な解のみをもつ必用十分条件は $\mathrm{rank}\,A = n$ である．
(3) $\Rightarrow$ (5) を示す．$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{e}_1, \boldsymbol{e}_2, \cdots, \boldsymbol{e}_n$ のときの解をそれぞれ $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{c}_1, \boldsymbol{c}_2, \cdots, \boldsymbol{c}_n$ とする．このとき

$$A\boldsymbol{c}_1 = \boldsymbol{e}_1, \quad A\boldsymbol{c}_2 = \boldsymbol{e}_2, \quad \cdots A\boldsymbol{c}_n = \boldsymbol{e}_n \tag{547}$$

$$\Rightarrow \quad A\begin{bmatrix}\boldsymbol{c}_1 & \boldsymbol{c}_2 & \cdots & \boldsymbol{c}_n\end{bmatrix} = \begin{bmatrix}\boldsymbol{e}_1 & \boldsymbol{e}_2 & \cdots & \boldsymbol{e}_n\end{bmatrix} \tag{548}$$

$$\Rightarrow \quad AC = E \tag{549}$$

となる．C は A の逆行列である．よって A は正則である．
(5) $\Rightarrow$ (3) を示す．

$$A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b} \quad \Rightarrow \quad A^{-1}A\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b} \quad \Rightarrow \quad E\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b} \quad \Rightarrow \quad \boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}. \tag{550}$$

□

定理 3.67 （逆行列による解法） 正方行列 A が正則なとき方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ は解 $\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}$ をもつ．

□

例 3.68 （逆行列をもたない具体例） 行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 4 \\ 3 & 4 & 5 \end{bmatrix} \tag{551}$$

の逆行列を考える．例題 3.65 と同じように計算を行なう：

$$[A \,|\, E] = \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 3 & 1 & 0 & 0 \\ 2 & 3 & 4 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 4 & 5 & 0 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad \text{（一行目を } -3 \text{ 倍して三行目に加える .）} \tag{552}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 3 & 1 & 0 & 0 \\ 2 & 3 & 4 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -2 & -4 & -3 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad \text{（一行目を } -2 \text{ 倍して二行目に加える .）} \tag{553}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 3 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & -2 & -2 & 1 & 0 \\ 0 & -2 & -4 & -3 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad \text{（二行目を } -1 \text{ 倍する .）} \tag{554}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 2 & 3 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 2 & -1 & 0 \\ 0 & -2 & -4 & -3 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad \text{（二行目を } -2 \text{ 倍して一行目に加える .）} \tag{555}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & -1 & -3 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 2 & -1 & 0 \\ 0 & -2 & -4 & -3 & 0 & 1 \end{array}\right] \quad \text{（二行目を } 2 \text{ 倍して三行目に加える .）} \tag{556}$$

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & -1 & -3 & 2 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 2 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -2 & 1 \end{array}\right] . \tag{557}$$

これより行列 A の簡約化は

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 4 \\ 3 & 4 & 5 \end{bmatrix} \to \begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \tag{558}$$

となる．よって $\operatorname{rank}(A) = 2 < 3$ となる．定理 3.66 の $(1) \Leftrightarrow (5)$ より A は正則ではない．よって A は逆行列をもたない．

□

例 3.69 （逆行列を用いた解法の具体例） 方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix} \tag{559}$$

を考える．$A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ とすると $\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}$ より解が求まる．よって

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix}^{-1} \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -4 & 2 & 1 \\ 3 & -1 & -1 \\ -1 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 \\ -2 \\ 2 \end{bmatrix} \tag{560}$$

を得る．

□

定理 3.70 （逆行列の性質） 正方行列 A, B が正則のとき次の関係式が成り立つ：

(1) $(A^{-1})^{-1} = A$.

(2) $(A^T)^{-1} = (A^{-1})^T$.

(3) $(AB)^{-1} = B^{-1}A^{-1}$.

□

問 3.71 これを示せ．

（証明）(3) を示す．

$$(AB)(B^{-1}A^{-1}) = ABB^{-1}A^{-1} = A(BB^{-1})A^{-1} = AEA^{-1} = AA^{-1} = E\,. \tag{561}$$

$$\Rightarrow \quad (AB)(B^{-1}A^{-1}) = E\,. \tag{562}$$

$$\Rightarrow \quad AB \text{ の逆行列は } B^{-1}A^{-1} \text{ .} \tag{563}$$

$$\Rightarrow \quad (AB)^{-1} = B^{-1}A^{-1}\,. \tag{564}$$

□

§ 3.17 演習問題 ~ 逆行列，行列の正則性

問 3.72 （逆行列） 次の行列の逆行列を求めよ．ただし $a \neq 0$ とする．

(1) $\begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 2 & 3 \\ 4 & 6 \end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix} 0 & 2 \\ 3 & 0 \end{bmatrix}$ (4) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 2 & 1 & 2 \\ 3 & 2 & 4 \end{bmatrix}$ (5) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 0 & 4 & 3 \\ 4 & 3 & 0 \end{bmatrix}$ (6) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 3 \\ 2 & 4 & 1 \\ 1 & 3 & 0 \end{bmatrix}$

(7) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix}$ (8) $\begin{bmatrix} 2 & -1 & 0 \\ 2 & -1 & -1 \\ 1 & 0 & -1 \end{bmatrix}$ (9) $\begin{bmatrix} -3 & -6 & 2 \\ 3 & 5 & -2 \\ 1 & 3 & -1 \end{bmatrix}$ (10) $\begin{bmatrix} 1 & -1 & -3 \\ 1 & 1 & -1 \\ -1 & 1 & 5 \end{bmatrix}$ (11) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \\ 1 & -1 & 1 \end{bmatrix}$

(12) $\begin{bmatrix} 1 & 5 & 3 \\ 11 & 2 & 9 \\ 2 & -1 & 1 \end{bmatrix}$ (13) $\begin{bmatrix} a & 1 & 1 \\ 0 & a & 1 \\ 0 & 0 & a \end{bmatrix}$ (14) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & -a+1 \\ 2 & 3 & 2a \\ 1 & 1 & 1 \end{bmatrix}$ (15) $\begin{bmatrix} 2 & 1 & 4-a \\ 1 & 1 & 3 \\ a & 1 & 2+a \end{bmatrix}$

(16) $\begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 \\ 1 & -1 & 2 \\ -1 & 0 & -1 \end{bmatrix}$ (17) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 & 2 \\ 2 & 1 & 1 & 0 \\ -1 & -1 & -1 & 1 \\ 1 & 2 & 2 & -2 \end{bmatrix}$ (18) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ (19) $\begin{bmatrix} 2 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & -2 \\ 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & 3 \end{bmatrix}$

(20) $\begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 & 1 \\ -1 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & -2 & 1 & 0 \end{bmatrix}$ (21) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 3 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 & -5 \\ 0 & 0 & 1 & -2 & 6 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & -4 \\ 0 & 0 & 0 & -1 & 3 \end{bmatrix}$ □

問 3.73 （逆行列） 行列 $A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 1 \\ -1 & 0 & 1 \\ -1 & -1 & 0 \end{bmatrix}$ に対して，行列 $(E-A)(E+A)^{-1}$ を求めよ．

□

問 3.74 （行列の可換性） A, B が可換ならば，次の行列の組も可換であることを示せ．

(1) A^{-1}, B (2) A^{-1}, B^{-1} (3) A^T, B^T □

問 3.75 （行列の正則性） $AB = O$ となる $B(\neq O)$ が存在するならば， A は正則でないことを示せ． □

問 3.76 （行列の正則性） 次を示せ．

(1) A が正則ならば，A^{-1} も正則で $(A^{-1})^{-1} = A$ ．

(2) A が正則ならば，A^T も正則で $(A^T)^{-1} = (A^{-1})^T$ ．

(3) A, B が正則ならば，AB も正則で $(AB^{-1}) = B^{-1}A^{-1}$ ． □

問 3.77 （正則行列） A が巾零行列ならば $E+A$, $E-A$ は共に正則行列であることを示せ．また，その逆行列を求めよ． □

問 3.78 **(正則行列)　次の等式をみたす行列 A, B を求めよ．**

(1) $\begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 3 \end{bmatrix} A = \begin{bmatrix} 0 & 8 \\ 1 & 2 \end{bmatrix}$　(2) $B \begin{bmatrix} -1 & -2 \\ 4 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ -1 & 2 \end{bmatrix}$ □

問 3.79 **(対角化)　行列 A, P が次のとき $P^{-1}AP$ と $A^n\,(n = 1, 2, \cdots)$ を求めよ．**

(1) $A = \begin{bmatrix} 3 & 4 \\ -1 & -2 \end{bmatrix}$　$P = \begin{bmatrix} 4 & 1 \\ -1 & -1 \end{bmatrix}$　(2) $A = \begin{bmatrix} 4 & -3 \\ 2 & -1 \end{bmatrix}$　$P = \begin{bmatrix} 1 & 3 \\ 1 & 2 \end{bmatrix}$ □

4 行列式

§ 4.1 行列式の導出

連立 1 次方程式

$$\left\{ \begin{array}{rcrcl} a_{11}\,x_1 & + & a_{12}\,x_2 & = & b_1 \\ a_{21}\,x_1 & + & a_{22}\,x_2 & = & b_2 \end{array} \right. \tag{565}$$

を考える．このときこの方程式が一意な解ともつ条件を求める．方程式を書き直すと

$$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \end{bmatrix} \tag{566}$$

となる．拡大係数行列は

$$[A\,|\,\boldsymbol{b}] = \left[\begin{array}{cc|c} a_{11} & a_{12} & b_1 \\ a_{21} & a_{22} & b_2 \end{array} \right] \tag{567}$$

である．簡約化を行う：

$$\left[\begin{array}{cc|c} a_{11} & a_{12} & b_1 \\ a_{21} & a_{22} & b_2 \end{array} \right] \tag{568}$$

(第一行に $-a_{21}/a_{11}$ を掛けて第二行に加える .) (569)

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{cc|c} a_{11} & a_{12} & b_1 \\ 0 & \dfrac{a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21}}{a_{11}} & \dfrac{a_{11}b_2-b_1a_{21}}{a_{11}} \end{array} \right] \tag{570}$$

(第二行に a_{11} を掛ける .) (571)

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{cc|c} a_{11} & a_{12} & b_1 \\ 0 & a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21} & a_{11}b_2-b_1a_{21} \end{array} \right] \tag{572}$$

(第二行に $-a_{12}/(a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21})$ を掛けて第一行に加える .) (573)

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{cc|c} a_{11} & 0 & \dfrac{a_{11}(b_1a_{22}-a_{12}b_2)}{a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21}} \\ 0 & a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21} & a_{11}b_2-b_1a_{21} \end{array} \right] \tag{574}$$

(第一行に $-1/a_{11}$ を掛ける .) (575)

(第二行に $-1/(a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21})$ を掛ける .) (576)

$$\longrightarrow \left[\begin{array}{cc|c} 1 & 0 & \dfrac{b_1a_{22}-a_{12}b_2}{a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21}} \\ 0 & 1 & \dfrac{a_{11}b_2-b_1a_{21}}{a_{11}a_{22}-a_{12}a_{21}} \end{array} \right] . \tag{577}$$

(578)

ここで $a_{11} \neq 0$ と

$$a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21} \neq 0 \tag{579}$$

を条件としてかした．このとき拡大係数行列の階数は 2 であり，一意な解

$$x_1 = \frac{b_1a_{22} - a_{12}b_2}{a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}}\,, \qquad x_2 = \frac{a_{11}b_2 - b_1a_{21}}{a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}} \tag{580}$$

をもつ．この結果より，行列 A に対してスカラー量 $\det(A)$ を

$$\det(A) = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21} \tag{581}$$

と定義する．$\det(A)$ を行列式 (**determinant**) という．以上より，連立方程式の解の判別条件を得る．$\det(A) \neq 0$ のとき行列 A はフルランクであり一意な解をもつ．$\det(A) = 0$ のとき行列 A はランクが落ち一意な解をもたない．

同様にして正方行列 A に対して行列式を定義すると

$$1 \times 1 \quad \det(A) = \begin{vmatrix} a_{11} \end{vmatrix} = a_{11} \tag{582}$$

$$2 \times 2 \quad \det(A) = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21} \tag{583}$$

$$3 \times 3 \quad \det(A) = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} \tag{584}$$

$$= a_{11}a_{22}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32} + a_{12}a_{23}a_{31} \tag{585}$$

$$- a_{12}a_{21}a_{33} + a_{13}a_{21}a_{32} - a_{13}a_{22}a_{31} \tag{586}$$

となる．一般に $n \times n$ 行列では

$$\det(A) = \sum_{(k_1,\cdots,k_n)\in S_n} (\pm) a_{1,k_1}a_{2,k_2}a_{3,k_3}\cdots a_{n,k_n} \tag{587}$$

となることが予想される．ここで $k_1, k_2, \cdots, k_n$ は 1 から n の整数でお互いが異なる値をとる．総和 $\sum$ はこの組合わせの全ての和をとる．互いに異なる n 個の組合わせを考えるので足し合せる項は $n!$ である．すなわちこの組合わせの集合 S_n は

$$S_1 = \{(1)\}\,, \tag{588}$$

$$S_2 = \{(1,2),(2,1)\}\,, \tag{589}$$

$$S_3 = \{(1,2,3),(1,3,2),(2,3,1),(2,1,3),(3,1,2),(3,2,1)\} \tag{590}$$

である．S_n の元の個数は順列組合わせの個数となるので $n!$ 個である．符合 $\pm$ は次節の置換の符合から定まる．

§ 4.2 置換

定義 4.1 （文字の置換） n 個の文字 $\{1,2,\cdots,n\}$ から自分自身 $\{1,2,\cdots,n\}$ への 1 対 1 の写像を n 文字の置換（**permutation**）という．n 文字の置換 σ が写像

$$1 \to k_1\,, \quad 2 \to k_2\,, \quad \cdots n \to k_n \tag{591}$$

のとき σ を

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & \cdots & k_n \end{pmatrix} \tag{592}$$

と表わす．写像 $j \to k_j$ を $\sigma(j) = k_j$ と表わす． □

例 4.2 （置換の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 3 & 1 & 4 & 2 \end{pmatrix}\,, \tag{593}$$

$$1 \to 3\,, \quad 2 \to 1\,, \quad 4 \to 4\,, \quad 4 \to 2\,, \tag{594}$$

$$\sigma(1) = 3\,, \quad \sigma(2) = 1\,, \quad \sigma(4) = 4\,, \quad \sigma(4) = 2\,. \tag{595}$$

□

例 4.3 （置換の表記）

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 3 & 2 & 4 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 4 & 1 & 3 \\ 2 & 1 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 3 & 4 \\ 3 & 4 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 4 & 1 \\ 4 & 1 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 1 & 4 \\ 4 & 3 & 1 \end{pmatrix}\,. \tag{596}$$

同じ数字に置換する場合は省略可能．並べる順はどうでも良い． □

定義 4.4 （置換の積） 二つの置換

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & \cdots & k_n \end{pmatrix}, \tag{597}$$

$$\tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ l_1 & l_2 & \cdots & l_n \end{pmatrix} \tag{598}$$

の積 $\sigma\tau$ を

$$\sigma\tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & \cdots & k_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ l_1 & l_2 & \cdots & l_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_{l_1} & k_{l_2} & \cdots & k_{l_n} \end{pmatrix}, \tag{599}$$

または

$$(\sigma\tau)(i) = \sigma(\tau(i)), \quad i = 1, 2, \cdots, n \tag{600}$$

と定義する．

□

例 4.5 （置換の積の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 4 & 3 & 1 & 2 \end{pmatrix}, \quad \tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \end{pmatrix}, \tag{601}$$

$$\sigma\tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 4 & 3 & 1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \end{pmatrix} \tag{602}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ \sigma(\tau(1)) & \sigma(\tau(2)) & \sigma(\tau(3)) & \sigma(\tau(4)) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ \sigma(2) & \sigma(3) & \sigma(4) & \sigma(1) \end{pmatrix} \tag{603}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 3 & 1 & 2 & 4 \end{pmatrix}, \tag{604}$$

$$\tau\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 4 & 3 & 1 & 2 \end{pmatrix} \tag{605}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ \tau(\sigma(1)) & \tau(\sigma(2)) & \tau(\sigma(3)) & \tau(\sigma(4)) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ \tau(4) & \tau(3) & \tau(1) & \tau(2) \end{pmatrix} \tag{606}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 1 & 4 & 2 & 3 \end{pmatrix}. \tag{607}$$

□

注意 4.6 （置換の積は非可換） 一般的に $\sigma\tau = \tau\sigma$ は成立しない．

□

定義 4.7 （単位置換） 全ての文字を動かさない置換

$$\epsilon = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ 1 & 2 & \cdots & n \end{pmatrix} \tag{608}$$

を単位置換と呼ぶ．

□

定義 4.8 （逆置換） 置換 σ に対して

$$\sigma\tau = \tau\sigma = \epsilon \tag{609}$$

を満たす置換 τ を σ の逆置換と呼び，$\tau = \sigma^{-1}$ と表わす．

□

定理 4.9 （逆置換） 置換

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & \cdots & k_n \end{pmatrix} \tag{610}$$

の逆置換は

$$\sigma^{-1} = \begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_n \\ 1 & 2 & \cdots & n \end{pmatrix} \tag{611}$$

で与えられる．

□

例 4.10 （逆置換の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 4 & 5 & 1 & 3 & 2 \end{pmatrix}, \tag{612}$$

$$\sigma^{-1} = \begin{pmatrix} 4 & 5 & 1 & 3 & 2 \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 5 & 4 & 1 & 2 \end{pmatrix}. \tag{613}$$

□

定義 4.11 （巡回置換） n 個の文字 $\{1, 2, \cdots, n\}$ のうち r 個の文字 $\{k_1, k_2, \cdots, k_r\}$ のみを $k_1 \to k_2, k_2 \to k_3, \cdots, k_r \to k_1$ と順にずらし，残りの文字 $\{k_{r+1}, \cdots, k_n\}$ を $k_{r+1} \to k_{r+1}, \cdots, k_n \to k_n$ と動かさない写像の置換を巡回置換という．巡回置換は

$$\sigma = \begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_{r-1} & k_r & k_{r+1} & \cdots & k_n \\ k_2 & k_3 & \cdots & k_r & k_1 & k_{r+1} & \cdots & k_n \end{pmatrix} \tag{614}$$

$$= \begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_{r-1} & k_r \\ k_2 & k_3 & \cdots & k_r & k_1 \end{pmatrix} \tag{615}$$

と表わされ，省略するときは

$$\sigma = \begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_r \end{pmatrix} \tag{616}$$

と書く．

□

例 4.12 （巡回置換の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & 5 & 2 & 4 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 3 & 5 \\ 5 & 2 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 5 & 3 \\ 5 & 3 & 2 \end{pmatrix} \tag{617}$$

$$= \begin{pmatrix} 2 & 5 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5 & 3 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 2 & 5 \end{pmatrix}, \tag{618}$$

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 1 & 2 & 4 & 5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 3 & 1 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 3 & 2 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix} \tag{619}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 3 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 2 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 \end{pmatrix}. \tag{620}$$

□

定理 4.13 （置換を巡回置換の積で表わす） 任意の置換 σ は巡回置換 $\sigma_1, \sigma_2, \cdots, \sigma_n$ の積で $\sigma = \sigma_1\sigma_2\cdots\sigma_n$ と表わされる．

□

例 4.14 （置換を巡回置換の積で表わす計算例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \\ 4 & 1 & 6 & 2 & 7 & 5 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 6 & 5 & 7 \\ 4 & 2 & 1 & 6 & 5 & 7 & 3 \end{pmatrix} \tag{621}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 6 & 5 & 7 \\ 4 & 2 & 1 & 3 & 6 & 5 & 7 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 6 & 5 & 7 \\ 1 & 4 & 2 & 6 & 5 & 7 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 \\ 4 & 2 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 6 & 5 & 7 \\ 6 & 5 & 7 & 3 \end{pmatrix} \tag{622}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 6 & 5 & 7 \end{pmatrix}. \tag{623}$$

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \\ 5 & 3 & 7 & 1 & 4 & 2 & 6 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 5 & 4 & 2 & 3 & 7 & 6 \\ 5 & 4 & 1 & 3 & 7 & 6 & 2 \end{pmatrix} \tag{624}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 5 & 4 & 2 & 3 & 7 & 6 \\ 5 & 4 & 1 & 2 & 3 & 7 & 6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 5 & 4 & 2 & 3 & 7 & 6 \\ 1 & 5 & 4 & 3 & 7 & 6 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 5 & 4 \\ 5 & 4 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 3 & 7 & 6 \\ 3 & 7 & 6 & 2 \end{pmatrix} \tag{625}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 5 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 3 & 7 & 6 \end{pmatrix}. \tag{626}$$

□

定義 4.15 （互換） 2 文字の巡回置換 $(i \quad j)$ を互換という．

□

定理 4.16 （巡回置換を互換の積で表わす） 任意の巡回置換は互換の積で表わされる．たとえば，その一つとして

$$\begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_r \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} k_1 & k_r \end{pmatrix} \cdots \begin{pmatrix} k_1 & k_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} k_1 & k_2 \end{pmatrix} \tag{627}$$

と表わされる．

□

例 4.17 （置換を互換の積で表わす） たとえば

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 4 & 2 & 3 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 3 & 2 & 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 1 & 3 & 4 \end{pmatrix} \tag{628}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix}. \tag{629}$$

たとえば

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix}. \tag{630}$$

□

注意 4.18 互換の積で表わす方法は幾通りもある．

□

定義 4.19 （置換の符号） 置換 σ が m 個の互換の積で表わされるとき σ の符号（**sign**）を

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma) = (-1)^m \tag{631}$$

と定義する．

□

例 4.20 （置換の符号の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix} \tag{632}$$

より

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma) = (-1)^3 = -1 \tag{633}$$

となる．また

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \tag{634}$$

より

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma) = (-1)^5 = -1 \tag{635}$$

である．

□

定理 4.21 （置換の符号の一意性） 置換 σ の符号 $\mathrm{sgn}\,(\sigma)$ は互換の積の表わし方によらず一意に定まる．

□

定理 4.22 （置換の符号の性質）

$$\mathrm{sgn}\,(\epsilon) = 1 \tag{636}$$

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma\tau) = \mathrm{sgn}\,(\sigma)\mathrm{sgn}\,(\tau) \tag{637}$$

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma^{-1}) = \mathrm{sgn}\,(\sigma) \tag{638}$$

□

定義 4.23（偶置換，奇置換） $\mathrm{sgn}\,(\sigma) = 1$ となる置換を偶置換と呼び，$\mathrm{sgn}\,(\sigma) = -1$ となる置換を奇置換と呼ぶ．

□

例 4.24（偶置換，奇置換の具体例）

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 & 8 & 9 \\ 7 & 6 & 8 & 2 & 1 & 4 & 9 & 3 & 5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 7 & 9 & 5 & 2 & 6 & 4 & 3 & 3 \\ 7 & 9 & 5 & 1 & 6 & 4 & 2 & 8 & 2 \end{pmatrix} \tag{639}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 7 & 9 & 5 \\ 7 & 9 & 5 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 6 & 4 \\ 6 & 4 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 8 \\ 8 & 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 7 & 9 & 5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 6 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 8 \end{pmatrix} \tag{640}$$

$$= \begin{pmatrix} 1 & 5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 9 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 7 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 8 \end{pmatrix} \tag{641}$$

より

$$\mathrm{sgn}\,(\sigma) = (-1)^6 = 1 \tag{642}$$

となる．σ は偶置換である．

□

定義 4.25（置換全体の集合） n 文字の置換 σ の全体の集合を S_n と書く．

□

注意 4.26（置換全体の集合の要素の個数） n 文字の置換は写像

$$\{1, 2, \cdots, n\} \quad \rightarrow \quad \{k_1, k_2, \cdots, k_n\} \tag{643}$$

であるから，その個数は n 個の文字の順列組合わせに等しい．よって集合 S_n の個数は $n!$ である．

□

例 4.27（置換全体の集合の具体例）

$$S_1 = \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\} = \{ \underset{\text{偶}}{\epsilon} \} \tag{644}$$

$$S_2 = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 1 \end{pmatrix} \right\} = \{ \underset{\text{偶}}{\epsilon}, \quad \underset{\text{奇}}{\begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix}} \} \tag{645}$$

$$S_3 = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 3 & 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 3 & 1 & 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 1 & 3 \end{pmatrix} \right\} \tag{646}$$

$$= \{ \underset{\text{偶}}{\epsilon}, \quad \underset{\text{奇}}{\begin{pmatrix} 2 & 3 \end{pmatrix}}, \quad \underset{\text{奇}}{\begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix}}, \quad \underset{\text{偶}}{\begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix}}, \quad \underset{\text{偶}}{\begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \end{pmatrix}}, \quad \underset{\text{奇}}{\begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix}} \} \tag{647}$$

□

問 4.28（置換全体の集合） 4 次の置換全体の集合 S_4 の要素全てを書き出せ．またその偶奇も述べよ．

□

問 4.29（偶置換，奇置換の個数） S_n $(n \geq 2)$ に含まれる偶置換と奇置換の個数は等しい．これを示せ．

□

§ 4.3 多項式の文字の置換

定義 4.30 （多項式の変数の置換） n 変数 $x_1,\, x_2,\, \cdots,\, x_n$ の多項式 $f(x_1, x_2, \cdots, x_n)$ と置換 $\sigma \in S_n$ に対して

$$\sigma\, f(x_1, x_2, \cdots, x_n) = f(x_{\sigma_1}, x_{\sigma_2}, \cdots, x_{\sigma_n}) \tag{648}$$

と定義する．

□

例 4.31 （多項式の変数の置換の具体例）

$$f(x_1, x_2, x_3) = x_1x_2 + 2x_2 + 3x_3 \tag{649}$$

とする．

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix} \tag{650}$$

のとき

$$\sigma\, f(x_1, x_2, x_3) = f(x_2, x_1, x_3) = x_2x_1 + 2x_1 + 3x_3 \tag{651}$$

となる．

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \tag{652}$$

のとき

$$\sigma\, f(x_1, x_2, x_3) = f(x_2, x_3, x_1) = x_2x_3 + 2x_3 + 3x_1 \tag{653}$$

となる．

□

定理 4.32 （置換の積） $\sigma, \tau \in S_n$ に対して

$$(\sigma\tau)f(x_1, \cdots, x_n) = (\sigma(\tau f))(x_1, \cdots, x_n) \tag{654}$$

が成立する．

（証明）

$$\text{（左辺）} = (\sigma\tau)f(x_1, \cdots, x_n) = f(x_{(\sigma\tau)(1)}, \cdots, x_{(\sigma\tau)(n)})\,, \tag{655}$$

$$\text{（右辺）} = (\sigma(\tau\, f))(x_1, \cdots, x_n) = \sigma\, f(x_{\tau(1)}, \cdots, x_{\tau(n)}) \tag{656}$$

$$= f(x_{\sigma(\tau(1))}, \cdots, x_{\sigma(\tau(n))}) = f(x_{(\sigma\tau)(1)}, \cdots, x_{(\sigma\tau)(n)})\,. \tag{657}$$

□

定義 4.33 （差積） n 変数 $x_1, \cdots, x_n$ の多項式

$$\Delta(x_1, x_2, \cdots, x_n) = \prod_{i \leq i < j \leq n} (x_i - x_j) \tag{658}$$

を差積と呼ぶ．

□

例 4.34 （差積の具体例）

$$\Delta(x_1, x_2) = x_1 - x_2\,, \tag{659}$$
$$\Delta(x_1, x_2, x_3) = (x_1 - x_2)(x_1 - x_3)(x_2 - x_3)\,, \tag{660}$$
$$\Delta(x_1, x_2, x_3, x_4) = (x_1 - x_2)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_3 - x_4)\,, \tag{661}$$
$$\Delta(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (x_1 - x_2)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_1 - x_5) \tag{662}$$
$$\times (x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_2 - x_5) \tag{663}$$
$$\times (x_3 - x_4)(x_3 - x_5) \tag{664}$$
$$\times (x_4 - x_5)\,. \tag{665}$$

□

定理 4.35 （互換による差積の置換） 互換 $\sigma = \begin{pmatrix} i & j \end{pmatrix}$ に対して

$$\sigma\, \Delta(x_1, \cdots, x_n) = -\Delta(x_1, \cdots, x_n) \tag{666}$$

が成立する．

□

定理 4.36 （差積の変数の置換） 置換 $\sigma \in S_n$ に対して

$$\sigma\, \Delta(x_1, \cdots, x_n) = \mathrm{sgn}\,(\sigma)\, \Delta(x_1, \cdots, x_n) \tag{667}$$

が成立する．

□

定理 4.37 （置換の符号の一意性） 置換の符合は互換の積の表わし方によらず一意に定まる．

（証明）置換 σ が互換の積を用いて二通りで表せたとする．すなわち，

$$\sigma = \sigma_m \sigma_{m-1} \cdots \sigma_2 \sigma_1 \,, \tag{668}$$

$$\sigma = \tau_l \tau_{l-1} \cdots \tau_2 \tau_1 \tag{669}$$

とする．このときそれぞれ

$$\sigma\, \Delta(x_1, \cdots, x_n) = (\sigma_m \cdots \sigma_1) \Delta(x_1, \cdots, x_n) = (-1)^m \Delta \,, \tag{670}$$

$$\sigma\, \Delta(x_1, \cdots, x_n) = (\tau_l \cdots \tau_1) \Delta(x_1, \cdots, x_n) = (-1)^l \Delta \tag{671}$$

となる．よって

$$(-1)^m \Delta(x_1, \cdots, x_n) = (-1)^l \Delta(x_1, \cdots, x_n) \tag{672}$$

である．恒等的には $\Delta \neq 0$ であるから

$$(-1)^m = (-1)^l \tag{673}$$

が成立する．以上より符合 $\mathrm{sgn}\,(\sigma)$ は互換の積の表し方によらず $\mathrm{sgn}\,(\sigma) = (-1)^m = (-1)^l$ と一意に定まる． □

§ 4.4 行列式の定義

定義 4.38 （行列式） n 次正方行列 $A = [a_{ij}]_{m\times n}$ に対して

$$\det(A) = \sum_{\sigma\in S_n} \operatorname{sgn}(\sigma)\, a_{1,\sigma(1)} a_{2,\sigma(2)} \cdots a_{n,\sigma(n)} \tag{674}$$

を A の行列式（**determinant**）という．A の行列式はまた

$$|A|, \quad |a_{ij}|, \quad \det \begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{nn} \end{bmatrix}, \quad \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{675}$$

と書き表す．

□

例 4.39 （行列式の具体例） $n = 1$ のとき，

$$S_1 = \{\underset{\text{偶}}{\epsilon}\} \tag{676}$$

より，行列式は

$$\det(A) = \sum_{\sigma\in S_1} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{1,\sigma(1)} = \operatorname*{sgn}_{\sigma=\varepsilon}(\sigma) \cdot a_{1,\sigma(1)} = a_{11}\,. \tag{677}$$

$n = 2$ のとき，

$$S_2 = \{\underset{\text{偶}}{\epsilon}, \underset{\text{奇}}{(1\ 2)}\} \tag{678}$$

より，行列式は

$$\det(A) = \sum_{\sigma\in S_2} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{1,\sigma(1)} a_{2,\sigma(2)} \tag{679}$$

$$= \operatorname*{sgn}_{\sigma=\varepsilon}(\sigma) \cdot a_{1,\sigma(1)} a_{2,\sigma(2)} + \operatorname*{sgn}_{\sigma=(1\ 2)}(\sigma) \cdot a_{1,\sigma(1)} a_{2,\sigma(2)} \tag{680}$$

$$= a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}\,. \tag{681}$$

$n = 3$ のとき，

$$S_3 = \{\underset{\text{偶}}{\varepsilon}, \underset{\text{奇}}{(1\ 2)}, \underset{\text{奇}}{(1\ 3)}, \underset{\text{奇}}{(2\ 3)}, \underset{\text{偶}}{(1\ 2\ 3)}, \underset{\text{偶}}{(1\ 3\ 2)}\} \tag{682}$$

より，行列式は

$$\det(A) = \sum_{\sigma\in S_2} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{1,\sigma(1)} a_{2,\sigma(2)} a_{3,\sigma(3)} \tag{683}$$

$$= a_{11}a_{22}a_{33} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{13}a_{22}a_{31} - a_{11}a_{23}a_{32} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{13}a_{21}a_{32}\,. \tag{684}$$

□

問 4.40 （行列式の具体例） 4 次の行列式を定義に従い書き下せ．

□

注意 4.41 （サルスの方法） 3 次の行列式まではサルスの方法により符合が簡単に定まる．右斜め下向きの組合わせでは正をとり，左斜め下向きの組合わせでは負となる．4 次以上の行列式ではこのルールは適用できない．

$$\left|a_{11}\right| = a_{11}\,. \tag{685}$$

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}\,. \tag{686}$$

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{13}a_{21}a_{32} - a_{13}a_{22}a_{31} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32}\,. \tag{687}$$

□

注意 4.42 （行列式の計算） 置換 $(1,2,3)$ を一組ずつ互換をとると，

偶		奇		偶
$(1,2,3)$	$\cdots$	$(1,3,2)$		
	$\ddots$	$(2,1,3)$	$\cdots$	$(2,3,1)$
	$\ddots$	$(3,2,1)$	$\cdots$	$(3,1,2)$

置換 $(1,2,3,4)$ を一組ずつ互換をとると，

偶		奇		偶		奇
$(1,2,3,4)$	$\cdots$	$(1,2,4,3)$				
	$\ddots$	$(1,3,2,4)$	$\cdots$	$(1,3,4,2)$		
	$\ddots$	$(1,4,3,2)$	$\cdots$	$(1,4,2,3)$		
	$\ddots$	$(2,1,3,4)$	$\cdots$	$(2,1,4,3)$		
			$\ddots$	$(2,3,1,4)$	$\cdots$	$(2,3,4,1)$
			$\ddots$	$(2,4,3,1)$	$\cdots$	$(2,4,1,3)$
	$\ddots$	$(3,2,1,4)$	$\cdots$	$(3,1,2,4)$	$\cdots$	$(3,1,4,2)$
			$\ddots$	$(3,2,4,1)$		
			$\ddots$	$(3,4,1,2)$	$\cdots$	$(3,4,2,1)$
	$\ddots$	$(4,2,3,1)$	$\cdots$	$(4,1,3,2)$	$\cdots$	$(4,1,2,3)$
			$\ddots$	$(4,2,1,3)$		
			$\ddots$	$(4,3,2,1)$	$\cdots$	$(4,3,1,2)$

□

§ 4.5 行列式の行に関する性質

定理 4.43 （行列式の行に関する性質） 行列式は次の性質もつ．

(1) $(1,1)$ 成分を除いて 1 列目が全て 0 の場合は行列式のサイズが一つ下がる．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ 0 & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ 0 & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{688}$$

(2) 第 i 行目の要素全てが共通因子 α をもつとき，α は行列式の外へ．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ \alpha\, a_{i1} & \alpha\, a_{i2} & \cdots & \alpha\, a_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \alpha \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{689}$$

(3) 第 i 行が二つのベクトルの和で表されるとき，行列式の和に分解される．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_{i1}+c_{i1} & b_{i2}+c_{i2} & \cdots & b_{in}+c_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ c_{i1} & c_{i2} & \cdots & c_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ c_{i1} & c_{i2} & \cdots & c_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{690}$$

(4) 第 i 行と第 j 行を入れ替えると行列式の符合が反転する．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{j1} & a_{j2} & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{j1} & a_{j2} & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{691}$$

(5) 同じ行があるときは行列式は 0 となる．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_1 & b_2 & \cdots & b_n \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_1 & b_2 & \cdots & b_n \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = 0 \tag{692}$$

(6) 第 j 行を α 倍して第 i 行に加えても行列式は等しい．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i1} + \alpha\, a_{j1} & a_{i2} + \alpha\, a_{j2} & \cdots & a_{in} + \alpha\, a_{jn} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{j1} & a_{j2} & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i1} & a_{i2} & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{j1} & a_{j2} & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{693}$$

□

問 4.44 （行列式の行に関する性質） これを示せ．

□

§ 4.6 行列式の列に関する性質

定理 4.45 (転置行列の行列式)

$$\det(A^T) = \det(A) \tag{694}$$

□

問 4.46 (転置行列の行列式) これを示せ．

□

定理 4.47 (行列式の列に関する性質) 行列式は次の性質もつ．

(1) $(1,1)$ 成分を除いて 1 行目が全て 0 の場合は行列式のサイズが一つ下がる．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & 0 & \cdots & 0 \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{695}$$

(2) 第 j 列行目の要素全てが共通因子 α をもつとき，α は行列式の外へ．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & \alpha\, a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & \alpha\, a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & \alpha\, a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \alpha \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{696}$$

(3) 第 i 列が二つのベクトルの和で表されるとき，行列式の和に分解される．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & b_{1j} + c_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & b_{2j} + c_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & b_{nj} + c_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & b_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & b_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & b_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & c_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & c_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & c_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{697}$$

(4) 第 i 列と第 j 列を入れ替えると行列式の符合が反転する．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1i} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2i} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{ni} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1i} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2i} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{ni} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{698}$$

(5) 同じ列があるときは行列式は 0 となる．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & b_1 & \cdots & b_1 & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & b_2 & \cdots & b_2 & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & b_n & \cdots & b_n & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = 0 \tag{699}$$

(6) 第 j 列を α 倍して第 i 列に加えても行列式は等しい．

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1i} + \alpha\, a_{1j} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2i} + \alpha\, a_{2j} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{ni} + \alpha\, a_{nj} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1i} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2i} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{ni} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{700}$$

□

問 4.48　これを示せ．

□

§ 4.7 行列式の計算

例 4.49 (行列式の計算の例)

$$\begin{vmatrix} 3 & 1 & 2 \\ 0 & 2 & 3 \\ 0 & 1 & 4 \end{vmatrix} = 3 \begin{vmatrix} 2 & 3 \\ 1 & 4 \end{vmatrix} = 3(2 \cdot 4 - 3 \cdot 1) = 3(8 - 3) = 15 \,. \tag{701}$$

□

例 4.50 (行列式の計算の例)　上三角行列の行列式：

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ & & \ddots & \vdots \\ & & & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ & \ddots & \vdots \\ & & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} a_{22} \begin{vmatrix} a_{33} & \cdots & a_{3n} \\ & \ddots & \vdots \\ & & a_{nn} \end{vmatrix} \tag{702}$$

$$= \cdots = a_{11} a_{22} a_{33} \cdots a_{nn} \,. \tag{703}$$

□

例 4.51 (行列式の計算の例)　下三角行列の行列式：

$$\begin{vmatrix} a_{11} & & & \\ a_{21} & a_{22} & & \\ \vdots & & \ddots & \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} a_{22} \cdots a_{nn} \,. \tag{704}$$

□

問 4.52 (下三角行列の行列式)　これを示せ．

□

例 4.53 (行列式の計算の例)　対角行列の行列式：

$$\begin{vmatrix} a_{11} & & & \\ & a_{22} & & \\ & & \ddots & \\ & & & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} a_{22} \cdots a_{nn} \,. \tag{705}$$

□

問 4.54 (対角行列の行列式)　これを示せ．

□

例 4.55 (行列式の計算の例)　単位行列の行列式：

$$\begin{vmatrix} 1 & & & \\ & 1 & & \\ & & \ddots & \\ & & & 1 \end{vmatrix} = 1\,. \tag{706}$$

□

例 4.56 (行列式の計算の例)

$$\begin{vmatrix} -1 & 2 & 0 \\ a+3 & b+6 & c+9 \\ 7 & 2 & 4 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} -1 & 2 & 0 \\ a & b & c \\ 7 & 2 & 4 \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} -1 & 2 & 0 \\ 3 & 6 & 9 \\ 7 & 2 & 4 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} -1 & 0 & 0 \\ a & b+2a & c \\ 7 & 16 & 4 \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 3 & 12 & 9 \\ 7 & 16 & 4 \end{vmatrix} \tag{707}$$

$$= (-1)\begin{vmatrix} b+2a & c \\ 16 & 4 \end{vmatrix} + (-1)\begin{vmatrix} 12 & 9 \\ 16 & 4 \end{vmatrix} \tag{708}$$

$$= -(4(b+2a) - 16c) - (12 \cdot 4 - 9 \cdot 16) = -8a - 4b + 16c + 96\,. \tag{709}$$

□

例 4.57 (行列式の計算の例)

$$\begin{vmatrix} 2 & 3 & 1 \\ 4 & 6 & 2 \\ 1 & 6 & 7 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & 3 & 1 \\ 2\cdot 2 & 2\cdot 3 & 2\cdot 1 \\ 1 & 6 & 7 \end{vmatrix} = 2\begin{vmatrix} 2 & 3 & 1 \\ 2 & 3 & 1 \\ 1 & 6 & 7 \end{vmatrix} = 0\,. \tag{710}$$

□

例 4.58 (行列式の計算の例)

$$\begin{vmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 2 & 2 \\ 3 & -1 & 1 \end{vmatrix} = -\begin{vmatrix} 3 & -1 & 1 \\ 0 & 2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 \end{vmatrix} = -3\begin{vmatrix} 2 & 2 \\ 0 & 1 \end{vmatrix} = -3\cdot 2\,|1| = -3\cdot 2\cdot 1 = -6\,. \tag{711}$$

□

例 4.59 (行列式の計算の例)

$$\begin{vmatrix} 1 & 3 & 4 \\ -2 & -5 & 7 \\ -3 & 2 & -1 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 3 & 4 \\ 0 & 1 & 15 \\ 0 & 11 & 11 \end{vmatrix} = 1\begin{vmatrix} 1 & 15 \\ 11 & 11 \end{vmatrix} = 11\begin{vmatrix} 1 & 15 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} = 11\begin{vmatrix} 1 & 15 \\ 0 & -14 \end{vmatrix} \tag{712}$$

$$= 11\cdot 1\,|-14| = 11\cdot(-14) = -154\,. \tag{713}$$

□

例 4.60 （行列式の計算の例）

$$\begin{vmatrix} 3 & 0 & 1 & -7 \\ 2 & 3 & 4 & -4 \\ 1 & 2 & 1 & 3 \\ 1 & 1 & 2 & -5 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & -3 & -5 & 8 \\ 0 & 1 & 0 & 6 \\ 0 & 1 & -1 & 8 \\ 1 & 1 & 2 & -5 \end{vmatrix} = (-1)^3 \begin{vmatrix} 1 & 1 & 2 & -5 \\ 0 & -3 & -5 & 8 \\ 0 & 1 & 0 & 6 \\ 0 & 1 & -1 & 8 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} -3 & -5 & 8 \\ 1 & 0 & 6 \\ 1 & -1 & 8 \end{vmatrix} \tag{714}$$

$$= - \begin{vmatrix} -3 & -5 & 26 \\ 1 & 0 & 0 \\ 1 & -1 & 2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 \\ -3 & -5 & 26 \\ 1 & -1 & 2 \end{vmatrix} = 1 \begin{vmatrix} -5 & 26 \\ -1 & 2 \end{vmatrix} = (-5) \cdot 2 - 26 \cdot (-1) = 16 \,. \tag{715}$$

□

例 4.61 （行列式の計算の例）

$$\begin{vmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 \\ 3 & 0 & 1 & 0 \\ -1 & 3 & 3 & 4 \\ 1 & 6 & 1 & 4 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 3 & 0 & 4 & 0 \\ -1 & 3 & 2 & 4 \\ 1 & 6 & 2 & 4 \end{vmatrix} = 1 \begin{vmatrix} 0 & 4 & 0 \\ 3 & 2 & 4 \\ 6 & 2 & 4 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 2 & 3 & 4 \\ 2 & 6 & 4 \end{vmatrix} = -4 \begin{vmatrix} 3 & 4 \\ 6 & 4 \end{vmatrix} \tag{716}$$

$$= -4 \cdot 3 \cdot 4 \begin{vmatrix} 1 & 1 \\ 2 & 1 \end{vmatrix} = -4 \cdot 3 \cdot 4 (1 \cdot 1 - 1 \cdot 2) = 48 \,. \tag{717}$$

□

§ 4.8 行列式の性質

定理 4.62 (行列式の性質)

$$\det \begin{bmatrix} A & B \\ O & D \end{bmatrix} = \det \begin{bmatrix} A & O \\ C & D \end{bmatrix} = \det(A)\det(D)\,. \tag{718}$$

□

例 4.63 (行列式の計算例)

$$\begin{vmatrix} 2 & 7 & 13 & 5 \\ 5 & 3 & 8 & 2 \\ 0 & 0 & 9 & 4 \\ 0 & 0 & -2 & 1 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & 7 \\ 5 & 3 \end{vmatrix} \begin{vmatrix} 9 & 4 \\ -2 & 1 \end{vmatrix} = (2\cdot 3 - 7\cdot 5) \times (9\cdot 1 - 4\cdot(-2)) = -29 \times 15 = -435\,. \tag{719}$$

□

定理 4.64 (行列の積の行列式)

$$\det(AB) = \det(A)\det(B)\,. \tag{720}$$

□

注意 4.65 (行列の積の行列式) $AB \neq BA$ のときでさえも

$$\det(AB) = \det(BA) \tag{721}$$

が成り立つことに注意する．これは

$$\det(AB) = \det(A)\cdot\det(B) = \det(B)\cdot\det(A) = \det(BA) \tag{722}$$

より示される．

□

問 4.66 (行列式の性質の使用例)

$$(a^2+b^2)(c^2+d^2) = (ac-bd)^2 + (ad+bc)^2 \tag{723}$$

が成り立つことを

$$\begin{bmatrix} a & b \\ -b & a \end{bmatrix} \begin{bmatrix} c & d \\ -d & c \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} ac-bd & ad+bc \\ -(ad+bc) & ac-bd \end{bmatrix} \tag{724}$$

の両辺の行列式をとることで示せ．

□

§ 4.9 行列の正則性と行列式

定理 4.67 （行列の正則性と行列式） 行列 A が正則行列のとき $\det(A) \neq 0$ が成り立つ．

□

問 4.68 これを示せ．

（証明）A は逆行列をもつので，

$$AA^{-1} = A^{-1}A = E \tag{725}$$

が成立する．各辺の行列式をとると

$$\det(AA^{-1}) = \det(A)\det(A^{-1}), \tag{726}$$
$$\det(A^{-1}A) = \det(A^{-1})\det(A) = \det(A)\det(A^{-1}), \tag{727}$$
$$\det(E) = 1 \tag{728}$$

であるから

$$\det(A)\det(A^{-1}) = 1 \tag{729}$$

を得る．よって

$$\det(A) \neq 0, \quad \det(A^{-1}) \neq 0 \tag{730}$$

が成り立つ． □

定理 4.69 （逆行列の行列式）

$$\det(A^{-1}) = \frac{1}{\det(A)}. \tag{731}$$

□

問 4.70 （逆行列の行列式） これを示せ．

（証明）前の定理の証明の $\det(A)\det(A^{-1}) = 1$ より示される． □

§ 4.10 ちょっとまとめ

定理 4.71 (行列式の性質)

(1) 一つの行を α 倍すると行列式は α 倍となる．

(2) 一つの行が二つの行ベクトルの和で表せる行列式は，他の行はそのままで，その行に各々の行ベクトルをとった行列式の和に等しい．

(3) 二つの行を入れ替えると行列式は -1 倍となる．

(4) 二つの行が等しい行列式は 0 である．

(5) 一つの行を α 倍して別の行に加えても行列式は変らない．

□

定理 4.72 (行列式の性質)

(1) 一つの列を α 倍すると行列式は α 倍となる．

(2) 一つの列が二つの列ベクトルの和で表せる行列式は，他の列はそのままで，その列に各々の列ベクトルをとった行列式の和に等しい．

(3) 二つの列を入れ替えると行列式は -1 倍となる．

(4) 二つの列が等しい行列式は 0 である．

(5) 一つの列を α 倍して別の列に加えても行列式は変らない．

(証明) $\det(A^T) = \det(A)$ より，$\det(A^T)$ に対する行の基本変形は，$\det(A)$ に対する列の基本変形と等しい．

□

§ 4.11 余因子

定義 4.73 （小部分行列と余因子） n 次正方行列 $A = [a_{ij}]_{n\times n}$ の第 i 行と第 j 列を取り除いた $n-1$ 次の小行列を

$$A_{ij} = \left[\begin{array}{ccc|ccc} a_{1,1} & \cdots & a_{1,j-1} & a_{1,j+1} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{i-1,1} & \cdots & a_{i-1,j-1} & a_{i-1,j+1} & \cdots & a_{i-1,n} \\ \hline a_{i+1,1} & \cdots & a_{i+1,j-1} & a_{i+1,j+1} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n,1} & \cdots & a_{n,j-1} & a_{n,j+1} & \cdots & a_{n,n} \end{array}\right] \tag{732}$$

と書く．このとき行列 A_{ij} の行列式 $\det(A_{ij})$ に符合をつけた数

$$\Delta_{ij} = (-1)^{i+j}\det(A_{ij}) \tag{733}$$

を A における A_{ij} の余因子（**cofactor**）と呼ぶ．

□

例 4.74 （余因子の具体例） 行列

$$A = \begin{bmatrix} 3 & 1 & -2 \\ 4 & -3 & 0 \\ 2 & 6 & 5 \end{bmatrix} \tag{734}$$

を考える．このとき小行列

$$A_{12} = \begin{bmatrix} 4 & 0 \\ 2 & 5 \end{bmatrix}, \qquad A_{22} = \begin{bmatrix} 3 & -2 \\ 2 & 5 \end{bmatrix} \tag{735}$$

より，余因子は

$$\Delta_{12} = (-1)^{1+2}\begin{vmatrix} 4 & 0 \\ 2 & 5 \end{vmatrix} = -(20-0) = -20\,, \tag{736}$$

$$\Delta_{22} = (-1)^{2+2}\begin{vmatrix} 3 & -2 \\ 2 & 5 \end{vmatrix} = +(15+4) = 19 \tag{737}$$

である．

□

§ 4.12 余因子展開

定理 4.75 （余因子展開） 行列式 $\det(A)$ に対して

$$\det(A) = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}\Delta_{ik} = a_{i1}\Delta_{i1} + a_{i2}\Delta_{i2} + a_{i3}\Delta_{i3} + \cdots + a_{in}\Delta_{in} \tag{738}$$

$$|A| = (-1)^{i+1}a_{i1}|A_{i1}| + (-1)^{i+2}a_{i2}|A_{i2}| + \cdots + (-1)^{i+n}a_{in}|A_{in}| \tag{739}$$

$$= \sum_{k=1}^{n}(-1)^{i+k}a_{ik}|A_{ik}| \tag{740}$$

が成り立つ．これを第 i 行に関する余因子展開という．また，

$$\det(A) = \sum_{k=1}^{n} a_{kj}\Delta_{kj} = a_{1j}\Delta_{1j} + a_{2j}\Delta_{2j} + a_{3j}\Delta_{3j} + \cdots + a_{nj}\Delta_{nj} \tag{741}$$

$$|A| = (-1)^{j+1}a_{1j}|A_{1j}| + (-1)^{j+2}a_{2j}|A_{2j}| + \cdots + (-1)^{j+n}a_{nj}|A_{nj}| \tag{742}$$

$$= \sum_{k=1}^{n}(-1)^{k+j}a_{kj}|A_{kj}| \tag{743}$$

が成り立つ．これを第 j 列に関する余因子展開という． □

問 4.76 （余因子展開） これを示せ．

（証明）第 i 行に関する余因子展開を示す．まず行列式 $|A|$ の第 i 行目を第一行目に移動すると

$$|A| = \begin{vmatrix} a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i,1} & a_{i,2} & a_{i,3} & \cdots & a_{i,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} = (-1)^{i-1} \begin{vmatrix} a_{i,1} & a_{i,2} & a_{i,3} & \cdots & a_{i,n} \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} \tag{744}$$

となる．次に第一行目の行ベクトルを n 個のベクトルとしてみなし，行列式を n 個に分解す

ると

$$|A| = \tag{745}$$

$$(-1)^{i-1}\begin{vmatrix} a_{i,1} & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} + (-1)^{i-1}\begin{vmatrix} 0 & a_{i,2} & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} \tag{746}$$

$$+ (-1)^{i-1}\begin{vmatrix} 0 & 0 & a_{i,3} & \cdots & 0 \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} + \cdots + (-1)^{i-1}\begin{vmatrix} 0 & 0 & 0 & \cdots & a_{i,n} \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} \tag{747}$$

となる．各項の第 j 列を第一列に移動すると

$$|A| = \tag{748}$$

$$(-1)^{i-1}\begin{vmatrix} a_{i,1} & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} + (-1)^{i-1}(-1)\begin{vmatrix} a_{i,2} & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,2} & a_{1,1} & a_{1,3} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,2} & a_{i-1,1} & a_{i-1,3} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,2} & a_{i+1,1} & a_{i+1,3} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,2} & a_{n,1} & a_{n,3} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} \tag{749}$$

$$+ (-1)^{i-1}(-1)^2\begin{vmatrix} a_{i,3} & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,3} & a_{1,1} & a_{1,2} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,3} & a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & \cdots & a_{i-1,n} \\ a_{i+1,3} & a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & \cdots & a_{i+1,n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,3} & a_{n,1} & a_{n,2} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} + \cdots + (-1)^{i-1}\begin{vmatrix} a_{i,n} & 0 & 0 & 0 & \cdots \\ a_{1,n} & a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & \cdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots & \\ a_{i-1,n} & a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & a_{i-1,3} & \cdots \\ a_{i+1,n} & a_{i+1,1} & a_{i+1,2} & a_{i+1,3} & \cdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots & \\ a_{n,n} & a_{n,1} & a_{n,2} & a_{n,3} & \cdots \end{vmatrix} \tag{750}$$

となる．各項を第 $(1,1)$ 成分で展開すると

$$|A| = (-1)^{i+1} a_{i,1} |A_{i,1}| + (-1)^{i+2} a_{i,2} |A_{i,2}| + (-1)^{i+3} a_{i,3} |A_{i,3}| + \tag{751}$$

$$\cdots + (-1)^{i+n} a_{i,n} |A_{i,n}| \tag{752}$$

$$= a_{i,1}\Delta_{i,1} + a_{i,2}\Delta_{i,2} + a_{i,3}\Delta_{i,3} + \cdots + a_{i,n}\Delta_{i,n} = \sum_{k=1}^{n} a_{i,k}\Delta_{i,k} \tag{753}$$

を得る．同様の操作で列に関する余因子展開は示される．

□

例 4.77 (余因子展開の計算例)　第 2 列目で余因子展開し，

$$\begin{vmatrix} 2 & 3 & 1 \\ 7 & 2 & 5 \\ 4 & 0 & 3 \end{vmatrix} = (-1)^{1+2} \cdot 3 \begin{vmatrix} 7 & 5 \\ 4 & 3 \end{vmatrix} + (-1)^{2+2} \cdot 2 \begin{vmatrix} 2 & 1 \\ 4 & 3 \end{vmatrix} + (-1)^{3+2} \cdot 0 \begin{vmatrix} 2 & 1 \\ 7 & 5 \end{vmatrix} \tag{754}$$

$$= -3(7 \cdot 3 - 5 \cdot 4) + 2(2 \cdot 3 - 1 \cdot 4) - 0 = 1 \tag{755}$$

を得る．

□

例 4.78 (余因子展開の計算例)　第 2 行目で余因子展開し，

$$\begin{vmatrix} 4 & 5 & 2 \\ 0 & 0 & 2 \\ 7 & 8 & 3 \end{vmatrix} = (-1)^{2+1} \cdot 0 \begin{vmatrix} 5 & 2 \\ 8 & 3 \end{vmatrix} + (-1)^{2+2} \cdot 0 \begin{vmatrix} 4 & 2 \\ 7 & 3 \end{vmatrix} + (-1)^{2+3} \cdot 2 \begin{vmatrix} 4 & 5 \\ 7 & 8 \end{vmatrix} \tag{756}$$

$$= -0 + 0 - 2(4 \cdot 8 - 5 \cdot 7) = 6 \tag{757}$$

を得る．

□

例 4.79 (余因子展開の計算例)　第一行目を余因子展開し，

$$\overbrace{\begin{vmatrix} a & & & & b \\ b & a & & & \\ & b & \ddots & & \\ & & \ddots & a & \\ & & & b & a \end{vmatrix}}^{n} = a \overbrace{\begin{vmatrix} a & & & \\ b & \ddots & & \\ & \ddots & a & \\ & & b & a \end{vmatrix}}^{n-1} + (-1)^{n+1} b \overbrace{\begin{vmatrix} b & a & & \\ & \ddots & \ddots & \\ & & b & a \\ & & & b \end{vmatrix}}^{n-1} \tag{758}$$

$$= a^n + (-1)^{n+1} b^n \tag{759}$$

を得る．

□

§ 4.13 演習問題 ~ 行列式，行列式の性質

問 4.80 （置換） 次の置換の積を計算せよ．

(1) $\begin{pmatrix}1&2&3\\3&1&2\end{pmatrix}\begin{pmatrix}1&2&3\\3&1&2\end{pmatrix}$ (2) $\begin{pmatrix}1&2&3&4\\3&4&2&1\end{pmatrix}\begin{pmatrix}1&2&3&4\\4&3&2&1\end{pmatrix}$ (3) $\begin{pmatrix}1&3\end{pmatrix}\begin{pmatrix}2&3\end{pmatrix}\begin{pmatrix}2&4\end{pmatrix}$

(4) $\begin{pmatrix}1&4\end{pmatrix}\begin{pmatrix}3&2\end{pmatrix}\begin{pmatrix}1&2&4&3\end{pmatrix}\begin{pmatrix}2&3\end{pmatrix}$ □

問 4.81 （置換） 次の置換を互換の積に分解せよ．また各々の置換の符号 $\operatorname{sgn}\sigma$ を求めよ．

(1) $\begin{pmatrix}1&3&6&4\end{pmatrix}$ (2) $\begin{pmatrix}1&2&5&3&4\end{pmatrix}$ (3) $\begin{pmatrix}2&4&6\end{pmatrix}$ (4) $\begin{pmatrix}1&2&3&4&5&6&7\\3&7&4&1&2&5&6\end{pmatrix}$

(5) $\begin{pmatrix}1&2&3&4&5&6&7&8&9\\3&4&1&9&8&6&5&7&2\end{pmatrix}$ (6) $\begin{pmatrix}1&2&3&4&5&6&7&8&9\\7&6&8&2&1&4&9&3&5\end{pmatrix}$ □

問 4.82 （置換） 置換 $\sigma=\begin{pmatrix}1&2&3&4&5&6&7\\4&1&6&2&7&5&3\end{pmatrix}$ を巡回置換の積で表せ． □

問 4.83 （行列式） 次の行列式の値を求めよ．

(1) $\begin{vmatrix}1&3\\2&4\end{vmatrix}$ (2) $\begin{vmatrix}1&2\\4&-1\end{vmatrix}$ (3) $\begin{vmatrix}3&-1\\4&2\end{vmatrix}$ (4) $\begin{vmatrix}-2&5\\3&4\end{vmatrix}$ (5) $\begin{vmatrix}-1&3\\-2&-1\end{vmatrix}$ (6) $\begin{vmatrix}1&2&3\\0&5&2\\7&1&6\end{vmatrix}$ (7) $\begin{vmatrix}1&0&2\\3&0&4\\2&-5&1\end{vmatrix}$

(8) $\begin{vmatrix}3&-2&5\\-4&3&-6\\5&-3&9\end{vmatrix}$ (9) $\begin{vmatrix}3&4&5\\1&2&3\\-2&5&-4\end{vmatrix}$ (10) $\begin{vmatrix}0&0&4\\0&-5&7\\3&2&1\end{vmatrix}$ (11) $\begin{vmatrix}2&3&5\\8&13&-1\\6&-9&6\end{vmatrix}$ (12) $\begin{vmatrix}1&2&1\\2&-1&1\\3&1&2\end{vmatrix}$

(13) $\begin{vmatrix}1&2&-2\\1&5&-3\\2&7&-5\end{vmatrix}$ (14) $\begin{vmatrix}1&2&3\\4&-2&3\\2&5&-1\end{vmatrix}$ (15) $\begin{vmatrix}3&2&-4\\1&0&-2\\-2&3&3\end{vmatrix}$ (16) $\begin{vmatrix}2&1&-1\\1&3&1\\2&-1&1\end{vmatrix}$ (17) $\begin{vmatrix}1&3&3\\2&-1&-1\\4&3&3\end{vmatrix}$

(18) $\begin{vmatrix}7&3&-5\\3&-2&6\\5&5&3\end{vmatrix}$ (19) $\begin{vmatrix}3&-1&5\\3&4&-1\\-2&-1&-2\end{vmatrix}$ (20) $\begin{vmatrix}1&-4&1\\3&-6&7\\2&-1&-3\end{vmatrix}$ (21) $\begin{vmatrix}2&1&1\\-4&5&3\\-5&4&2\end{vmatrix}$ (22) $\begin{vmatrix}5&-3&14\\-5&6&7\\10&3&-7\end{vmatrix}$

(23) $\begin{vmatrix}2&16&3\\4&8&-6\\8&8&12\end{vmatrix}$ (24) $\begin{vmatrix}25&-15&10\\-10&6&4\\1&9&0\end{vmatrix}$ (25) $\begin{vmatrix}10&19&16\\6&11&13\\5&13&12\end{vmatrix}$ (26) $\begin{vmatrix}20&19&16\\12&11&13\\10&13&12\end{vmatrix}$ (27) $\begin{vmatrix}12&16&32\\-6&13&4\\15&10&-20\end{vmatrix}$

(28) $\begin{vmatrix}1/4&1/6&2/3\\1/12&1/6&1/4\\1/4&0&1/6\end{vmatrix}$ (29) $\begin{vmatrix}99&100&101\\100&99&100\\101&101&99\end{vmatrix}$ (30) $\begin{vmatrix}2&-4&-5&3\\-6&13&14&1\\1&-2&-2&-8\\2&-5&0&5\end{vmatrix}$ (31) $\begin{vmatrix}2&0&1&-2\\1&3&2&-1\\-1&5&1&1\\2&7&-6&3\end{vmatrix}$

(32) $\begin{vmatrix}1&0&5&0\\0&3&0&1\\4&0&2&0\\0&3&0&7\end{vmatrix}$ (33) $\begin{vmatrix}3&-3&-4&4\\1&0&3&5\\4&1&2&7\\-1&2&2&0\end{vmatrix}$ (34) $\begin{vmatrix}5&4&7&9\\-1&3&9&-2\\1&-3&-8&1\\5&4&2&11\end{vmatrix}$ (35) $\begin{vmatrix}1&-1&2&1\\2&-1&1&2\\-1&1&2&1\\2&1&1&1\end{vmatrix}$

(36) $\begin{vmatrix}3&1&3&5\\6&2&2&6\\-3&1&0&1\\3&1&1&6\end{vmatrix}$ (37) $\begin{vmatrix}2&-2&4&2\\2&-1&6&3\\3&-2&12&12\\-1&3&-4&4\end{vmatrix}$ (38) $\begin{vmatrix}2&-1&2&1\\4&-1&6&3\\-2&2&4&2\\-6&5&3&9\end{vmatrix}$ (39) $\begin{vmatrix}-1&-4&3&4\\1&2&-3&-2\\7&9&4&2\\-9&7&-3&6\end{vmatrix}$

(40) $\begin{vmatrix} 0 & -3 & -6 & 15 \\ -2 & 5 & 14 & 4 \\ 1 & -3 & -2 & 5 \\ 15 & 10 & 10 & -5 \end{vmatrix}$ (41) $\begin{vmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 3 \\ 0 & 2 & 0 & 0 & 5 \\ 0 & 13 & -2 & 0 & -4 \\ 0 & -6 & 1 & 2 & 2 \\ 8 & 1 & 2 & 3 & 4 \end{vmatrix}$ (42) $\begin{vmatrix} 1 & -1 & -1 & 1 & -1 \\ 1 & -1 & 1 & 1 & -1 \\ 1 & 1 & -1 & 1 & -1 \\ -1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & -1 & -1 \end{vmatrix}$

(43) $\begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 \\ 2 & 1 & 3 & 1 & 0 \\ 1 & 1 & -2 & 0 & 0 \end{vmatrix}$ (44) $\begin{vmatrix} 3 & 5 & 1 & 2 & -1 \\ 2 & 6 & 0 & 9 & 1 \\ 0 & 0 & 7 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 3 & 2 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -6 \end{vmatrix}$ (45) $\begin{vmatrix} 3 & 5 & 1 & 2 & 1 \\ 2 & 6 & 0 & 9 & 3 \\ 3 & 6 & 7 & 1 & 2 \\ 2 & 7 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 5 & 0 & 0 & 0 \end{vmatrix}$ □

問 4.84 （行列式） 次の行列式を計算せよ．

(1) $\begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ a & b & c \\ a^2 & b^2 & c^2 \end{vmatrix}$ (2) $\begin{vmatrix} a & b & c \\ a^2 & b^2 & c^2 \\ b+c & c+a & a+b \end{vmatrix}$ (3) $\begin{vmatrix} a & b & b & b \\ a & b & a & a \\ a & a & b & a \\ b & b & b & a \end{vmatrix}$ (4) $\begin{vmatrix} 0 & a & b & c \\ a & 0 & c & b \\ b & c & 0 & a \\ c & b & a & 0 \end{vmatrix}$ (5) $\begin{vmatrix} 1 & a & d & b+c \\ 1 & b & a & c+d \\ 1 & c & b & a+d \\ 1 & d & c & a+b \end{vmatrix}$

(6) $\begin{vmatrix} a & -a & -a & -a \\ b & b & -b & -b \\ c & c & c & -c \\ d & d & d & d \end{vmatrix}$ (7) $\begin{vmatrix} a+b+c & -c & -b \\ -c & a+b+c & -a \\ -b & -a & a+b+c \end{vmatrix}$ (8) $\begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1+x & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1+y & 1 \\ 1 & 1 & 1 & 1+z \end{vmatrix}$

(9) $\begin{vmatrix} x+1 & y & z & w \\ x & y+1 & z & w \\ x & y & z+1 & w \\ x & y & z & w+1 \end{vmatrix}$ (10) $\begin{vmatrix} x-2 & 4 & 3 \\ 1 & x+1 & -2 \\ 0 & 0 & x-4 \end{vmatrix}$ (11) $\begin{vmatrix} x-1 & 3 & -3 \\ -3 & x+5 & -3 \\ -6 & 6 & x-4 \end{vmatrix}$

(12) $\begin{vmatrix} 1 & a^2-bc & a^4 \\ 1 & b^2-ca & b^4 \\ 1 & c^2-ab & c^4 \end{vmatrix}$ (13) $\begin{vmatrix} a & abc & a^2 \\ b & abc & b^2 \\ c & abc & c^2 \end{vmatrix}$ (14) $\begin{vmatrix} b^2+c^2 & ab & ac \\ ab & c^2+a^2 & bc \\ ca & bc & a^2+b^2 \end{vmatrix}$ □

問 4.85 （行列式の性質） $|A+B| = |A| + |B|$ は一般的には成り立たない．その例をあげよ． □

問 4.86 （行列式の性質） A が正則行列ならば，$\det(A) \neq 0$ であり，$\det(A^{-1}) = \det(A)^{-1}$ であることを示せ． □

問 4.87 （行列式の性質） A，B，C が n 次正方行列のとき，$\begin{vmatrix} A & B \\ C & O \end{vmatrix}$ を求めよ． □

問 4.88 （行列式の性質） A，B が n 次正方行列のとき，$\begin{vmatrix} A & B \\ B & A \end{vmatrix} = \Big|A+B\Big| \Big|A-B\Big|$ を示せ． □

§ 4.14 余因子行列

定義 4.89 （余因子行列） n 次正方行列 A に対して

$$\widetilde{A} = \begin{bmatrix} \Delta_{11} & \Delta_{21} & \Delta_{31} & \cdots & \Delta_{n1} \\ \Delta_{12} & \Delta_{22} & \Delta_{32} & \cdots & \Delta_{n2} \\ \Delta_{13} & \Delta_{23} & \Delta_{33} & \cdots & \Delta_{n3} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ \Delta_{1n} & \Delta_{2n} & \Delta_{3n} & \cdots & \Delta_{nn} \end{bmatrix} \tag{760}$$

と定義される行列を A の余因子行列と呼ぶ．□

注意 4.90 （余因子行列） 余因子行列 $\widetilde{A} = [\Delta_{ji}]$ の成分の添字は転置行列のならび方であることに注意する．□

定理 4.91 （余因子行列の性質） 正方行列 A とその余因子行列 $\tilde{A}$ に対して

$$A\tilde{A} = \tilde{A}A = \det(A)E \tag{761}$$

が成立する．

（証明）$A = [a_{ij}]$, $\widetilde{A} = [\Delta_{ji}]$, $A\widetilde{A} = [c_{ij}]$ とおく．積の定義より

$$c_{ij} = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}\Delta_{jk} = a_{i1}\Delta_{j1} + a_{i2}\Delta_{j2} + \cdots + a_{in}\Delta_{jn} \tag{762}$$

である．これは $|A|$ の第 j 行の余因子展開だから

$$c_{ij} = \begin{vmatrix} a_{1,1} & a_{1,2} & \cdots & a_{1,n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{j-1,1} & a_{j-1,2} & \cdots & a_{j-1,n} \\ a_{i,1} & a_{i,2} & \cdots & a_{i,n} \\ a_{j+1,1} & a_{j+1,2} & \cdots & a_{j+1,n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n,1} & a_{n,2} & \cdots & a_{n,n} \end{vmatrix} \tag{763}$$

となる．第 j 行目に第 i 行目の成分がならぶ．$i \neq j$ であるとき第 j 行目と第 i 行目は同じ行となるから，行列式は 0 となる．$i \neq j$ のときは，行列式は $\det(A)$ と等しい．よって，

$$c_{ij} = \sum_{k=1}^{n} a_{ik}\Delta_{jk} = \det(A)\delta_{i,j} \tag{764}$$

を得る．以上より

$$A\widetilde{A} = [c_{ij}] = [\det(A)\delta_{i,j}] = \det(A)[\delta_{i,j}] = \det(A)E \tag{765}$$

が示される．$\widetilde{A}A = \det(A)E$ も同様に示される．□

§ 4.15 余因子行列と逆行列

定理 4.92 （行列式と行列の正則性） 正方行列 A に対して，$\det(A) \neq 0$ のとき A は正則である．

（証明）定理

$$A\widetilde{A} = \widetilde{A}A = \det(A)E \tag{766}$$

であるから，$\det(A) \neq 0$ とすると各辺を $\det(A)$ で割って

$$A\frac{\widetilde{A}}{\det(A)} = \frac{\widetilde{A}}{\det(A)}A = E \tag{767}$$

が成り立つ．よって $(\det(A))^{-1}\widetilde{A}$ は A の逆行列であり，A は正則である． □

定理 4.93 （余因子行列と逆行列） 正方行列 A に対して，$\det(A) \neq 0$ のとき A の逆行列は

$$A^{-1} = \frac{\tilde{A}}{\det(A)} \tag{768}$$

で与えられる． □

定理 4.94 （逆行列が存在するための十分条件） 正方行列 A, B に対して $AB = E$（または $BA = E$）が成立するとき，B は A の逆行列となる．

（証明）$AB = E$ より，両辺の行列式をとると

$$\det(AB) = \det(A)\det(B) = \det(E) = 1 \tag{769}$$

が成り立つ．これより $\det(A) \neq 0$ を得る．よって，$\det(A) \neq 0$ のとき A は正則であるから，逆行列 A^{-1} をもつ．さらに A^{-1} が存在することを用いると

$$B = EB = (A^{-1}A)B = A^{-1}(AB) = A^{-1}E = A^{-1} \tag{770}$$

が成り立つ．$B = A^{-1}$ が示された． □

例 4.95 (余因子行列による逆行列の計算の具体例)　$n = 2$ のとき逆行列は

$$A^{-1} = \frac{1}{\Delta}\begin{bmatrix} \Delta_{11} & \Delta_{21} \\ \Delta_{12} & \Delta_{22} \end{bmatrix} = \frac{1}{\det(A)}\begin{bmatrix} +|A_{11}| & -|A_{21}| \\ -|A_{12}| & +|A_{22}| \end{bmatrix} \tag{771}$$

$$= \frac{1}{\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix}}\begin{bmatrix} +|a_{22}| & -|a_{12}| \\ -|a_{21}| & +|a_{11}| \end{bmatrix} = \frac{1}{a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}}\begin{bmatrix} a_{22} & -a_{12} \\ -a_{21} & a_{11} \end{bmatrix} \tag{772}$$

である．$n = 3$ のとき逆行列は

$$A^{-1} = \frac{1}{\Delta}\begin{bmatrix} \Delta_{11} & \Delta_{21} & \Delta_{31} \\ \Delta_{12} & \Delta_{22} & \Delta_{32} \\ \Delta_{13} & \Delta_{23} & \Delta_{33} \end{bmatrix} = \frac{1}{\det(A)}\begin{bmatrix} +|A_{11}| & -|A_{21}| & +|A_{31}| \\ -|A_{12}| & +|A_{22}| & -|A_{32}| \\ +|A_{13}| & -|A_{23}| & +|A_{33}| \end{bmatrix} \tag{773}$$

$$= \frac{1}{\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix}}\begin{bmatrix} +\begin{vmatrix} a_{22} & a_{23} \\ a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} \\ a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} & +\begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} \\ a_{22} & a_{23} \end{vmatrix} \\ -\begin{vmatrix} a_{21} & a_{23} \\ a_{31} & a_{33} \end{vmatrix} & +\begin{vmatrix} a_{11} & a_{13} \\ a_{31} & a_{33} \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} a_{11} & a_{13} \\ a_{21} & a_{23} \end{vmatrix} \\ +\begin{vmatrix} a_{21} & a_{22} \\ a_{31} & a_{32} \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{31} & a_{32} \end{vmatrix} & +\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} \end{bmatrix} \tag{774}$$

である．

□

例 4.96 (余因子行列による逆行列の計算例)　行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 3 \\ -2 & 2 \end{bmatrix} \tag{775}$$

の逆行列を求める．行列式は

$$\Delta = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21} = 1 \cdot 2 - 3(-2) = 8 \tag{776}$$

であるから，逆行列は

$$A^{-1} = \frac{1}{\Delta}\begin{bmatrix} a_{22} & -a_{12} \\ -a_{21} & a_{11} \end{bmatrix} = \frac{1}{8}\begin{bmatrix} 2 & -3 \\ 2 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{1}{4} & -\frac{3}{8} \\ \frac{1}{4} & \frac{1}{8} \end{bmatrix} \tag{777}$$

で与えられる．

□

例 4.97 （余因子行列による逆行列の計算例） 行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 1 & -1 \\ 4 & 1 & 5 \end{bmatrix} \tag{778}$$

の逆行列を求める．小行列の行列式は

$$|A_{11}| = \begin{vmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 5 \end{vmatrix} = 6\,, \qquad |A_{21}| = \begin{vmatrix} 2 & 3 \\ 1 & 5 \end{vmatrix} = 7\,, \qquad |A_{31}| = \begin{vmatrix} 2 & 3 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} = -5\,, \tag{779}$$

$$|A_{12}| = \begin{vmatrix} 1 & -1 \\ 4 & 5 \end{vmatrix} = 9\,, \qquad |A_{22}| = \begin{vmatrix} 1 & 3 \\ 4 & 5 \end{vmatrix} = -7\,, \qquad |A_{32}| = \begin{vmatrix} 1 & 3 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} = -4\,, \tag{780}$$

$$|A_{13}| = \begin{vmatrix} 1 & 1 \\ 4 & 1 \end{vmatrix} = -3\,, \qquad |A_{23}| = \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 1 \end{vmatrix} = -7\,, \qquad |A_{33}| = \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} = -1 \tag{781}$$

であり，行列式は

$$|A| = \begin{vmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 1 & -1 \\ 4 & 1 & 5 \end{vmatrix} = a_{11}|A_{11}| - a_{12}|A_{12}| + a_{13}|A_{13}| = -21 \tag{782}$$

であるので，逆行列は

$$A^{-1} = \frac{1}{\Delta} \begin{bmatrix} \Delta_{11} & \Delta_{21} & \Delta_{31} \\ \Delta_{12} & \Delta_{22} & \Delta_{32} \\ \Delta_{13} & \Delta_{23} & \Delta_{33} \end{bmatrix} = \frac{1}{|A|} \begin{bmatrix} +|A_{11}| & -|A_{21}| & +|A_{31}| \\ -|A_{12}| & +|A_{22}| & -|A_{32}| \\ +|A_{13}| & -|A_{23}| & +|A_{33}| \end{bmatrix} \tag{783}$$

$$= -\frac{1}{21} \begin{bmatrix} 6 & -7 & 5 \\ -9 & -7 & 4 \\ -3 & 7 & -1 \end{bmatrix} \tag{784}$$

と与えられる． □

§ 4.16 クラメールの公式

定理 4.98 （クラメールの方法） 連立 1 次方程式 $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{b}$ に関して，係数行列

$$A=\begin{bmatrix}\boldsymbol{a}_1 & \boldsymbol{a}_2 & \cdots & \boldsymbol{a}_n\end{bmatrix} \tag{785}$$

が n 次正方行列でかつ正則なとき，方程式の解 $\boldsymbol{x}=[x_1\ x_2\ \cdots\ x_n]^T$ は

$$x_j=\frac{\det\begin{bmatrix}\boldsymbol{a}_1 & \cdots & \boldsymbol{a}_{j-1} & \boldsymbol{b} & \boldsymbol{a}_{j+1} & \cdots & \boldsymbol{a}_n\end{bmatrix}}{\det(A)},\quad j=1,2,\cdots,n \tag{786}$$

で与えられる．これをクラメールの方法（**Cramer's rule**）という．

（証明）A は正則であるから，方程式 $A\boldsymbol{x}=\boldsymbol{b}$ に左から A^{-1} を掛けると

$$\boldsymbol{x}=A^{-1}\boldsymbol{b}=\frac{1}{\det(A)}\widetilde{A}\boldsymbol{b} \tag{787}$$

が成り立つ．成分で表すと

$$\begin{bmatrix}x_1\\ \vdots\\ x_j\\ \vdots\\ x_n\end{bmatrix}=\frac{1}{|A|}\begin{bmatrix}\Delta_{11} & \Delta_{21} & \cdots & \Delta_{n1}\\ \vdots & \vdots & & \vdots\\ \Delta_{1j} & \Delta_{2j} & \cdots & \Delta_{nj}\\ \vdots & \vdots & & \vdots\\ \Delta_{1n} & \Delta_{2n} & \cdots & \Delta_{nn}\end{bmatrix}\begin{bmatrix}b_1\\ b_2\\ \vdots\\ b_n\end{bmatrix} \tag{788}$$

より

$$x_j=\frac{1}{|A|}\left(b_1\Delta_{1j}+b_2\Delta_{2j}+\cdots+b_n\Delta_{nj}\right)=\frac{1}{|A|}\sum_{k=1}^{n}b_k\Delta_{kj} \tag{789}$$

を得る．これは第 j 列の余因子展開だから

$$x_j=\frac{1}{|A|}\begin{vmatrix}a_{11} & \cdots & a_{1,j-1} & b_1 & a_{1,j+1} & \cdots & a_n\\ a_{21} & \cdots & a_{2,j-1} & b_2 & a_{1,j+1} & \cdots & a_n\\ \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots\\ a_{n1} & \cdots & a_{n,j-1} & b_n & a_{1,j+1} & \cdots & a_n\end{vmatrix}=\det\begin{bmatrix}\boldsymbol{a}_1 & \cdots & \boldsymbol{a}_{j-1} & \boldsymbol{b} & \boldsymbol{a}_{j+1} & \cdots & \boldsymbol{a}_n\end{bmatrix} \tag{790}$$

が示された． □

注意 4.99 （クラメールの方法） 解をもつためには分母 $\det(A)$ が 0 となってはいけない．$\det(A)\neq 0$ である必要がある．すなわち A は正則のときクラメールの方法は使用できる．

□

例 4.100 （クラメールの公式の使用例） 方程式

$$\begin{bmatrix} 5 & 1 \\ 3 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 \\ 2 \end{bmatrix} \tag{791}$$

を考える．行列式は

$$\det(A) = \begin{vmatrix} 5 & 1 \\ 3 & 2 \end{vmatrix} = 7 \tag{792}$$

であり，解は

$$x_1 = \frac{1}{7}\begin{vmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 2 \end{vmatrix} = \frac{4}{7}, \quad x_2 = \frac{1}{7}\begin{vmatrix} 5 & 3 \\ 3 & 2 \end{vmatrix} = \frac{1}{7} \tag{793}$$

と求まる．

□

例 4.101 （クラメールの公式の使用例） 方程式

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 3 \\ 1 & -2 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix} \tag{794}$$

の解を求める．

$$\det(A) = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 3 \\ 1 & -2 & 1 \end{vmatrix} = 5 \tag{795}$$

であり，解は

$$x_1 = \frac{1}{|A|}\begin{vmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 3 \\ -1 & -2 & 1 \end{vmatrix} = \frac{9}{5}, \tag{796}$$

$$x_2 = \frac{1}{|A|}\begin{vmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 3 \\ 1 & -1 & 1 \end{vmatrix} = \frac{6}{5}, \tag{797}$$

$$x_3 = \frac{1}{|A|}\begin{vmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & -2 & -1 \end{vmatrix} = -\frac{2}{5} \tag{798}$$

である．

□

§ 4.17 行列の簡約化と行列式

注意 4.102 （基本変形行列の行列式） 行列の行の基本変形を表す行列 $P_k^{(1)}(\alpha), P_{k,l}^{(2)}, P_{k,l}^{(3)}(\alpha)$ の行列式は

$$\det\left(P_k^{(1)}(\alpha)\right) = \alpha\,, \quad \det\left(P_{k,l}^{(2)}\right) = -1\,, \quad \det\left(P_{k,l}^{(3)}(\alpha)\right) = 1 \tag{799}$$

である．

□

問 4.103 （基本変形行列の行列式） これを示せ．

□

定理 4.104 （基本変形の正則性） A が正則であるとき，行の基本変形をして得た行列 B もまた正則である．

（証明）行の基本変形は $B = P^{(\nu)}A$ $(\nu = 1, 2, 3)$ と表される．両辺の行列式をとると

$$\det(B) = \det\left(P^{(\nu)}\right)\det(A) \tag{800}$$

となる．A が正則なとき $\det(A) \neq 0$ である．$\det(P^{(\nu)}) \neq 0$ であるから，$\det(B) \neq 0$ を得る．よって B も正則である．

□

定理 4.105 （行列の簡約化の正則性） 行列 A が正則なとき簡約化して得た階段行列 B も正則である．

（証明）簡約化は行の基本変形を繰り返し行う変換である．正則な行列は正則な行列に写される．これを繰り返して得られた行列 B もまた正則である．

□

§ 4.18 ちょっとまとめ

定理 4.106 （行列式の性質） n 次正方行列 A に対して次の条件は等価である．

(1) $\det(A) \neq 0$

(2) A は正則である．

(3) $\mathrm{rank}\,(A) = n$

(4) A は E に簡約化される．

(5) A は逆行列 $A^{-1} = \dfrac{\widetilde{A}}{|A|}$ をもつ．

(6) 方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ は一意な解 $x_j = \dfrac{|\cdots \boldsymbol{a}_{j-1}\ \boldsymbol{b}\ \boldsymbol{a}_{j+1}\cdots|}{|A|}$ をもつ．

□

定理 4.107 （行列式の性質） n 次正方行列 A に対して次の条件は等価である．

(1) $\det(A) = 0$

(2) A は非正則である．

(3) $\mathrm{rank}\,(A) < n$

(4) A は E に簡約化されない．

(5) A は逆行列をもたない．

(6) 方程式 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$ は一意な解をもたない．
（任意定数を含む解をもつ．もしくは，解をもたない．）

□

§ 4.19 行列式と面積

行列式の図形上の意味を考える．まず $n = 2$ のときを考える．

$$S = \pm \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} = \pm \det \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 & \boldsymbol{a}_2 \end{bmatrix} \tag{801}$$

は頂点が O, $A(\boldsymbol{a}_1)$, $B(\boldsymbol{a}_2)$, $C(\boldsymbol{a}_1 + \boldsymbol{a}_2)$ である平行四辺形の面積となる．ただし

$$\mathbb{R}^2 \ni \boldsymbol{a}_1 = \begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_2 = \begin{bmatrix} a_{12} \\ a_{22} \end{bmatrix} \tag{802}$$

である．符号は $\boldsymbol{a}_1$ から $\boldsymbol{a}_2$ が反時計回りのときが正であり，時計回りのとき負である．

$$V = \pm \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} = \pm \det \begin{bmatrix} \boldsymbol{a}_1 & \boldsymbol{a}_2 & \boldsymbol{a}_3 \end{bmatrix} = \pm [\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{a}_2, \boldsymbol{a}_3] \tag{803}$$

は頂点が O, $A(\boldsymbol{a}_1)$, $B(\boldsymbol{a}_2)$, $C(\boldsymbol{a}_3)$, $D(\boldsymbol{a}_1 + \boldsymbol{a}_2)$, $E(\boldsymbol{a}_1 + \boldsymbol{a}_3)$, $F(\boldsymbol{a}_2 + \boldsymbol{a}_3)$, $G(\boldsymbol{a}_1 + \boldsymbol{a}_2 + \boldsymbol{a}_3)$ である平行 6 面体の体積となる．ただし

$$\mathbb{R}^3 \ni \boldsymbol{a}_1 = \begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ a_{31} \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_2 = \begin{bmatrix} a_{12} \\ a_{22} \\ a_{32} \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{a}_3 = \begin{bmatrix} a_{13} \\ a_{23} \\ a_{33} \end{bmatrix} \tag{804}$$

である．$[\boldsymbol{a}_1, \boldsymbol{a}_2, \boldsymbol{a}_3]$ はスカラー三重積であることに注意する．符号は $\boldsymbol{a}_1$, $\boldsymbol{a}_2$, $\boldsymbol{a}_3$ が右手系のとき正であり，左手系のとき負となる．

§ 4.20 いろいろな行列式

定理 4.108 （ファンデアモントの行列式） 行列式

$$V=\overbrace{\begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & 1 \\ x_1 & x_2 & \cdots & x_2 \\ (x_1)^2 & (x_2)^2 & \cdots & (x_n)^2 \\ (x_1)^3 & (x_2)^3 & \cdots & (x_n)^3 \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ (x_1)^{n-1} & (x_2)^{n-1} & \cdots & (x_n)^{n-1} \end{vmatrix}}^{n} \tag{805}$$

をファンデアモントの行列式という．V は

$$V=\prod_{i\leq i<j\leq n}(x_j-x_i)=(-1)^{\frac{n(n-1)}{2}}\prod_{i\leq i<j\leq n}(x_i-x_j) \tag{806}$$

と与えられる．

□

問 4.109 （ファンデアモントの行列式） これを示せ．

（証明）行列式を

$$V(x_1,x_2,\cdots,x_n)=\overbrace{\begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & 1 \\ x_1 & x_2 & \cdots & x_n \\ {x_1}^2 & {x_2}^2 & \cdots & {x_n}^2 \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ {x_1}^{n-2} & {x_2}^{n-2} & \cdots & {x_n}^{n-2} \\ {x_1}^{n-1} & {x_2}^{n-1} & \cdots & {x_n}^{n-1} \end{vmatrix}}^{n} \tag{807}$$

とおく．第 $n-1$ 行に $-x_1$ をかけて第 n 行に加える．第 $n-2$ 行に $-x_1$ をかけて第 $n-1$ 行に加える．第 $n-3$ 行に $-x_1$ をかけて第 $n-2$ 行に加える．同様に繰り返して，第 1 行に $-x_1$ をかけて第 2 行に加える．すると

$$V(x_1,x_2,\cdots,x_n)=\overbrace{\begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 & \cdots & 1 \\ 0 & x_2-x_1 & x_3-x_1 & \cdots & x_n-x_1 \\ 0 & x_2(x_2-x_1) & x_3(x_3-x_1) & \cdots & x_n(x_n-x_1) \\ 0 & {x_2}^2(x_2-x_1) & {x_3}^2(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^2(x_n-x_1) \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 0 & {x_2}^{n-3}(x_2-x_1) & {x_3}^{n-3}(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^{n-3}(x_n-x_1) \\ 0 & {x_2}^{n-2}(x_2-x_1) & {x_3}^{n-2}(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^{n-2}(x_n-x_1) \end{vmatrix}}^{n} \tag{808}$$

を得る．第 $(1,1)$ 成分で展開すると

$$V(x_1,x_2,\cdots,x_n)=\overbrace{\begin{vmatrix} x_2-x_1 & x_3-x_1 & \cdots & x_n-x_n \\ x_2(x_2-x_1) & x_3(x_3-x_1) & \cdots & x_n(x_n-x_1) \\ {x_2}^2(x_2-x_1) & {x_3}^2(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^2(x_n-x_1) \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ {x_2}^{n-3}(x_2-x_1) & {x_3}^{n-3}(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^{n-3}(x_n-x_1) \\ {x_2}^{n-2}(x_2-x_1) & {x_3}^{n-2}(x_3-x_1) & \cdots & {x_n}^{n-2}(x_n-x_1) \end{vmatrix}}^{n-1} \tag{809}$$

となる．第 1 列は x_2-x_1 を共通因子としてもつ．第 2 列は x_3-x_1 を共通因子としてもつ．同様にして第 j 列 $(j=1,2,\cdots,n-1)$ は x_j-x_1 を共通因子としてもつ．共通因子を行列式の外にくくり出すと

$$V(x_1,x_2,\cdots,x_n)=(x_2-x_1)(x_3-x_1)\cdots(x_n-x_1)\overbrace{\begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & 1 \\ x_2 & x_3 & \cdots & x_n \\ {x_2}^2 & {x_3}^2 & \cdots & {x_n}^2 \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ {x_2}^{n-3} & {x_3}^{n-3} & \cdots & {x_n}^{n-3} \\ {x_2}^{n-2} & {x_3}^{n-2} & \cdots & {x_n}^{n-2} \end{vmatrix}}^{n-1} \tag{810}$$

である．このとき

$$V(x_1,x_2,\cdots,x_n)=\left(\prod_{1<j\leq n}(x_j-x_1)\right)V(x_2,x_3,\cdots,x_n) \tag{811}$$

が成り立つ．行列式のサイズがひとつ小さくなった．これを繰り返すと

$$\begin{aligned} &V(x_1,x_2,\cdots,x_n) && (812)\\ &=\left(\prod_{1<j\leq n}(x_j-x_1)\right)\left(\prod_{2<j\leq n}(x_j-x_2)\right)V(x_3,x_4,\cdots,x_n) && (813)\\ &=\left(\prod_{1<j\leq n}(x_j-x_1)\right)\left(\prod_{2<j\leq n}(x_j-x_2)\right)\cdots\left(\prod_{n-2<j\leq n}(x_j-x_{n-2})\right)V(x_{n-1},x_n) && (814)\\ &=\left(\prod_{1<j\leq n}(x_j-x_1)\right)\left(\prod_{2<j\leq n}(x_j-x_2)\right)\cdots\left(\prod_{n-2<j\leq n}(x_j-x_{n-2})\right)\left(\prod_{n-1<j\leq n}(x_j-x_{n-1})\right) && (815)\\ &=\prod_{1\leq i<j\leq n}(x_j-x_i) && (816) \end{aligned}$$

を得る．

□

例 4.110 （ファンデアモントの具体例）

$$V(x_1, x_2) = \begin{vmatrix} 1 & 1 \\ x_1 & x_2 \end{vmatrix} = x_2 - x_1 \,. \tag{817}$$

$$V(x_1, x_2, x_3) = \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ x_1 & x_2 & x_3 \\ {x_1}^2 & {x_2}^2 & {x_3}^2 \end{vmatrix} = (x_2 - x_1)(x_3 - x_1)(x_3 - x_2) \,. \tag{818}$$

$$V(x_1, x_2, x_3, x_4) = \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ x_1 & x_2 & x_3 & x_4 \\ {x_1}^2 & {x_2}^2 & {x_3}^2 & {x_4}^2 \\ {x_1}^3 & {x_2}^3 & {x_3}^3 & {x_4}^3 \end{vmatrix} \tag{819}$$

$$= (x_2 - x_1)(x_3 - x_1)(x_4 - x_1)(x_3 - x_2)(x_4 - x_2)(x_4 - x_3) \,. \tag{820}$$

□

定義 4.111 （コンパニオン行列式） 行列式

$$F=\underbrace{\begin{vmatrix} a_0 & -1 & & & \\ a_1 & x & -1 & & \\ a_2 & & x & -1 & \\ \vdots & & & \ddots & \ddots \\ a_{n-1} & & & & \ddots & -1 \\ a_n & & & & & x \end{vmatrix}}_{n+1} \tag{821}$$

をコンパニオン行列式（**companion determinant**）という．□

定理 4.112 コンパニオン行列式は

$$F=a_0x^n+a_1x^{n-1}+\cdots+a_{n-2}x^2+a_{n-1}x+a_n \tag{822}$$

が成り立つ．

（証明）行列式を

$$F(a_0,a_1,a_2,\cdots,a_{n-1},a_n;x)=\underbrace{\begin{vmatrix} a_0 & -1 & & & \\ a_1 & x & -1 & & \\ a_2 & & x & -1 & \\ \vdots & & & \ddots & \ddots \\ a_{n-1} & & & & \ddots & -1 \\ a_n & & & & & x \end{vmatrix}}_{n+1} \tag{823}$$

とおく．第 1 行目を余因子展開すると

$$F(a_0,a_1,\cdots,a_n;x)=a_0\underbrace{\begin{vmatrix} x & -1 & & & \\ & x & -1 & & \\ & & \ddots & \ddots & \\ & & & \ddots & -1 \\ & & & & x \end{vmatrix}}_{n}-(-1)\underbrace{\begin{vmatrix} a_1 & -1 & & & \\ a_2 & x & -1 & & \\ \vdots & & \ddots & \ddots & \\ a_{n-1} & & & \ddots & -1 \\ a_n & & & & x \end{vmatrix}}_{n} \tag{824}$$

となる．前の項の行列式は上三角行列なので対角線分の積で表される．後の項の行列式はサイズと係数が異なるコンパニオン行列式となる．よって

$$F(\overbrace{a_0,a_1,\cdots,a_n}^{n+1};x)=a_0x^n+F(\overbrace{a_1,\cdots,a_n}^{n};x) \tag{825}$$

と表される．これを繰り返すと

$$F(\overbrace{a_0, a_1, \cdots, a_n}^{n+1}; x) = a_0x^n + F(\overbrace{a_1, \cdots, a_n}^{n}; x) \tag{826}$$

$$= a_0x^n + a_1x^{n-1} + F(\overbrace{a_2, \cdots, a_n}^{n-1}; x) \tag{827}$$

$$= a_0x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + F(\overbrace{a_3, \cdots, a_n}^{n-2}; x) \tag{828}$$

$$= a_0x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \cdots + a_{n-2}x^2 + F(\overbrace{a_{n-1}, a_n}^{2}; x) \tag{829}$$

$$= a_0x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \cdots + a_{n-2}x^2 + a_{n-1}x + a_n \tag{830}$$

を得る．

□

例 4.113 （コンパニオン行列式の具体例）

$$F(a_0, a_1; x) = \begin{vmatrix} a_0 & -1 \\ a_1 & x \end{vmatrix} = a_0x - (-1)a_1 = a_0x + a_1\,. \tag{831}$$

$$F(a_0, a_1, a_2; x) = \begin{vmatrix} a_0 & -1 & \\ a_1 & x & -1 \\ a_2 & & x \end{vmatrix} = a_0 \begin{vmatrix} x & -1 \\ & x \end{vmatrix} - (-1) \begin{vmatrix} a_1 & -1 \\ a_2 & x \end{vmatrix} \tag{832}$$

$$= a_0x^2 + a_1x - (-1)a_2 = a_0x^2 + a_1x + a_2\,. \tag{833}$$

$$F(a_0, a_1, a_2, a_3; x) = \begin{vmatrix} a_0 & -1 & & \\ a_1 & x & -1 & \\ a_2 & & x & -1 \\ a_3 & & & x \end{vmatrix} = a_0 \begin{vmatrix} x & -1 & \\ & x & -1 \\ & & x \end{vmatrix} - (-1) \begin{vmatrix} a_1 & -1 & \\ a_2 & x & -1 \\ a_3 & & x \end{vmatrix} \tag{834}$$

$$= a_0x^3 + a_1x^2 + a_2x + a_3\,. \tag{835}$$

□

問 4.114 （行列式の計算）

$$\begin{vmatrix} 1 & a & b & c+d \\ 1 & b & c & d+a \\ 1 & d & d & a+b \\ 1 & d & a & b+c \end{vmatrix} = 0 \tag{836}$$

となることを示せ．

（証明）

$$\begin{vmatrix} 1 & a & b & c+d \\ 1 & b & c & d+a \\ 1 & d & d & a+b \\ 1 & d & a & b+c \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & a & b & a+b+c+d \\ 1 & b & c & a+b+c+d \\ 1 & d & d & a+b+c+d \\ 1 & d & a & a+b+c+d \end{vmatrix} = (a+b+c+d) \begin{vmatrix} 1 & a & b & 1 \\ 1 & b & c & 1 \\ 1 & d & d & 1 \\ 1 & d & a & 1 \end{vmatrix} = 0\,. \tag{837}$$

□

§ 4.21 演習問題 ~ 余因子行列，クラメルの公式

問 4.115 （余因子行列） 次の行列の逆行列を余因子行列を用いて求めよ．

(1) $\begin{bmatrix} 3 & -1 \\ 1 & 2 \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 2 & 1 \\ -5 & -4 \end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix} \cos\theta & -\sin\theta \\ \sin\theta & \cos\theta \end{bmatrix}$ (4) $\frac{1}{2}\begin{bmatrix} 1 & -\sqrt{3} \\ \sqrt{3} & 1 \end{bmatrix}$ (5) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 1 & -1 \\ 4 & 1 & 5 \end{bmatrix}$

(6) $\begin{bmatrix} 1 & -2 & 2 \\ 4 & 1 & -1 \\ 2 & -1 & 3 \end{bmatrix}$ (7) $\begin{bmatrix} 2 & 4 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 0 & 5 & -1 \end{bmatrix}$ (8) $\begin{bmatrix} 2 & -1 & -2 \\ -1 & 0 & 3 \\ 3 & -2 & 5 \end{bmatrix}$ (9) $\begin{bmatrix} a & 0 & 0 \\ d & b & 0 \\ e & f & c \end{bmatrix}$ (10) $\begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 \\ 1 & -1 & 2 \\ -1 & 0 & -1 \end{bmatrix}$

(11) $\begin{bmatrix} x-2 & 1 & 1 \\ 0 & 2x-1 & x-1 \\ -2 & 1 & 1 \end{bmatrix}$ (12) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \\ 1 & -1 & 1 \end{bmatrix}$ (13) $\begin{bmatrix} 2 & 3 & 2 \\ 3 & 1 & -2 \\ -1 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ (14) $\begin{bmatrix} 3 & 1 & 0 \\ 2 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & 1 \end{bmatrix}$

(15) $\begin{bmatrix} 2 & -1 & 1 \\ 1 & 2 & -2 \\ 3 & 1 & 0 \end{bmatrix}$ (16) $\begin{bmatrix} 1 & -2 & 0 \\ 2 & -1 & 1 \\ 0 & 3 & 1 \end{bmatrix}$ (17) $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 2 & -3 & 4 \\ 0 & 2 & 1 \end{bmatrix}$ (18) $\begin{bmatrix} 1 & 2 & -3 \\ 2 & -3 & 1 \\ 8 & 1 & -5 \end{bmatrix}$ □

問 4.116 （余因子行列） A は n 次の正方行列とする．このとき余因子行列 $\tilde{A}$ が $\det(\tilde{A}) = \det(A)^{n-1}$ であることを示せ． □

問 4.117 （余因子行列） A が対称行列ならば余因子行列 $\tilde{A}$ も対称行列であることを示せ．また A がさらに正則ならば A^{-1} も対称行列であることを示せ． □

問 4.118 （余因子行列） A が交代行列のとき余因子行列 $\tilde{A}$ は交代行列となるか答えよ．
□

問 4.119 （クラメルの公式） 次の連立方程式をクラメルの公式を用いて解け．

(1) $\begin{cases} 2x - 3y = 13 \\ 4x + 5y = -7 \end{cases}$ (2) $\begin{cases} 5x + y = 3 \\ 3x + 2y = 2 \end{cases}$ (3) $\begin{cases} 4x - 2y = 1 \\ 3x - y = 2 \end{cases}$ (4) $\begin{cases} 2x + 3y = 9 \\ -3x + 5y = -23 \end{cases}$

(5) $\begin{cases} 3x + 2y = 1 \\ 2x - 3y = 18 \end{cases}$ (6) $\begin{cases} 0.7x + 0.6y = 50 \\ 0.3x + 0.4y = 30 \end{cases}$ (7) $\begin{cases} \frac{4}{5}x - \frac{3}{5}y = 1 \\ \frac{3}{5}x + \frac{4}{5}y = 2 \end{cases}$ (8) $\begin{cases} \sqrt{3}x - y = 1 \\ x + \sqrt{3}y = \sqrt{3} \end{cases}$

(9) $\begin{cases} (\cos\alpha)x - (\sin\alpha)y = \cos\beta \\ (\sin\alpha)x + (\cos\alpha)y = \sin\beta \end{cases}$ (10) $\begin{cases} 2x + 3y + z = 7 \\ x + y - z = 4 \\ 3x + y - z = 6 \end{cases}$ (11) $\begin{cases} x + y - z = 1 \\ 2x + 3y + z = 6 \\ x - 4y + 3z = 0 \end{cases}$

(12) $\begin{cases} x + y + z = 6 \\ 3x + 2y - 2z = 1 \\ 2x - y + 3z = 9 \end{cases}$ (13) $\begin{cases} x - y + 2z = 8 \\ 2x + 3y + z = 5 \\ -x + 4y + 4z = 1 \end{cases}$ (14) $\begin{cases} 2x - y + 3z = 8 \\ -3x + 2y + 4z = -4 \\ -2x - y - 2z = -5 \end{cases}$

(15) $\begin{cases} x - 2y + z = 0 \\ x + y - z = 1 \\ 2x - y + 3z = 2 \end{cases}$ (16) $\begin{cases} 2x - y - z = 3 \\ 3x + y + 5z = 5 \\ x + y + 3z = 2 \end{cases}$ (17) $\begin{cases} -3x - y + z = 5 \\ 2x + y = -3 \\ -5x - y + z = 9 \end{cases}$

(18) $\begin{cases} x-y=-4 \\ 2x-3y+z=-3 \\ x+y-5z=12 \end{cases}$ (19) $\begin{cases} x+2y+3z=-3 \\ -2x+y+4z=-14 \\ 3x+2y-z=9 \end{cases}$ (20) $\begin{cases} 2x-y+z-u=4 \\ x-y-z+u=5 \\ -2x+2y+z+2u=-4 \\ -x+y-z+3u=3 \end{cases}$

(21) $\begin{cases} -3x-y+z+u=4 \\ 2x+y-u=-2 \\ -5x-y+z+4u=5 \\ x+y+z+u=-2 \end{cases}$ (22) $\begin{cases} x+z+2u=6 \\ -2x+y+4z+u=3 \\ 4x-3y-4z+u=-3 \\ -x+y+2z+u=4 \end{cases}$ □

問 4.120 （クラメルの公式） 次の方程式が一意な解をもつための条件とそのときの解を定めよ．

(1) $\begin{bmatrix} a & 0 & b \\ b & a & 0 \\ b & 0 & a \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b \\ 1 \\ a \end{bmatrix}$ (2) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ a & b & c \\ a^2 & b^2 & c^2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}$ (3) $\begin{bmatrix} 0 & a & 1 \\ 1 & 0 & c \\ b & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a \\ b \\ c \end{bmatrix}$

(4) $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ a & 1 & a \\ b & b & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix}$ □